

**2006年度
渥美国際交流奨学財団年報**

Atsumi International Scholarship Foundation

Annual Report



渥美健夫氏遺影

渥美国際交流奨学財団は故渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志に基づき日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて、1994年4月1日に設立されました。

当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に奨学援助をいたします。

日本にやって来た留学生の皆さんが、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思えます。

若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道が開かれてゆくことを願っております。

2006年度 渥美国際交流奨学財団年報

目 次

◇ 理事長のこぼ「ケーデンホーフ伯爵と父：共同体への夢」	渥美伊都子	-----	2
◇ 常務理事オピニオン「留学生数というものさし」	今西淳子	-----	4
◇ 交流事業・思い出			
・軽井沢旅行		-----	6
・渥美奨学生の集い 講演：三井物産戦略研究所所長・寺島実郎様「21世紀、日本の進路」		-----	9
・新年会		-----	10
・研究報告会		-----	11
◇ 2006年度渥美奨学生のページ「エッセイ」		-----	14
◇ 2007年度渥美奨学生のページ「自己紹介」		-----	28
◇ 2006年度海外学会派遣プログラム参加報告		-----	41
◇ A I S Fネットワーク			
・ラクーン会		-----	45
・第6回日韓アジア未来フォーラム		-----	58
・第1回S G R A北京フォーラム		-----	60
・関口グローバル研究会 (S G R A)		-----	62
■ 渥美奨学生2006年度著作・発表論文・特許リスト		-----	64
□ 付録		-----	80
・設立の趣旨について			
・2006年度収支決算、貸借対照表			
・財団人名簿			
・奨学生名簿			
・2008年度渥美奨学生募集概要			



「クーデンホーフ伯爵と父：共同体への夢」

渥美伊都子

13年目を迎えた渥美国際交流奨学財団の奨学生は本年度の奨学生を加え154名となり年々ネットワークは広がっております。これも一重にご支援くださる皆様方の賜物と心より感謝申し上げます。そして奨学生を終えた研究者たちで立ち上げたS G R A (関口グローバル研究会)も活発に活動しており、徐々に成果も上がっております。フォーラムも東京や軽井沢だけでなく、ソウルや北京やマニラでも開催され、またメールマガジン「S G R Aかわらばん」も始まり、日本に留学された外国人研究者の方々の声を聞く「場」がさらに増えていくと良いと思っております。

* * *

さて先日今井浜の別荘に行き、何気なく書棚を開けるとクーデンホーフ・カレルギー全集が目にとまりました。

した。クーデンホーフ伯爵は、欧州統合を提唱し「欧州連合の理念の先駆者」とされる方です。本を取り出して頁をめくると1945年の出版とあり、当時のことを懐かしく思い出しました。父、鹿島守之助はクーデンホーフ伯爵を尊敬しており何かにつけ子供の頃から話を聞かされておりました。

クーデンホーフ伯爵に初めてお目にかかったのは、鹿島平和賞の授賞式のため、夫人とお嬢様を同伴して来日された時でした。クーデンホーフ伯爵の印象は、温厚なヨーロッパ貴族の風貌で、とても偉大な政治家であり哲学者とは思われませんでした。体調を崩し車椅子の夫人を気遣いながらの七十余年ぶりの来日でした。父は盛大な式典を開き第一回鹿島平和賞を授与し功績を称えました。後に父は生涯忘れがたい喜びであったと回想しています。





クーデンホーフ伯は明治二十七年(1894年)当時駐日オーストリア代理公使であられた父ハインリヒと日本婦人青山光子との間に、二男として東京に生まれました。日本名をエイジロウといいます。二歳にして日本を離れて以来、鹿島の招待で来日するまで日本との関係は閉ざされていました。

私の父がクーデンホーフ伯を最初に知る機縁となったのは、父が外務省一等書記官でベルリンに在勤しドイツの政情調査を担当していた時に、ドイツの一新聞紙上に掲載された同伯のパン・ヨーロッパ構想を読み、その要旨を本田大使に報告したところ、よく知っているからと云われ同伯夫妻がベルリンに来遊された際、大使が夫妻を官邸に招待して紹介してくださいました。なおこの時に同伯夫人が当時ヨーロッパの三大女優の一人イダ・ローランであることを知ります。それから数日後クーデンホーフ伯からパン・ヨーロッパに関する講演会に招待され直接その構想を聞いて強く感動したようです。そしてパン・ヨーロッパの翻訳を引き受け、以来同伯と大変親しくなりました。

クーデンホーフ氏は、父に情熱をこめて次のように語られました。「世界平和のために今日国際連盟は不可欠である。各国は五大組織の下に再配列すべきで、現在す

でパン・アメリカとソビエト連邦、及び大英帝国の三つの組織がほぼ出来上がっているが、ヨーロッパとアジアが未組織である。自分はこれからヨーロッパを組織化しパン・ヨーロッパの実現に全力を注ぐから君もアジアの組織化をやるべきである。パン・ヨーロッパとパン・アジアは提携し、真の世界平和の実現に努力しようではないか」と。

いたく感激した父はその後、引続き彼の著書の翻訳を次々に出版し、彼の伝記を含め合計十六冊に及んでおります。これ等をまとめたのが全集となりました。

父は生涯パン・アジア構想の夢を追い続けました。もし父が、今の時代に現れて、ヨーロッパでは共通通貨を有する共同体が既に実現し、アジアにおいても共同体が語られるようになったことを知ったら、さぞかし喜ぶだろうと思います。

留学生数というものさし

常務理事 今西淳子



ウクライナ キエフ訪問時の筆者

少し前のことですが、気になった文章がありました。

完全な比較にはならないが、昭和2年（1927年）の我国の文部省在外研究員の留学先の比率は次のとおりであった。

イギリス	13.7%	60名
アメリカ	7.3%	32名
フランス	6.4%	28名
ドイツ	44.2%	193名

（総数 437名）

ここでの留学者は、官公立学校の教官に限られているが、留学先としてはドイツ一国で総数のほぼ半数を占めている。当時の我国の学会の評価を示しているというべきであろう。

これに対して私費留学が大半を占める現在（1998年～2000年度）の海外への日本の留学生の留学先は次のようである。

（総数 78,000人）

アメリカ	46,900人	60.1%
中国	12,800人	16.4%
韓国	2,000人	7.3%
ドイツ	2,000人	2.6%
オーストラリア	1,800人	2.3%
フランス	1,300人	1.7%

僅か80年に満たない間にアメリカの割合は8倍になり、ドイツの割合は17分の1に激減している。（鹿島平和研究所「平成大不況を考える」2002年、p166-7）

以上は、文末に注としてつけられている部分ですが、本文で平泉渉会長は、「1920年代のドイツは、第一次大戦に敗北し、天文学的なインフレに苦しんだとはいえ、学術・文化の面では正に世界の中心であり続けた。（略）およそ学問のあらゆる分野でドイツの各大学は国際的な

名声あふれる教授陣を持ち、そのキャンパスは全世界からの（略）留学生にわきかえっていた。第二次大戦後のドイツでは当時の盛況の片鱗も窺うことはできない。ナチスはドイツの偉大な文化と学術の伝統をすら、遂に断ち切ることに成功したのかもしれない」と語っておられます。

私が興味をひかれたのは、政治経済を語る論文で「国家の魅力」をはかる「ものさし」として、留学生数が使われていることでした。この文章を思いだしたのは、先日発表された統計で、日本で学ぶ留学生の数が減少したからです。日本学生支援機構のデータによると、2006年5月1日現在の日本の留学生数は対前年度3,885人減の117,927人でした。1983年から日本政府が進めてきた「留学生受入10万人計画」が、2003年に達成されて喜んだのもつかの間、留学生数は減少したのです。

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data05.html

私がさらに心配になったのは、アメリカで勉強している日本人留学生数も減少したことです。Open Doorが発表したデータによると、アメリカで勉強している留学生の出身国のトップ5は次のとおりです。（2006年）

1. インド 76,503人（前年比 -4.9%）
2. 中国 62,582人（前年比 +0.1%）
3. 韓国 58,847人（前年比 +10.3%）
4. 日本 38,712人（前年比 -8.3%）
5. カナダ 28,202人（前年比 +0.2%）

（総数 564,766人）

<http://opendoors.iienetwork.org/?p=89191>

2005年11月に留学生をテーマにしたS G R Aフォーラムを行いました。基調講演で、一橋大学の横田雅弘

教授は、「私が2年ぐらい前にもらった、オーストラリアが行った全世界の留学生数の予測によれば、2000年で190万人だったものが、2025年には700万人になるという数字でした。つい最近ドイツが最新の調査として発表したところによると、2004年に270万人になっているということなので、この計算でいくと20年後には実に700万人近くになるということになりましょう。」と紹介されていますが、現在、全世界の留学生の数は劇的に増えています。その中で、日本人の留学生も、日本で受け入れている留学生も減っているのは、何かの警鐘なのではないでしょうか。

昨年6月に中国教育部が発表した中国の外国人留学生のデータが、日本の統計と比較して「アジアの友」(2006年7月号)に掲載されています。ここで紹介されている人民日報の記事によれば、2005年の中国における外国人留学生の数は、14.1万人あまりで、前年度に比べ27.28%増ということです。

	中国の留学生	日本の留学生
アジア	106,840 (75.7%)	114,300 (93.8%)
欧州	16,463 (11.7%)	3,106 (2.5%)
北中南米	13,221 (9.4%)	2,949 (2.4%)
アフリカ	2,757 (2.0%)	957 (0.8%)
オセアニア	1,806 (1.3%)	500 (0.4%)
合計	141,087 (100.0%)	121,812 (100.0%)

(<http://www.abk.or.jp/asia/pdf/20060713b.pdf>)

日本と違って、中国はアジアの国だけでなく、欧米をはじめ全世界からの留学生をかなりの割合で惹きつけていることがこの比較統計に表れています。以前にドイツ人の若者に、「キャリアアップのために、アジアの言葉を習いたいんだけど、中国語と日本語とどちらがいいだろう」と相談を持ちかけられた時のことを思い出しました。勿論、「日本政府奨学金もありますよ!」と言いましたが、そんな簡単に合格できるものでもありませんし、仕事をしてためた貯金を使ってキャリアアップのために1年間だけ留学して語学力をつけようという彼にとって、中国の大学の間口の方がはるかに広いということを説明せざるをえませんでした。ノルウェイの大学院から国際関係学で修士号を得たコスタリカ人の若者は、英語で受けられる日本の博士課程で憲法九条を学びに留学したいと思いましたが、結局奨学金も含めて受け皿が見つかりませんでした。そういえば、一昔前、英語で日本経

済を学びたいければ、日本に留学せずにスタンフォード大学に行きなさいといわれていたと聞きました。日本に関心があるのに日本には留学できないのです。

アメリカ留学が減っている日本人留学生でさえ、中国では増えているようです。2003年に中国で勉強していた日本人留学生は12,765人でしたが、2006年には18,874人で、3年間に約50%の増加となります。

現在のおおよその国別留学生数は次の通りです。

アメリカ	57万人
イギリス	28万人
ドイツ	18万人
フランス	18万人
オーストラリア	14万人
中国	14万人
日本	12万人

80年後に「各大学は、およそ学問のあらゆる分野で国際的な名声あふれる教授陣を持ち、そのキャンパスは全世界からの留学生にわきかえ」っている国はどこでしょう?日本政府や大学は、そして私たちは、留学生数の減少を入国管理局の責任に転嫁せずに、全世界からの留学生をひきつけることのできる日本の魅力は何なのか、どうすればその魅力を世界の人々と分かち合えるのか、真剣に考えなければいけない崖っぷちに立たされているような気がしてなりません。

(2007.1.26「SGRAかわらばん」41号から転載)

交流事業・思い出

軽井沢旅行

今年の軽井沢はラッキーだった！

記録的な大雨で日本列島各地で憂鬱なニュースばかりが聞こえてくる中、2006年度の渥美財団軽井沢レクリエーション旅行が開催されました。新幹線に身を乗せて走ること1時間半。軽井沢にも雨は降り続けていました。駅まで私たちを迎えに来てくださった今西さん（渥美財団常務理事）によると、現役奨学生とラクーンたちが交流する軽井沢旅行が1995年に始まって以来、雨天で予定が変更されるのは今回が初めてとのことでした。予定されていた離山へのハイキングがキャンセルになったのでした。そのかわり、私たちは昼食をとった後、駅周辺にあるショッピングセンターで自由に買い物などをしながら軽井沢との初対面を楽しみました。

3日間私たちがお世話になる研修センターに旅装を解いた後、理事長を囲んでのオリエンテーションでは、マキトさん（1995年ラクーン）がパワーポイントを使って作られた可愛らしい資料を見ながら、ヴォヴォとラカに軽井沢のバーチャル旅行を案内してもらいました。続々家族連れのラクーンたちが研修センターに集まってくるなか、いつの間にか空も晴れていき、やがて雨も止んできました。おかげで、半分あきらめていた花火とスイカ割りも無事終了。子供たちはもちろんのこと、大人たちもみんな童心に返って夏夜の情緒をたっぷり満喫しました。



午後8時半から、研修センター会議室で軽井沢セミナーが開かれました。最近焦眉の関心事になっている北朝鮮問題について、李鋼哲さん（1999年ラクーン）と今年度奨学生の李成日さんが、時には真剣に、時にはユーモアを交えて、分かりやすく説明して下さいました。フロアからの質疑と議論も活発で、それこそ「地球村」という想像の共同体が具現された貴重な場になったのではないかと、感心したものです。セミナーの延長としての飲み会は深夜の2時まで賑やかでした。

2日目の朝には、晴れきった青空と澄み切った森の



空気が狸たちを目覚めさせてくれました。きのうまで雨が一ヶ月間も止まらずに降り続いていたというのに。「奇跡」とはこういう時に使う言葉でしょうか。午後の2時から「第24回SGRAフォーラム in 軽井沢」が、夕食会を挟んで9時まで行われました。「ごみ処理と国境を越える資源循環」をテーマにした今回のフォーラムは、すぐれた自然に囲まれて心身ともに満足感が味わえる軽井沢で開かれたからこそ、環境の大事さをつくづく考えさせるものがありました。フォーラムで議論された先生方の貴重なお話とその時の写真は次のサイトをご覧ください。
<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

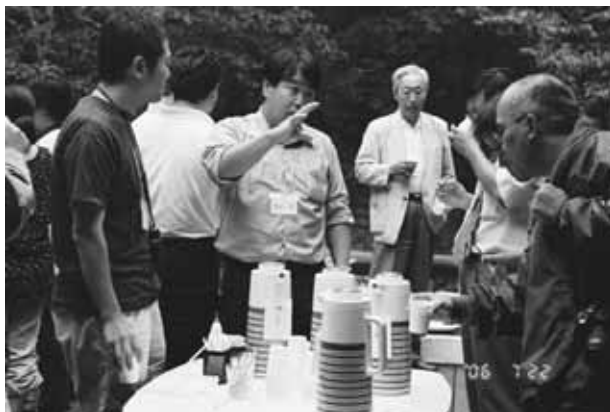
軽井沢で迎えた最後の日は、理事長の別荘で、2006年度の狸たちが料理の腕を競うバーベキュー・パーティーがありました。ナリンさんご夫妻とシャミラさんご夫妻が料理してくださったスリランカ本場のカレーは、スパイシーでヘルシー。胡秀英さんが渾身の力をふりしぼって料理してくださった辛くて美味しい四川料理の数々は、三国志の舞台にもなった蜀の国（古代の四川）、劉備と諸葛孔明を熱く語らいながら食べると、旨味は倍増でした。韓国出身と中国出身と台湾出身の狸たちが肩を並べて焼いてくださった牛・羊・鶏肉のバーベキュー、李鋼哲さんご夫妻の延辺・韓国料理、そして恒例の原嘉男（鹿島美術財団常務理事）ご夫妻のおでん屋さん、今年も大好評でした。団体写真の撮影を最後に、3日間の充実した日程も幕を閉じました。

悪天候が好天に変わった、奇跡とラッキーな日々。森や水から放出する「気」のパワーは、ふだん左脳の使い過ぎでバランス感覚が失われていたはずの私たちの右脳をじゅうぶん活性化してくれたことでしょうか。理事長以下、財団の各先生から施していただいたご厚意とご配慮に、この場を借りて改めて感謝を申し上げたいと思います。

（文責：玄 承洙 2006 Raccoon）



□ SGRA フォーラム「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの?～」



渥美奨学生の集い

「渥美奨学生の集い 2006」は、2006年10月2日（月）午後6時に渥美財団ホールで開催された。参加者は2006年度奨学生、元奨学生、財団役員（理事、評議員、選考委員）など計34名であった。今年には三井物産戦略研究所所長の寺島実郎先生から「21世紀、日本の進路」について講演をしていただいた。講演後には参加者全員の親睦会が行われた。参加者全員にとって、非常に有意義で楽しい集いであった。

前半の講演会については、今年には非常に興味深いテーマであった。三井物産（株）、三井物産戦略研究所などで30数年間の経験を持つ寺島実郎先生は、経済問題からテーマに入れ、数多くのデータを出されながら世界の潮流を分析され、最後に21世紀の日本が歩むべき道を指摘された。

1990年代に入ってからこの15年間、大きく2つの変化があった。1つは日本の貿易構造の変化（1990年と2005年の比較。輸出：対アメリカは32%から23%に下がり、対アジアは逆に31%から48%に上がった。輸入：対アメリカは22%から12%に減り、対アジアは29%から45%に増えた）である。もう1つは、太平洋側港湾の空洞化（2004年世界港湾ランキング1位香港、2位シンガポール、3位上海、4位深圳…20位東京）などの現象に引き起こされた貿易構造のアジア・大中華圏への比重移動及びこのアジアシフトの貿易構造に伴う物流の変化である。この2つの変化により、21世紀の日本は確実にアジアに依存するようになったと先生はお話くださった。

そこで、「21世紀の日本の国際的役割」（＝日本の進路）について、先生は2つ指摘された。「1つは同盟国アメリカをアジアから孤立させない役割であり、多様な価値を許容する国際社会の建設的関与者になるように米国を支援すること」、「2つは中国を国際社会の責任ある参画者に引き入れる役割であり、環境問題から知的財産権問題までこの国を国際ルールやシステムに責任を持って関与する国になることを支援することである。」と述べられた。

質疑応答では「アジア外交の鍵となっている首相の靖国参拝」と「愛国心教育」について質問があった。先生は、前者については、小泉外交の「近隣諸国に言われたくない」「アメリカにくつつく」というやり方による「近隣との信頼関係の欠如」が「日本の国際関係の最大の弱点」だと指摘されて、「米国との同盟関係を大切にしつつアジアとの重層的関係を構築する路線」の重要性と「東アジア連携の必要性和必然性」を述べられて間接的な答えとされた。そして、愛国心教育については、先生が「1人の大人として、若者に『国を愛すべきだ』と語るのではなく、愛するに値する国を創ることに責任を共有せねばならない」と語られた。

後半の懇親会では、参加者全員が乾杯の後、美味しい中華料理を楽しみながら、優しい雰囲気の中で歓談と交流を行った。約3時間の「集い」はあっという間に終わった。非常に楽しい一時であった。事務局の皆様はお料理を準備されたり、写真を撮ったりしてくださって、たいへんお疲れ様でした。（文責：臧 俐 2003 Raccoon）



2007 新年会

2007年1月13日(土)正午～3時、恒例の渥美財団新年会が開催され、今年度奨学金受給者とラクーン会会員と家族約40名が、渥美財団ホールに集まりました。お雑煮や、おしるこや、おせち料理や、焼き鳥、そしてナリン様のスリランカ料理など、様々なお料理はもとより、寒い天気の中かで上着まで脱いで作られたお餅の味は格別でした。

食事前に、参加者が渥美財団ホールに立ち並んで胡秀英様から太極拳を学びました！健康には美味しい料理も必要ですが、適度な運動も欠かせないものでしょう！



最後には、ビンゴゲーム！おもちゃをもらって喜ぶ子供たち、嶋津様の奥様が編んだマフラーをもらって子供のように喜

ぶシムチュンキョト様！4人揃って参加した私の家族が貰った賞品が、誰より多かったのは至極当然でした。2回行われたビンゴで1回しか当たらなかった李成日様、"ごめんね！来年には家族を連れてきて、いっぱいもらってね！"

まさしく、美味しいお料理、運動、楽しいゲームが三位一体になった新年会でした。帰る途中、両手におもちゃをもっている息子と娘にたずねてみました。"来年またくる？"すると、二人そろって大きい声で、"うん！"

皆さん、来年の新年会には家族揃って参加しましょ！（文責：禹成勲 2006 Raccoon）



2006 年度研究報告会

2007年3月3日(土)午後2時から6時まで、東京都文京区関口の渥美財団ホールにて、2006年度渥美財団研究報告会が開かれ、当期渥美奨学金受給者が研究成果を発表しました。今期・来期の渥美奨学生やラクーン会(同窓会)会員、財団役員、留学生支援財団の方々、来賓の皆様を含む50名以上の方々にご参加いただきました。

最初に、渥美伊都子理事長から、ホールに飾ってある雛飾りの紹介やひな祭りについてのお話がありました。渥美奨学生の皆さんは、自分の博士研究の成果を「子供にもわかるように」「15分以内で」説明するという大変難しい課題にもかかわらず、しかも何人かの方々には初めてのパワーポイント(プレゼンテーション用ソフト)を使ってそれぞれ素晴らしい発表をしてくださいました。

11名の発表の後、お忙しい中ご出席くださった慶応義塾大学文学部教授の河合正朝先生と、(財)ロータリー米山記念奨学会の坂下博康事務局長、そして当財団選考委員で名古屋大学経済学部教授の平川均先生よりコメントをいただきました。先生方は、何年もかけて研究してきた博士論文を15分で説明しなければならない難しさ、しかしながらその重要性を強調されました。また、研究者は往々にして専門分野ばかりになってしまうので、このように様々な分野の発表を聞けることは貴重な機会であるとお話しくださいました。

最後に、SGRA運営委員のマックス・マキトさん(95狸)からグーグルアースを使って「関口」とSGRA(関口グローバル研究会)の紹介がありました。その後、参加者はひな祭りのご馳走のちらし寿司と、羅仁淑さん(98狸)と弟さんが経営する韓国料理店からのご馳走を食べながら歓談を楽しみました。(文責:今西淳子)



□研究成果発表会場



□2006年度奨学生を囲んで

□来賓挨拶



慶応義塾大学文学部教授
河合正朝先生



名古屋大学経済学部教授
当財団選考委員 平川均先生



(財)ロータリー米山記念奨学会
坂下博康事務局長

□懇親会



■発表テーマ

- Chu Xuan Gao (チュ スワン ザオ)「民間信仰と近代の歴史人類学—九州の一地方の事例から—」
 胡 秀英「異文化環境に生きる高齢者の健康維持増進を目指す看護に関する研究
 —中国帰国者1世とその中国人配偶者を対象として—」
 玄 承洙「チェチェン共和国のイスラームと政治勢力の関係 (1990-2006)」
 李 成日「中国の朝鮮半島政策の調整と中韓国交正常化過程—鄧小平時期中国外交の転換の視点から—」
 梁 蘊嫻「『絵本三国志』の挿絵について」
 モホッタラ・シャミラ「画像を用いた車両認識」(当日帰国中のため欠席)
 パンチェワ・エレナ「日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究」
 徐 景淑「日朝関係における高麗茶碗 - 和物茶碗への影響 - 」
 沈 俊傑 (Sim Choon Kiat)「高校教育の日星比較～選抜度の低い学校に着目して～」
 孫 軍悦「戦後中国における日本近現代文学の翻訳に関する研究」
 ウィーラシンハ・ナリン「下り回線のための巡回プレフィックスを用いた畳込み拡散符号分割多重アクセス方式
 (CS-CDMA/CP)に関する研究」
 禹 成勲「高麗の都城開京に関する都市史的研究」

(写真は研究発表の奨学生の皆さん 上段より左から右へ発表順)



2006年度渥美奨学生のページ 「エッセイ」

チュ・スワン・ザオ 「ベトナムの詩・三編」 ----	15
胡 秀英 「随 縁」 ----	17
玄 承洙 「好奇心としての日本語」 ----	18
李 成日 「地域の平和と子供の未来を考えて」 ----	18
梁 蘊嫻 「十年一昔」 ----	19
モホッタラ・シャミラ 「子供の誕生と成長」 ----	20
パンチェワ・エレナ 「私の日本」 ----	21
徐 景淑 「文化は力 - 茶の湯」 ----	22
シム・チュン・キャット 「月と血と国際交流」 ----	23
孫 軍悦 「『カルチャー・ショック』の復権」 ----	24
ウィーラシンハ・ナリン 「11年間の留学生活・始まり・終わり」 ----	25
禹 成勲 「話し合い」 ----	26

ベトナムの詩・三編

チュ スワン ザオ
Chu Xuan Giao東京外国語大学（文化人類学）
ベトナム社会科学院文化研究所研究員著者：Vân; Quốc / 雲国
(チュ・スワン・ザオのペンネーム)詩・その1：Linh cảm lịch sử (ベトナム語)
霊感的歴史 (和訳)

グエン・トン・クァイ (阮宗奎) * とクリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) ** に贈る

ハイテク産業区は茫々茂るイヌシバの
根茎の下から出てくる
放浪するうちに、風は霧を
貝殻の腹中に入れて発酵する・漬物にする

高速道路は牛の群を魅了し
彼らを道惑させて都会に連れて行く
牛達は地下鉄の通路で生まれ変わり
あの有爪動物の呼吸の声は
ダンボールでできた家の通風孔から
苦し紛れに鳴っている

帆船の団は御朱印を携帯し
やって来て、また去って行く
一本の橋と
数列の石碑を残し
夕焼け空にひらひらはためく四角の凧だけは
女性と子供の声を呼び戻している

時間をシーズンに分けた風は
外地の客の足を止め
鮎の絵がついた鏡を持つ内地からの女達を
沖合いに持ち出した

朝廷に仕える長官の私は
夕方の紫で染めた
藍色で染めた村々を
田圃と田圃の境目となる山盛りの石のとりでを
尻尾をはげしく振り動かしている蛟竜が

潜伏する湧き水の谷を
ねずみ色を吐いている煉瓦作りの塔を
だらだら遊び回っている

一行の同郷人は弱まっている午後の日光の中に
盆地を横断し
刺繍の風呂敷に包む郷音の破片を私に与え
彼らは急に笑いさざめく
またすぐにさめざめと泣いていた

涙ぼろぼろ落ち
芝生が風に吹かれている屋上のレンガを
濡らしている

南寧 2000年7月
東京 2006年11月

* グエン・トン・クァイ (阮宗奎)：現代ベトナム語の表記は Nguyễn Tông Quai で、1693年-1767年。儒学者、遣清使、詩人。
** クリフォード・ギアツ (Clifford Geertz)：1926年-2006年、アメリカの人類学者。代表作は『The interpretation of cultures: selected essays』(1973、和訳『文化の解釈学』)である。

詩・その2：rác và im lặng (ベトナム語)

ゴミと無言 (和訳)

セーヌ川の岸で四人の先輩*と対話

水田と水田の間にいつもはっきりしていない
畦道に惜しみなく力を入れ
互いに異なっている作物、文字、思想を
植えている私たちは時々休憩の合間に
畦道に上がって笑い話を競い
誰も自分の作物を自慢し
集まったのは笑い話の力比べをするだけ

道路は何階重なっているもいつも混んでいる
空にまたがる道も地下の道も
人と車が絶えず休みなくずらりと並んでいる
各々小刻みに先に進んでいる
向こう側にあるのは高く掲げられる
「知恵」という看板だ

私は一枚の苗代田から上がり
その看板の下で働く運搬人という仕事に申し込んでいた
脇目も振らずに
骨折り損のように働く

蛍光灯の下の

一晚

無言が重たがって萎れて

私の耳に秘かに「知恵はゴミだ

その看板はゴミのゴミだ」と言った

看板は私の両脚を

指紋がついた契約書で止める

私を縛っている鎖は甘い言葉と

それについた威嚇的表現だ

無言は飛んで

脇目も振らずに働く私を置いてさぼり

しがたがなくまた骨折り損のように働く：閉める、開く、

持ち上がる、裁く、引く、押す、投げる、拭く、拾う

垢抜ける、お洒落する、盗む、掏る、嘘つく、媚びる、

怖じける、傲慢する

今晚こそ私の中に潜む勇氣は

一度無言と決闘しようとする

あいつらは喧嘩し

汚い言葉で互いに侮辱しあう

勇氣は無言の耳に「あなたもゴミだ。淫乱なやつ！」

と叫ぶ

勇氣は無言の頬を打ち

あいつを蹴った

あいつを寝台柱に縛り

一枚の契約書を出し、あいつの指を朱肉に押す

無言は重たがって萎れて

あえぎあえぎ遺言のような

「私、貴方、蛍光灯の光、

人はともに有色・沈下のなゴミで

私たちを通し、私たちを結んでゴミ山にするのは

無色・浮動的なゴミだよ」と言い残っていた

私はまだ足を進めない

鎖は私の両脚を看板に縛っている

私の知識は私をゴミと無言にきつく縛っている

勇氣は時々現れても

あいつ自身や無言と喧嘩するだけだ

2007年1月

* 四人の先輩：Jean-Paul Sartre (1905-1980、フランス哲学者・作家)、Trần Đức Thảo (1917-1993、ベトナム哲学者)、Claude Lévi-Strauss (1908~、フランス人類学者)、Phan Huy Đường (1945~、ベトナム哲学者・作家)。

詩・その3：đồng trình chữ (ベトナム語)

字の乙女 (和訳)

長夜を徹して

向こう側に渡り

目が別の夜に触っている

昼がない

蠟燭の束が燃えて

徹夜の通路の真ん中に

ひらひら燃え

散り乱れている雪

雪

通路の向こう端についた瞬間に

僕と貴方はぶらぶら太陽の蔭にぶつかった

私たちは互いにぶつかり合い

薄い紙でできた家の中で眩暈している

凄く薄い、薄い

またもう一晚がまもなく明ける

血が滲んでいる涙が零れ

静かに零れて

東雲の方に飛んでいて

雄鶏の声を代わって鳴っている

僕がわざともう少しベッドに残り

太陽が爬って上がるのを待つ

巨大なトカゲの産道から爬って上がってくる

淡い赤い雲の一面を

破って

トッテナム・コート・ロードの交差点*の上にながって

ているのは

未受精の太陽

2006年2月12日

* トッテナム・コート・ロード： Tottenham Court Road、ロンドンの電気街である。この交差点は、Tottenham Court Road 通りは Oxford Street 通りを交わっているところ。

随 縁

こ しゅうえい
胡 秀英

千葉大学・博士（看護教育学）
華西病院看護部

この世は「縁」で成り立っているといっても過言ではないであろう。

幼小の頃、母と叔母の2人姉妹しかいない祖父が本当は初孫として男の子が欲しかったことを知り、私は何となく残念な気持ちを持っていた…。しかし、そんな私の気持ちを感じ取った父は私にたくさんの愛を注いでくれた。ある日、父は私を隣の都市の有名な橋を見に連れて行き、“この橋の設計士は女性の方ですよ。お父さんはこの方を尊敬しています”と私に語りかけてきたのである。そのとき、私は自分の心が動き始めたのを感じた…。また、ある日、父は“あなたと同じ名前の素晴らしい女性がいますよ”といい、ある新聞記事を持ってきてくれた。それは「アメリカにおける有名な植物学者胡秀英教授の記事」であった…。知らず知らずのうちに、私の中で「女の子に生まれてよかった。立派な女性になりたい」という気持ちが自然に湧いてきたのを感じた。その後、頑張る意欲が出てきて、学校で優秀な成績をおさめることができた（男の子よりも）。

そんなあるとき、大学の合格通知に自分が希望した「教育学」ではなく、「看護学」が書かれているのを見て、吃驚した。そんな私をみて、父は“縁に従いなさい。あなたの人生がきっと広がるよ”と言ってくれた。その時、私は分るような、分らないような気持ちで父の話聞いていたが、父を信じて看護学の世界に入り、優秀な成績で卒業し、大学附属病院の国際病棟に配職された。国際病棟に勤めていた時、病棟の職員の間で英語を話せたが、日本語は話せず、入院してきた日本人の不安と職員の困惑を見て、日本語の独学を思い立った。そこから、日本と縁を結び始めたような気がする。その後、ずっと病院内で日本語の通訳のボランティア活動をしてきた。それは自分の使命の一つと感じていた。助けを必要とする人の感謝の気持ちや喜びを見るたびに、自分の満足感・役に立っている感覚が持て、同時に自分の存在価値を確認し生活に張り

合いができた。また、自分の日本語が段々よくなり、自分の知らない世界をみることにより、人生の経験を深めていけることを感じた。大学講師を兼務していた頃、知識不足を感じ、留学することを考え、留学先に日本を選んだ。日本への留学を選んだとき、日本との縁が結ばれたのだと思う。

当初は東京大学に行く希望を持っていたが叶わず、縁に従って千葉大学に入るようになった。その後、千葉大学附属病院で中国残留孤児帰国者の外来や入院などの通訳のボランティア活動を通して、帰国者のあまりよい境遇にあるとは言えない状況を知った。そのため、自分の知識を生かして、その方々のために何か役に立つことができないかという思いになり、本格的な「中国帰国者の向老期・高齢期の健康維持・増進を目指す介入研究」をデザインした。そのお陰で、渥美国際交流奨学財団と縁が結ばれ、博士研究は順調に計画通りに完成し、博士号を取得できた。今までの道を振り返ると、私の人生は縁に導かれ、その縁に従って努力してきたからこそ、今の私があると言える。

当面、千葉大学の研究員として半年程残ることになったが、半年後には二つの選択肢が待っていること、一つは四川大学に戻り、看護管理をしながら教育・研究を兼務する。一つは清華大学に就職し、看護教育・研究に携わることである。今は、どちらを選択するかまだ決めてはいない。だが、どちらを選択するにせよ、縁に従おうと決めている。

この世の中は、順境あり逆境ありで、いつでも自分の思った通りには物事は運ばない。これは、その人の縁のめぐり合わせによるもので自分の力だけでは動かし難いものであることを物語っている。物事を強く求めれば、自分を苦しめることになる。それより、順逆の縁をあるがままに受取り、平常の行いも素直に縁に随わせていき、心と体と周囲のバランスをとれば、その行いは次第に道にかない、自分の世界を広げる。世界が広がることによって、心が明るくなり、自信が生まれ、いきいきと日々の生活が送れると思う。

文章の最後に、山田無文老師の「水の如くに」と題された随縁の極地であるという短文を引用し、皆さんと「共勉」したい。

「水のごとくよどみなくさらさら流りたい。どんな良いことがあっても、どんな悪いことがあっても、うしろをふり向かずに、前へ前へ、さらさら流りたい。左

右の岸にどんな美しい花が咲いておっても、どんなに楽しく小鳥が鳴いておっても、その美しさをほめながら、その楽しさをよろこびながら、足ぶみせずに流れよう。流れる水は凍らぬとか。流れる水は腐らぬとか。それが生きておるといことであろう。田畑をうるおし、草木を養い、魚を育てながら、決して高きを望まず、低い方へ低い方へ、水の流れるごとく、わたくしも流りたい。」

好奇心としての日本語

ヒョウ スンス
玄 承洙

東京大学・博士（地域文化）
韓国外語大学ロシア研究所研究員

9年間の留学生活に終止符をうち、帰国しました。自分の部屋に戻るや否や、長い間主人の帰還を待っていてくれた懐かしい机と本棚に、かわいらしい口付けをしました。帰国報告を兼ねてです。

わたしの本棚は古ぼけた日本語の本でいっぱいです。初めて日本語を勉強した時の思い出の香りも、昔のままです。もう27年も前のことになりますが、わたしの人生に長いつきあいとなったこの日本語を、わたしは妙なくあいに学んだのです。少なくともそれは学校教育という容れ物のなかで学んだのではない、一種の独学なのです。

小学6年生のころでした。学校から帰る途中のある古本屋で、偶然目に飛び込んできた、面白そうな漫画本との出会い。それがわたしと日本語との奇縁の始まりでした。わたしはなんとなくそこに書いてあった文字に恋してしまったのです。親からも先生からも読んでもらえなかったあの文字を自力で勉強しようと覚悟を決めた瞬間を、今も不思議なほどよく覚えています。

それからの悪戦苦闘ぶりは、言葉ではいけません。わたしは古本屋をあさって、何冊かの文法書と辞書を買って、それをなんども反復して読みました。ほんとうになんども読み返したか知れない。手にはいる日本のコミックや文学書を、わかつうがわかるまいが強引に辞書を引いて読みくだきました。むろん文法書を横にひ

らいてです。川端康成の小説『雪国』が手にはいったときには、韓国語の翻訳を横において、なぜそういう意味になるのか、一字一句対照して熟考しました。こうしてわたしは、夏目漱石や三島由紀夫の小説、源氏物語などの古典や日本書紀までを読み進めるうちに、日本に憧れ、ついに留学という少年時代の夢をも果たせたのです。

少年とは、ふしぎな思考をするものです。あのころによく夢で見ていた日本の風景を、20年後に現実のなかで目の当たりにしたこともあります。デジャヴという、心理学用語で説明される現象ですが、私にはそれがなぜ起こり得たのかよくわかりません。幼いころの強い願望が、遠い将来に現実と重なり合うという不思議な精神現象でしょう。単なる思い込みに過ぎないかもしれませんが...

わたしは日本を離れ、10年前に住んでいた町に戻ってきました。けれども、まったく新しい生活が始まろうとしています。その間、わたし自身にも多くの変化がありました。すでに好奇心旺盛だったあの頃の少年はここにいません。それなのに、本棚に納められている昔の本は、昔そのままの香りを漂わせていたのです。ここでもういちどわたしの原初体験、日本語にもどりたいと思います。文字ではない、好奇心としての日本語に、です。

地域の平和と子供の未来を考えて

リ チェンル
李 成日

慶応義塾大学（政治学）

1990年10月に東西ドイツが統一、1991年12月に旧ソ連が崩壊したことによって、半世紀以上続けてきた世界的な冷戦は終結された。その後、1991年1月の日朝国交正常化交渉、1992年8月の中韓交樹立などが実現され、北東アジア地域にも緊張緩和の動きが見えてきた。特に、1993年3月の第1回北朝鮮の核危機の解決のため、米朝間に直接的な接触が行なわれ、1994年10月には両国間で枠組み合意が締結された。2000年6月に韓国の金大中大統領が平壤を訪

問し、戦後はじめて南北首脳会談が行なわれた。同年10月オルブライト米國務長官が平壤を訪れ、米朝関係の改善も急激に進展された。2002年9月には小泉首相が日本の総理として戦後はじめて北朝鮮を訪問し、金正日国防委員長とともに「日朝平壤宣言」を発表して、この地域における関係諸国間の関係正常化が期待された。

しかし、2003年3月の北朝鮮のNPT脱退宣言をきっかけに、第2回北朝鮮の核危機が起こって、この地域において緊張情勢が再び造成された。そのため、2003年8月から日、中、米、韓、朝、ロなど六カ国は北京で交渉を続けてきたが、2006年7月に北朝鮮はミサイル発射実験を行なった。また10月には、北朝鮮は国際社会の反対にもかかわらず、核実験を断行して、この地域の緊張は最ピンチに達した。

上記のように、朝鮮半島をめぐる北東アジア地域には、北朝鮮核問題をめぐる核の非拡散体制と朝鮮半島の非核化、米朝、日朝関係正常化など、関連諸国間の関係正常化の実現と多国間安保協力体制の構築が課題として残されていた。すなわち、この地域には未だに冷戦思考が残っており、戦後60年以上たっても非常時の国家関係が続いている。幸いに、今年2月に北京で開かれた第5回六者会談第3セッションで、六カ国は、平和的な方法によって朝鮮半島の非核化を実現するという共通の目標及び意思を再確認するとともに、共同声明における約束を真剣に実施するという合意（「2.13合意」）を達成したのである。しかし、マカオ銀行(BDA)における北朝鮮の資金移転が遅延されていて、その合意の実行が遅れている。にもかかわらず、朝鮮半島の非核化は確かに前向きに進んでいると考えられる。なぜなら、北朝鮮の核実験という最悪の事態が発生しても、関連諸国が平和的に解決されることを、現段階において関連諸国の政府のみならず、住民たちも強く望んでいるからである。

今年の4月で、日本に来て7年目になった。この6年間あっという間だと感じている一方、実に僕の人生にとってはかなり重要な期間だったと考えられる。また、子供の成長を見ると、月日の流れの速さが生き生きと感じられる。娘は1歳の時に来て、今は6歳になって、4月から小学校に通うことになる。当初は日本語を全くわからなかったが、いまでは一番しゃべること

ができ、たまには僕が知らないことも教えてくれている。子供の明るい顔と健康な成長の様子を見ると、本当に時代の平和の貴重さを実感させられる。子供の未来のためにも、この地域の平和が長く守られることと、六者協議という場を通じて、この地域の平和体制が構築されることを真に期待するのである。

十年一昔

りょうけん
梁 蘊嫻

東京大学（比較文化）

私は1997年に来日した。数えてみたら、もう10年の歳月が経ったことに気づき、思わずぎよっとした。鏡に映った自分の顔を見て、10年前の私を一生懸命に思い出そうとした。日本に来たばかりのとき、小岩にある老朽化したアパートに住んでいた。毎日ゴキブリとの格闘があり、旧式の設備で40分かけてお風呂を沸かさなければならぬ自分は苦労しているなとしばしば思った。まるで昨日のここのようだが、これは間違いなく10年前の話だ。昨日のできごとだと錯覚するぐらい、10年間の自分の成長に気づく暇がなかった。このエッセイの執筆をきっかけに、留学して私は何を得たのかと真剣に考え込んだ。

私は努力すれば必ず報われると信じている頑張り屋である。小学生のときに、クラスの中で成績はいつも1位を占めていたのに、ある学期第2位に落ちるや、朝5時に起きて勉強していたほど、負けず嫌いな人だった。私はいつもこのような強い精神を持って難関を一つ一つ乗り越えてきたので、東京大学修士課程、そして博士課程へもトントン拍子に進学することができた。しかし、自分自身の努力もさることながら、留学してからの最大の収穫は研究者としてあるべき姿勢を知ったということだろう。それを教えてくれたのは2人の指導教官だった。1人は元指導教官の延広真治先生。もう1人は現在のロバード・キャンベル先生である。

まず、延広先生とのご縁を語ろう。来日する前に、東京大学在学中の先輩から授業案内を入手した。授業案内はワープロでタイプされたものばかりだったが、

先生の授業趣旨説明だけが手書きであった。私は先生の筆跡に惹かれて、ひょっとしたら変わった方なのではないかと勝手に想像して、先生のもとで勉強したいという気持ちが強くなった。東大へやってきたら、案の定、先生は駒場3大奇人の1人に数えられているという噂を耳にした。私の勘はみごとに的中した。

先生からは専門知識だけではなく、研究者としての姿勢も教えていただいた。ある時、私は翻刻をするに際して表記法をどのように規定すればよいかという質問をした。すると、先生はいくつか参考になる例を教えてくださいましたあと、このように仰った。

「自分で方針を決めて、そしてなぜこのように規定したかを説明すればよい。これはあなたの論文だから、あなたがこの論文をどのような形にしたいかが大事だ。この論文のなかではあなたが王様なので、あなたが一番偉い。誰もあなたのために決めることができない。」

先生のお言葉を聞いて名状しがたい感動を覚えた。先生は真の学者である。学者が作家や芸術家と異なるのは客観性を持って対象を処理する点にある。しかし、学者も作家・芸術家や職人のように、自分の論文を書くときには、一つの作品を創作するような気持ちでなければならないことに気づいた。自分の論文を創作と見なすのは、客観性を無視するという事ではない。それは論文を神聖なものとみなすことであり、またそれに責任を持つということである。自分の作品に愛着し、そして正々堂々とそれを守らなければならない。自分の研究に情熱を込め、敬意を払うことが学者としてあるべき姿だと先生の教示を仰いで痛感した。

現在の指導教員キャンベル先生もまた奇人である。先生のゼミで発表するには1ヶ月以上準備しないと間に合わないほど、大変なエネルギーを消耗する。しかしゼミの発表を通じて、研究の前提は緻密な考証であるということを知り、大変勉強になった。先生はアメリカ人だが、「英語が上手ですね」と冗談で言われてしまうほど、日本人以上に日本人らしい。先生は某先生から息子に英語を覚えてくれといわれたが、ぼくには英語を教えられるはずはないと答えたという噂が流れている。真実かどうかはわからないが、何の打算もなく真に日本文学や文化を愛している先生の姿がこのように噂に大いに信憑性を与えているのは確かだ。先生のお姿を仰いで私は果たして先生のように日本文学を

愛せるかと自問した。

学問の世界では、道のりが順風満帆であれば学者として成功するというわけではない。研究には、努力だけではなく、情熱あるいは執着心が必要だ。研究は神聖な仕事であり、名声や栄誉を勝ち取ろうとするためのものではない。日本へ留学に来て、お二人の先生のお姿を見てそう思った。十年一昔というが、私は成長したと思う。

子供の誕生と成長

モホッタラ シャミラ
Mohottala Shirmila
東京大学(情報理工学)

昨年10月に我が家に子供が生まれました。はじめての出産、それも異国で。不安と戸惑うことばかりでしたが、たくさんの人の協力で無事大きな幸せを手に入れました。子供はどこでも宝物です。妊婦や子供の死亡率が高かった昔は、無事な出産や成長を願う儀式や行事がたくさんありました。医学の進歩により、無事であることの方が当たり前になってきている現代では数が減り、内容も簡略化されてきています。国や地域によっても様々ですが、私の母国スリランカの出産に関する習慣や子供の祝い事を簡単に紹介したいと思います。

それは子供を見籠った妊婦さんを案ずるところから始まります。スリランカでは妊娠を友達や知り合いに告げるとまずは「何が食べたい?」と聞かれるでしょう。それは辛いつわりの時期を乗り越えるために少しでも食欲の出る物を作ってあげようという心配りです。隣近所からの美味しい物のお裾分けがつわりの期間が終わっても続きます。

出産が近付くと3日続けて自宅に僧侶を招き、安産を祈りお経を読んでもらいます。陣痛が和らぎお産が軽くなるためのアングリマーラという特別なお経をあげ、お守りの糸を妊婦の手に結びます。これで妊婦が安心して出産を迎えられます。

無事子供が生まれるとすぐに占星術師にホロスコープを作ってもらいます。ホロスコープとは人が生まれ

た場所で、その瞬間に、太陽系内の10個の惑星が12星座の内の何座にあったかという事に基づいて作成された図形の事です。ホロスコープから性格や才能、適性、恋愛傾向、人間関係といった運命的なことはもちろん、今後の事件や人生上の転機なども読み取ることができる、スリランカでは重要視されています。

次は生まれた子供の命名です。出来上がったホロスコープを基に、その子に幸運な字を教えてください、その字で始まる名前を付けます。だから生まれる前から名前を決めておくことはできません。

生後一ヶ月ぐらいになったらお寺にお参りに連れて行きます。子供の健康と健やかな成長を祈る日本のお宮参りにあたるものですが、神社ではなくお寺に行きます。

生後6ヶ月頃、日本のお食い初めにあたる離乳食の始まりを祝う儀式が行なわれます。床にひいた白い布の上にお祝い料理はもちろん、本、お金、色んな道具などを並べ、そこに子供を座させます。子供が何に興味を示し、最初に何に手を伸ばすかを皆で見守ります。食べ物を手に取ると一生食べ物に困ることなく健やかに成長する。お金を手にしたら将来お金持ちになり、本を手にしたら勉学に励み、道具だったら職人になるなどとされています。その後母親がはじめての離乳食としてミルクライスを食べさせ、儀式が終了します。

3歳頃になったら初めて読み書きをする儀式が行なわれます。父親が子供に初めて字を書かせ、本を読ませます。昔はお寺のお坊さんか村の学校の校長にお願いすることが一般的でしたが、最近は父親か親戚の学識の高い人がします。儀式は家族だけで行なうことが多いですが、お祝いの料理はたくさん並びます。

スリランカではこれらの儀式がすべてをホロスコープを基に占星術で決めた縁起の良いとされる時間に行なうのが一般的です。最近は誕生日会などが盛大に行なわれ、これらの儀式が少しずつ姿を消して行く傾向ですが、子供の成長を祈ると同時に親としての自覚を深めるいい機会としても長く祝っていききたいものです。ただし、儀式や行事の本来の意味をとらえることなく、ただ形だけが華美になっていくのも考えたいものです。豪華に祝うことではなく、どういう気持ちで祝うかが大切ですね。

私の日本

パンチェワ エレナ
Pantcheva Elena

千葉大学・博士(日本研究)

ヒルトンホテル(幕張)

日本に対する私の関心は、家に飾ってあった歌舞伎役者の一枚の絵から始まりました。それからというもの私は日本に関係する様々な本を読むようになり、日本の文化や歴史、文学などを大学で学んできました。この結果、日本にはまだ侍や芸者たちがいて、みんな着物を着ているといったステレオタイプからはかなり小さい頃から抜け出していました。

夢の日本への留学が決まったのは、6年前のことでした。日本に来た私は多くの外国人から聞くようなカルチャーショックはあまり体験しませんでした。それでも日常生活においてはいくつか気になるところもありました。例えばラーメン屋やおそば屋でみんな麺類を「するする」、「ずるずる」という音を立てながら食べるのがそうです。「これは何って下品で、失礼な食べ方だな」と毎回いらいらしながら思っていました。なぜならばヨーロッパでは音を立てながら食べるのは非常にマナーの悪いことだからです。

また日本のお正月はとても静かですが、ブルガリアでは友達と集まって朝までワイワイする習慣があるので、とても寂しくてつまらない思いをしました。その後、春にもまた期待はずれのことがありました。ブルガリアの春は穏やかで、暖かい日が多いのですが、日本は一般的に風が強いので、不安な気持ちになってしまいました。後になってこの風は「春一番」と呼ばれると友達から聞きました。更に春の後にはブルガリアにない「梅雨」の季節があり、一週間たっても雨が止まず、妙な湿気が広がっていました。洗濯物を乾してもなかなか乾かないので、何って嫌な季節だと思いました。その後やっと好きな夏が来ましたが、湿気が多く、夜になっても少しも涼しくならないため、眠れない日々が続きました。そのため楽しい季節どころか早く秋になってほしいとぼっかり思っていました。これに加えて昼間にはセミが「ジージー」、「ジージー」鳴きやまなくて、何ってうるさい雑音なんだろうと思っ

ていました。

しかし6年間たってからまた振り返ってみると、私の心に変化が生じたことに気がきました。

例えばラーメン屋、そば屋で「するする」や「ずるずる」という音を聞いてもう不快な気持ちを抱かず、「美味しそうに食べているな」と思うようになりました。

またお正月にはにぎやかでうるさく過ごすよりも、「年越しそば」を食べる、「初詣」に行く、おみくじを引くなど、日本人と同じように静かに過ごしたいという気持ちの方が強くなりました。

春には「春一番」が吹くと、「あ、春が来た」、「これから桜の季節だ」と思うようになりました。このようにもう風は不安な気持ちではなく、自分の心に「希望や期待」を吹かせているのです。「梅雨」も「洗濯が乾かない季節だ」と思う前に「今年の紫陽花もきっときれいだな」ということが先に頭に浮かぶとは、自分でもとても不思議です。そしてセミの声を聞くと「夏だな!」と感じられるようになりました。更にセミの声も区別できるようになり、セミの声で夏の進み具合まで分かるようになりました。嫌に感じていた湿気の夜も花火大会や提灯の優しい光の中、あざやかな浴衣や団扇、夏祭りのにぎやかな風景を目の前に浮かばせてくれます。暑い夜の中には風鈴の涼しそうな音が耳に聞こえるようにもなりました。

人間は子どもの時から育ってきた環境が身にしみるため、世の中の物事をその環境で体験してきたことに基づいて判断し、受け取ろうとするのは当たり前のことだと思います。これに対して日本での留学経験は新たなことを教えてくれました。他国の文化や習慣に接してそれを比較することは良いのかもしれませんが、自分の文化や習慣からこれを判断するのはいけないことだと思います。異国の文化や習慣を本当に理解したいのなら、自分が育った環境や文化を持ち込まずにその国の文化や習慣を受け入れるべきだと思います。

個人的にもう一つ分かってきたことがあります。それは人を好きになるのと同じように、日本の気になるところまで好きになった私は、間違いなく日本のことを一生愛し続けるでしょう。

文化は力 - 茶の湯

ソ ソウ キョウシ
徐 景淑

慶応義塾大学 (美学美術史)

日本には他国にはない文化がある。それは茶の湯という飲茶の儀式とそこから生まれた侘び寂びの美意識である。茶の湯は分かっても、「侘び寂び」という言葉の意味については理解に困る。

私のような外国人には当然のことで、日本人でさえよく分かっていない気がする。私は正式にお茶を習ったことはない。研究対象が茶道具であるから茶道に興味がある程度であるが、「侘び」と「寂び」については今もたくさん考えさせられる。

鎌倉時代に中国から禅宗の飲茶法が導入してから利休の生きた安土・桃山の時代まで美意識は、豪華で耽美的なものであり、その反面、単純美を否定し、時を経て傷んだわびしい状態の美を肯定する精神的な美意識もあった。「侘び」とは広辞苑によると「①わぶること。わびしいこと。思いわずらうこと。②閑居を楽しむこと。また、その所。③閑寂な風趣。茶道・俳句などでいう。さび」とある。この説明では「侘び寂び」が何の意味かますます分からなくなる。基本的に「侘び」とは侘しい(わびしい)「寂び」とは寂しい(さびしい)という意味で捉えられる。「寂び」は「錆び」とも書き、時間の流れによって古くなる様子、それが完全な美しさに到達していない、ある趣の美である。これには村田珠光の「草庵の茶」という新しい試みがあり、茶道具を通して形象化されたのである。

草庵の茶とは四畳半という狭い空間で、飾り付けも少なくし、道具も歪みや不正形な完全には物足りない道具で茶を点じることである。その後、紹鴎が踏襲し、ついにその弟子千利休が侘び茶を大成したのである。完全たる形、概念、日常、常識を超えて、あえて汚す、歪む、散らす美である。

それでは、日本でなぜ侘び・寂びの美意識が生まれたのか。武士政権が主導する日本とは違って王権政治をした朝鮮半島の例をみるといい。簡単にいうと、政治面で日本は藩閥の戦争が耐えることなく続いていたのに比べ、朝鮮は中央集権体制のもとで国内での戦い

がなく、両班（文班と武班の貴族）のうち、文班（文臣）が権力を握るときが多かった。宗教面では、日本が華麗な仏教を中心にしたのに比べ、朝鮮時代は質素な儒教を支持していた。朝鮮でも飲茶の風習は古代からある。先祖に祭る祭祀を「茶禮」といい飲茶の痕跡は度々見られるが、茶室という特定の場所を設けてはいない。戦争のない平和な時代に茶室などは必要なかっただろう。日本の場合は、江戸時代に入るまでは緊張を緩めない時代であった。俗世から離れて安らぎを求めため、時には敵同士で非武装して向き合うため、ある時は仲間との親交の場として四畳半の空間はとても適したと思われる。生きるか死ぬか、勝つか負けるかの厳しい現実で、失敗は許されなく、全て完璧さが求められたに違いない。その現実において、四畳半の窮屈な茶室で完全とはいえない茶碗でお茶を飲む。これこそ究極の安らぎの空間であり、自分を見極める瞬間であっただろう。そして、こういう時代であったからこそ生じた茶の湯の文化、侘び寂びではないかと思われる。

茶の湯は今の日本を豊かにしたといっても過言ではない。茶の湯が残した数多くの美術品は人々の心を豊かにし、それを求めて各地を巡った商人の活動は日本が経済大国になる基礎になったのではないかと考える。文化は力なり。茶の湯は日本の大きな力となった大事な文化であるといえよう。

月と血と国際交流

シム チンヤット
沈 俊傑

東京大学（教育学）

「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に出でし月かも」という百人一首の名歌を残した安部仲麿は、留学先の中国で見た月が故郷の奈良で見たあの月と同じだと感動し、過去と現在、日本と中国という違いを越えて万感を込めて歌い綴ったそうです。時空を越えてこの歌を知った僕も実に深い感銘を受けたものでした。国境や時代、民族や宗教を問わず、人類に共通するものはなんて多いのだろうと感じさせられました。歴史のどの時代においても、地

球のどの場所から見ても、角度や形の違いこそあれ、人類が見てきた月は全部あの同じ月なのだろうと今更のように痛感しました。

月といえば、僕の国であるシンガポールの国旗にも月が描かれています。新しい国家を象徴する三日月です。またイスラム教徒の多い国に囲まれているため、隣国に配慮してイスラム教のシンボルである三日月が国旗に使われたという小国ゆえの生存戦略でもあるという説もあります。それはともかく、このシンガポールの国旗の中にある白い三日月の背景色は実は血の色の赤です。血生臭いと思われるかもしれませんが、その赤色が象徴しているのは、多くの国の国旗にあるように革命や独立運動のために流した血ではなく、平等と世界人類の融和なのです。なぜなら、民族や国籍を問わず、人間は誰だって怪我をすれば赤い血を流すというメッセージが込められているからです。このことを教わった中学生当時、「外見は違っても人間の肉体の中身は同じなのだ」とこれもまたごく当たり前のことを感心した記憶があります。中国系、マレー系、インド系とそのほかの民族の子どもが同じ教室の中で共通語の英語をもって勉強するという多民族国家シンガポールであるからこそ、国旗の赤に込められたこの平等意識は特に重要と言えましょう。

しかし残念ながら、当たり前のことはとかく忘れられてしまいがちです。人間同士で共通するものが多いにもかかわらず、外見や文化と習慣の違いに注目が集まる傾向は今でも強いのです。生まれと育ちが違えば、同じ国の人でさえもそれぞれ異なるのですから、ましてや国籍・民族・宗教の違う者同士の場合はなおさらです。もちろん、違いを理解しつつ、認め合うことが重要であることは言うまでもありませんが、お互いの共通点をもっと強調してもいいのではないかと僕は思います。国籍・民族・宗教を問わず、嬉しいときや楽しいときに人間なら誰だって笑顔がこぼれるし、失恋すれば人間なら誰だって落ち込んだり引きこもったりします（暴れたりする人もいますが…[苦笑]）。つまるところ、僕たち皆が眺める月はあの同じ月であり、僕たち皆の中に流れる血はあの同じ赤色です。国際理解の原点がこの点にあると信じ、これからたくさんの人と交流しつつ、地球市民の一人として国際社会に貢献していきたいと僕は強く願っています。

『カルチャー・ショック』の復権

そんぐんえつ
孫 軍悦

東京大学（言語情報科学）

去年の年報に掲載された江蘇蘇さんの「カルチャー・ショック」の話が面白かったので、思わずもう少し話を続けたくなった。

初めて日本に来たときは「カルチャー・ショック」を受けるが、日本に長くいると、今度帰国したときに「逆カルチャー・ショック」を受ける。交通信号があるのに、いつもおじいさんやおばあさんが旗を振りながら交通整理をしている。ガソリンスタンドなのに、自転車や通行人が傍若無人に通り抜けている。一人ずつ乗れば誰でも座れるのに、どうしても並ぶのが厭だ。向こうからぶつけてきたのに、「どこをみてんの」と先に怒る。「優先席」と書いてあるのに、「譲るかどうかはこちらの気持ち次第」と開き直る。さっきまで懇懇に話しかけてきたのに、買いそうもないと分かったとたんに顔色が変わる。バス停の場所を聞いたら、「私に聞かれても分かるわけがないだろう」とつき返される。電話で「丁寧」に話したら、「声が蚊のように小さい」と母に言われる。醤油もラーメンも中国発祥なのに、どうして牛肉入りのしょうゆラーメンが「美国加州牛肉面（アメリカ・カルフォニアラーメン）」というのか、理由が分からない。昔の建物を壊しながら「昔風」の建物を作るのはどういう意味か、発想が分からない。

もっとも、以上の話には誇張がある。文化論は単純化を免れないからこそ、抗し難い誘惑がある。最初の数年間、私は上海に戻るたびに、「逆カルチャー・ショック」に打ちのめされた。以後スイッチを切り替えてから上海に戻ることにした。

こうして、だんだん「カルチャー・ショック」と無縁になってきた私が、はなはだ不愉快な思いをさせられたのは、初めて来日した両親と過ごした去年の夏だった。母は田舎にでも帰るように、ありとあらゆる食材を持ち込んだ。中華鍋まで持ってきたが、私の使っている包丁を見ると、「今度中華包丁持ってくるわ」と言う。日本のしょうゆが赤くないといって、角煮を作るために横浜中華街から中国のしょうゆを買ってくる。

上海にいるときと同じように、ドアを大きく開けて、廊下で編み物をする。日本語一つも分からないのに、毎日買物に行き、同じマンションの住人ともちゃんと挨拶する。山に連れて行ったら、母は「昔住んでいた安徽省の山と一緒にだね」と言う。海に連れて行ったら、父は「北戴河（注：北京近くの避暑地）みたいだね」と言う。河に連れて行ったら、「安徽省を思い出すわ」と母は懐かしむ。温泉に連れて行ったら、「華清池の温泉もこんな感じ」と父は頷く。

せっかく日本に来たのだから、どうして、日本の生活を日本の生活として、日本の風景を日本の風景として楽しんでくれないのかと、私は彼らの反応を不愉快に思った。要するに、もう少し「カルチャー・ショック」を受けてほしかった。

そこで、私は、「カルチャー・ショックって一体何なの？」と考え始めた。「ショック」とは、他者の「異性」に出会う時の反応といってもいいだろう。その意味で、事前にスイッチを切り替える私も、常に熟知したものと類比してしまう両親も、実は自らを閉じ、他者との出会いを避けているのである。私たちは、他者の文化に接してショックを受けるのではなく、ショックを受けて、初めて他者の文化に出会えるのだ。というのは、「ショック」によって、自分が無意識の中で判断の基準として持ち出した「われわれの文化」が初めて姿を現し、思考の対象となるのである。こうした自己省察の回路を通らないかぎり、われわれはついに他者と出会うことはないだろう。

よく考えてみれば、交通信号を守らないのは確かに危険だが、3メートルの横丁であっても赤信号であれば一歩も踏み出さないというのも、奇妙な風景であろう。かといって、一人でも規則を破る人がいれば、みんなぞろぞろとついていく。幼稚園でもないのに、地下鉄に乗るときは「挟まれないように」、降りるときは「押さないように」と駅員さんに注意される。雨の日には「傘を忘れないように」と車内放送が流され、邪念が起きるときは、「痴漢は犯罪です」と警告される。舌よりは賞味期限を、眼よりはカメラを、足よりはナビを、肉筆よりはプリントを、空よりは天気予報を、実感よりはマスコミを信用する。こうして、我々はいま完全に「ショック」から隔離され、「過保護（馴致された）」状態に置かれている。如何なる「ショッキング」な事

件が起きて、それを理路整然に解説してくれる専門家をすぐ用意できるのは、マスコミの驚異的な能力の一つである。しかし、理路整然なのは、常に「現実的(リアル)なもの」であって、「現実(リアリティ)」そのものではない。「ショッキング」こそ、現実の最大の特徴である。今日、インターネットで飛び交う情報やマスコミで作られたいメージといった「現実的(リアル)なもの」に対する飽くなき欲求と激しい反応は、「現実(リアリティ)」そのものに対するはなはだしい「不感症」と表裏をなしているのではないだろうか。その意味で、中国の若者たちは日本の若者たちとむしろ同じような感性の構造を持っているといえよう。

こう考えると、「カルチャー・ショック」は忌避すべきものというよりも、むしろ大いに受けるべきものではないか。開かれた姿勢で他者を迎え入れ、現実に対して鮮烈な感受性を持っている人間こそ「カルチャー・ショック」を受けるのであろう。「異文化」とのぶつかりが「ショック」を引き起こすのではなく、「ショック」こそ、「文化」を生成する源泉であろう。そして、常に流動し、変容し、新たなに生成しつつあるもののみ、「文化」という名で呼びうるのではないだろうか。

最後に、一見本題とは関係がないが、どうしても触れなければならないことがある。4月17日長崎市の伊藤一長市長が射殺された事件である。文学専攻の素人の私がこのような「政治」のことを口にするのは僭越だと思われる人もいるだろう。私もそう思う。しかし、締め切りに大幅に遅れたがゆえに声を上げる機会を得たのだから、一言書くのは締め切りに遅れたエッセイの当然な義務であろうと、なぜかそう思えてならないのだ。ニュースで事件を知った夜、私は思わず本棚から美濃部亮吉の『苦悶するデモクラシー』を取り出した。大正8年から昭和15年までの二十年あまりの間に起きた、言論の自由を弾圧する事件について具体的に書いたものである。政治家に対するテロ行為ではなく、学問の自由に対する圧迫を扱っている。「京都自由法学の終焉」という章の中で、美濃部は『嵐の中の百年』(向坂逸郎編)を引用しつつ、次のように述べた。「元来、京都大学は、東京大学のように純良・優秀・柔順な官吏を養成するというより、『政治的影響のない純学問的な、……従って野党的立場に立ち、官憲と必ずしも結びつかない』大学として明治三十年に設立された。

だから、京都大学の教授達は、東京大学の先生達のように、『ヤレ何々省の囑託だの委員だのと引張りまわされて勉強する余裕もないということはない、その代り、小遣取りに山の中に立てこもって内職の著書でも書くか、雑誌に寄稿する。それには何かより所がなければならぬから自然と読書にはげむ、それ故新しい学説を研究することになる、面と向ってぐずぐずいわれる心配がないから無遠慮にいい張ることもできる』そうである。そして、「こういう自由な、純学者的な伝統」が「特に顕著に現れている」のが、京大法学部の教授たちが一致団結して、「学問の自由と大学の自治」を獲得した「沢柳事件」であり、それが失われたのは、「学問の自由と大学の自治」を守ろうとして敗北してしまった「滝川事件」であったという。

東京大学と京都大学の気風の違いはともかく、この一節を読んで私は少なからず「ショック」を受けた。なぜならば、私はずっと「純良・優秀・柔順」こそ「自由な、純学者的な伝統」だと誤解していたからだ。あるいは、今日、「伝統」はすでに「変容」したのかもしれない。もしそうであるならば、私は「現実」と「知」のもたらすダブル・ショックを通してもう一度「自由な、純学者的な伝統」に出会い直したい。

11年間の留学生活・始まり・終わり

ウィーラシンハナリン
Weerasinghe Nalin

電気通信大学・博士(電子工学)

シュルンベルジェ(株)電子エンジニア

私は1994年にスリランカの高校を卒業して大学の入学に合格したものの、それから一年半以上大学に入学ができるまで母校で数学と物理を教えていました。そのとき、教えることの楽しさを知り、「大学の先生になるまで勉強しよう」と思ったことが始まりでここまで来ました。学生運動が起こるたびに開けては閉まる、閉めては開けるスリランカの大学の入学をあきらめ、1996年の春に日本文部省の奨学生として大きな夢と不安な気持ちを包んで日本へ来ました。時間の経つのが本当に早いもので、それからもう11年です。

私は「今までの人生の中で一番楽しかった時間はいつですか」と聞かれたら迷わず日本へ留学したはじめの年と答えます。それは、多種多様な文化を有する国々から同じく来日していた72人の留学生たちと共に住み、共に日本語を学びながら生涯忘れられない貴重なひと時を過ごしたことのほかありません。1996年4月2日に日本に着いたそのときから日本語学校を卒業して釧路高専へ行くその日までの間に駒場留学生会館で沢山の留学生と一緒に生活をしました。それまでスリランカではテレビや新聞などからしか聞いたことの無かった様々な文化を不思議箱を開けたみたいにかから次へと体験できました。それは共同の台所、洗濯場、風呂場などで毎日数え切れないくらい面白いことが起きました。私が今でも印象に残っていることの一つはシャワーを浴びるときにシャワー室のなかで色々な国の歌が色々なテンポであちらこちらから聞こえてきたことです。また、それまでほとんど炊事をしたことのないみんなが最初は見るからにまずそうな料理や見た目だけがおもしろいような料理を作っては苦しうにロビーで食べていました。

このように挙げれば、この1年間であった出来事は書ききれないくらいですが、私はそれまでに母に頼ってばかりいた性格から一変してなんでも一人できるようになりました。それは駒場で共に頑張った仲間や日本語学校の先生方や「KIND」というボランティア団体のメンバーのお陰です。私はこのように沢山の人のや団体から一杯エネルギーをもらいそれから釧路高専、そして電気通信大学の学部、修士、そして、博士課程までと進学してきました。その間も色々な貴重な経験をし色々な人に出会い、満足した留学生生活を終えることができました。

また、最後の年でもまた来日した初めの年と同ぐら



いに楽しい時間をすごせました。私は軽井沢の夏キャンプに参加したとき、多種多様な文化出身の人や子供が同じところに集まって共に楽しんでいたことは日本に留学したはじめの年のことを思い出させました。初めの年の様に日本語を学び日本の生活に早くなれるという不安はなかったが奨学生みんなは学位を取るという大きなプレッシャーを忘れ、お互いにいい刺激を与えていました。そして、沢山の仲間に出会い親友も作れました。そして、SGRAなどの渥美財団のコミュニティの大きさには驚きました。やはり同じようなゴールに向かってる人たちや同じ道のりを歩んできた人たちからもらえるエネルギーが大きいです。

私は学位を取得したことで日本へ来日したときに心に秘めていた夢に大きく前進しました。これまでは色々なことがありましたがここまで辿り着けたのは文部省を初めとする他の奨学金財団と渥美財団とそこで出会えたみんなのお陰です。そのみんなに大変感謝しています。これからも頑張って“イクマス”のでみなさんヨロシクお願いします。

皆さん、長い間ありがとうございました。

話し合い

ウ ッツツ
禹 成勳

東京大学・博士（建築学）
学術振興会外国人特別研究員

比較的遅れた日本留学。これを通じて数多くのことを学んで経験した。その中で今日は、(私のみが感じることも知れないが)子供達と親しくなりながら学び経験したことを紹介したいと思う。

私は1997年に結婚し、1999年には息子、2000年には娘が生まれた。日本へ来た2001年まで、私はいつも遅く帰ったし、休日には眠りっぱなしの生活であった。たまに早く帰れると子供達は、首を回して私の顔だけをみてまたおもちゃと遊んだ。たまに起きている休日に子供達と遊ぼうとしても、子供達が私を回避した。

しかし、今は変わった。一日に何回も、‘パパ!はや

くきてね! というメールを携帯電話に送る。

勿論、日本へ来る前も今も子供達と「いる」絶対的な時間はあまり差がない。それにもかかわらず子供達の態度が変わったのは、子供達と「ともに「いる」時間」と、「ともに「する」時間」の差ではないかと、私は思っている。

時間を誰かと「ともにする」方法はさまざまではあるけれど、その中で一番経済的で前向きのなのは、「話すこと」だと思う。

私は子供達と話し合いを試みた。

私: 今日は何をして遊んだの?

子供達: わからない!

私: 今日、学校(保育園)では楽しかった?

子供達: ふつう!

私: 学校(保育園)でなにがあったの?

子供達: わすれた!

子供達の返事は短かった。それ以上の対話が不可能なだけでなく、頭に来たりもした。

しかし、それは子供達の問題ではなく私の問題だった。私が子供達に私の話をしないため、子供達も自分たちの話をしなかったのだ。それで私は作戦を変えた! とりあえず、私の話をすることに。

私: ねね! 今日、パパが学校でさ…。

子供達: パパ! きょうがっこうでせんせいが…、パパ! きょうほいくえんどもだちと…、パパ! こうえんどもだちにあったよ! それで…。

子供達は絶えずべちゃ - くちゃ喋った。そして今は子供達が先に私に聞く。

‘パパ! きょうはなにをやったの?’

子供達に返事しながら私は今日一日を反省する。子供達に返事しながら私は今日一日の疲れを忘れる。

相手が誰でも、「ともにいること」だけではなにか足りない。相手が誰でも「ともに(なにか)やらない」と、いつまでもそのまま顔だけの知り合いに止まる。相手によって、彼と私との関係によって「ともにする方法」はさまざまであろうが、それが誰であっても彼らと「一緒にいる」か、それとも「ともにする」か、によって関係は変わるはずだ、と私は思っている。

2007年度渥美奨学生のページ 「自己紹介」

アブドシュクル メジテ 「21世紀外科の頂点・肝臓移植の高水準を目指して」 -----	29
詹 彩鳳 「心の原風景を探す旅に出る」 -----	30
鄧 飛 「研究者になるために」 -----	31
ガンバガナ 「私ってだれ」 -----	32
金 玫淑 「海の夢」 -----	33
李 垠庚 「日本への道、日本からの道」 -----	34
朴 昭炫 「私の履歴書」 -----	35
ポラス・ロハス・オスカル 「中米で起こっている海難事故の特徴と改善方法」 -----	36
権 明愛 「両国の交流の架け橋になる留学生の使命感を持って」 -----	37
シュラトフ・ヤロスラブ 「日露関係史の研究に当たって」 -----	38
王 剣宏 「日中両国の絆—環境に優しい土木」 -----	39
顔 海念 「日本で学びたい理由と博士号取得後の進路希望」 -----	40

21 世紀外科の頂点・肝臓移植の高水準を目指して

アブドシュクル メジテ
Abuduxukuer Mijiti

出身国：中国 (ウイグル)

在籍大学：東京医科大学大学院第五外科 (臓器移植・一般外科)

博士論文テーマ：肝臓移植における患者リンパ球の免疫抑制薬感受性に基づく

テーラーメイド薬物療法の確立



私はアブドシュクル メジテと申します、中国・ウイグル出身の医師です。2002年11月から日本の北里大学病院外科に留学し、病院長外科教授柿田章先生のご指導で臨床研修を行いました。2004年4月から東京医大大学院外科学第五講座大学院生として臓器移植免疫の基礎および臨床研究を行っております、また東京薬科大学臨床薬理学教室との共同研究を通じ、今まで学会発表8回および論文発表9編を成し、多くの研究者、先生方から高い評価を得ています。臨床面では厚生労働省の外国人医師臨床修練許可証を取得し、肝移植を始めとした肝臓外科に専念しており、生体肝移植分野で世界をリードしている田中紘一（元京大教授、現日本移植学会理事長、神戸先端医療センター長）先生や指導教官長尾桓先生らのご指導いただいていることを大変光栄かつ嬉しく感じています。

肝臓移植においては、Tacrolimus または Cyclosporin とステロイドの併用免疫抑制療法が行われます。一方薬物の治療効果には個人差があり、肝移植後各患者に対する至適免疫抑制薬の選択や投与量の設定が非常に難しい課題の一つです。薬物投与量が多過ぎると免疫能力を低下し感染症が起り、投与量が少ないと拒絶反応が起りやすくなり、肝移植後に感染症や拒絶反応のため死亡することも多い。現在、各種免疫抑制薬のどちらを選択するかには基本となるものがなく、患者の状態や副作用等を考慮に入れた経験的な判断で薬物選択が行われているのが現状です。理論的な薬物選択を行うためには、どちらの薬物がより効果的であるかを治療前に評価し、患者個々の薬物感受性に基づいた薬物選択が理想的です。私が提案したこの患者リンパ球の免疫抑制薬感受性に基づくテーラーメイド薬物療法は国際的にも認められ関連報告は国際移植学会関連誌 Cell Transplantation で発表された、APASL 2007 Kyoto (アジア、太平洋国際肝臓病学会)、American Transplant Congress 2007 (アメリカ

移植学会 2007) など国際学会でも研究発表を行いました。日本でのこの5年間は私にとってとても充実した5年間であり、世界中で多くの方々と知り会えたことを今後とも大切にしたいと思います。

日本留学を決めた理由：日本は科学、経済の先進国であり、医学分野でも世界一高いレベルであります。中国も経済の発展に伴い医学分野のレベルも高まっていますが、大都市と地方の間に格差があります。ウイグルでは研究資金および人材不足のため、基礎医学および先端医学開発と応用の研究が遅れています。特に21世紀の外科の頂点と言われている肝臓移植はまだ未解決の問題が多く、私は肝臓移植を始めとした先端医学を学び、将来祖国の先端医学発展のためおよび国民が皆平等に医療サービスを受けられるように一生懸命努力すること、さらには日中両国友好のために懸け橋として努力することを目指して日本留学を決めました。

博士号取得後の進路希望：博士号取得後、帰国し大学病院で勤務することを希望しております。大学では臨床、教育、研究に取り組んで、多くの生徒らに日本で学んだ先端医学知識を教えてあげたいと考えております。研究面では現在の研究を継続し、臨床面では生体肝移植を展開し大学で発言力を持った教授になり、日本での先生方と常に連絡をとり、国際研究交流を盛んに行い、そして日中両国友好のための懸け橋になるように努力します。私の最終の目標はウイグル自治区カシュガル市にも医学部を持つ大学を作ることであり、いろいろ難しいかもしれませんが将来この夢を現実にするために一生懸命張りたいと思います。財団の目標である世界の「調和ある発展」のため全身全霊をかけて、活躍して参りたいと思っております。

心の原風景を探す旅に出る

せん さいほう
詹 彩鳳

出身国：台湾

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科・地域文化研究専攻

博士論文テーマ：ネルー政権下における北東インドの辺境及び少数民族政策



私の故郷がある台湾中部の彰化県永靖郷は、人情の厚いところで、バナナ、パパイヤ、蓮霧や竜眼などの果実の木が随所にあり、竹やガジュマルの木に囲まれた緑の水田が連なる田舎町である。今も時々懐かしく思い出すのは、長い夏の終わりに台風が来ると、仕事から解放された近所の大人たちが集まって、廊下でお茶や酒を飲み、子供達が強い風や雨の合間に庭を駆け回り、台風に落とされた果実を拾う、という風景だ。

中学校を卒業した私は実家を離れ、高校は台中、大学は台北、大学院は東京に移り住み、故郷の風景も年毎に変化した。その後、大学2年の時初めて訪ねた台湾の東部花蓮の原住民の村で、そして4年の時スリランカやインドの最南端の町で、博士課程のフィールド調査で訪れたアッサムやマニプールの平野で見た風景は、幾度となく遠い子供の頃の実家の印象が甦ったような感動を与えてくれた。竹も水田も、夏の高温や雨上がりの空気、そして人情の厚さまでそっくりだった。今インド北東部の少数民族問題を研究している私には、いつも心の原風景を探す旅に出ているような気がした。

私が南アジアの民族問題に関心を抱き始めたのは、大学4年次にスリランカで国際会議に出席した時のことである。大学以来台湾の原住民を支援するボランティア活動に携わってきた私にとって、インド独立の前夜から、民族の「自決」や「独立」を掲げてインド政府と45年余り闘ってきた北東インド辺境の「ナガ」族の政治運動は、強く印象に残った。その後、ほぼ毎年インドへ足を運ぶようになったが、インドを訪問する回数を重ねれば重ねるほど、インドについての理解を深めるよりも、かえって疑問が膨んでいった。

大学卒業後、インドについてもっと勉強するつもりでイギリスやインドへの留学を真剣に考えた時期があった。しかし経済的問題等で断念をせざるをえなかった。ある日、知人から交流協会の日本留学奨学金の情報を得て、インドの少数民族問題研究への情熱が日に日に高まっていた私は、日本に留学しようと決めた。インドを

勉強するために日本を選択するのは、随分な曲がり道ではないかとよく言われた。しかし当時の私にとって、インドに関する書物が皆無に近い、インドを研究する土壌のない台湾に居るより、仏教伝来以降インド研究の厚い蓄積のある日本に来ることは、研究の第一歩を踏まえる唯一の選択肢に他ならなかった。

入学当初選んだ「北東インドのナガ問題」という研究テーマに関し、日本国内外に関連資料が乏しい現状に直面し、なかなか進展がなく困った日々が続いた。資料を求めてイギリスへ3回渡り、「北東インドにおけるイギリスの植民地政策」というテーマで修士論文をまとめた。イギリスでは、幸いにも独立前後の転換期にインド北東部に駐在したイギリス官僚らの報告書や私文書を数多く発見した。それらは私の最初の研究テーマと密接に関連し、独立後の少数民族運動の源流や、それに対する植民地政策の影響等を解明する貴重な鍵となった。その後博士課程に入り、二年近く及んだフィールド調査の結果に基づいて、私は「ネルー政権における北東インドの辺境及び少数民族政策」というテーマで博士論文をまとめている。

研究の拠点とした日本で、最も感謝したいのは、指導教官の中里先生をはじめ、多くの先生方や研究仲間にも恵まれたこと、そして日本交流協会、野村文化財団、恵比寿村塾、日本学術振興会と渥美国際文化財団などの手厚い経済的援助とあたたかな励ましの言葉である。そのおかげで、日本での長い研究滞在ができ、毎年待ちきれない桜の開花、キャンパスにある銀杏の四季の変化、東京の秋と冬特有な澄んだ空も身体の一部に溶け込んできたような気がした。それに、イギリスの寒い冬、インドで2年間夏を過ごした松林のある高原も、心の中にかげがえのない風景となった。これからも色々な人生風景を探しに旅を続けたいと思っている。

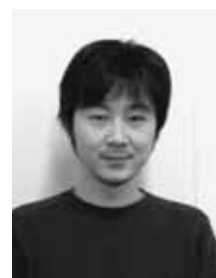
研究者になるために

テン フィ
鄧 飛

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院新領域創成科学研究科武田研究室・先端エネルギー工学専攻

博士論文テーマ：カーボンナノチューブ／樹脂ナノ複合材料の開発と物性評価



私は、鄧飛(テンフィ)と申します。現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科の博士課程に在籍しています。専攻している領域は、先端エネルギー工学です。主に研究しているテーマは、航空宇宙分野における構造材料に関する物理特性です。

中国は80年代の改革開放より、海外の情報が多く国内に入ってくるようになりました。それらの影響によって、若者たちは誰もが海外へ行って自分の可能性を試したいという考えがあります。私の場合は、家族がすでに日本に住んでおり、自分から率先して情報を収集するよりも、能動的にいろいろな情報が入ってくる状態でした。当時の私の考えは、日本は中国よりはるかに自由な国であることを感じました。例を挙げますと、極論になるかもしれませんが、中国に生活している20代の若者は、将来研究者になりたい、社長になりたい、偉い人になりたいとは考えますが、将来主席になりたいとは、怖くて考えることすらできないと思います。一方日本の場合では、将来国のトップになりたいと考えている若者はいるはずですが、怖くて考えられないということは決してないはずですが、これは、思考の自由の一例です。私は、研究者である父の影響もありまして、将来は研究者になると思っていました。ですので、自分の夢を達成するには日本に来ることが一番だと思いました。優れた指導者や研究設備を例にとっても、日本は少なくとも中国よりはるかに一つと良い環境です。

ここ数年、海外で留学してから中国へ帰国する人が増える傾向にあります。これまでの留学生の心中は、卒業後はできるだけその国に留まることが一般的でした。それは、単純に帰国と在留を天秤にかけたとき、帰国の方はあまりにも条件が悪すぎたからです。今も同じとはとても言えませんが、過去よりは少し良くなった状態です。私は、博士号を取得した後は中国へ帰国して、現在のナノ複合材料に関する研究を続けたいと強く思ってい

ます。それは、長年海外で生活したから、母国が恋しいのか、或いは愛国心が強くなったのかはわかりませんが、中国で研究をしたいという願望はあります。具体的には、博士後期課程中で参加する国際会議などを通じて、中国におけるこの分野の研究状況を把握し、実際に中国で研究を行っている機関などと情報交換や共同研究などを行いたいと思っています。帰国後は中国国内で研究活動しながら、留学した経験を生かして積極的に国際シンポジウムに参加、或いは開催することで、中国の研究界を、日本をはじめとする世界の研究界の仲間入りになるような活動をしていきたいと考えております。

私ってだれ

ガンバガナ
Gangbagana

出身国：中国(内モンゴル)

在籍大学：東京外国語大学大学院地域文化研究科

博士論文テーマ：日本の対内モンゴル政策と内モンゴル人の対応(1933-1945年)

—日本の外交政策からのアプローチ



私は中国内モンゴル自治区シリングル盟出身のモンゴル人です。1970年5月2日に、生まれました。1970年代といえば、中国における破壊と反乱の文化大革命の時期に当たります。そのため、私は小さいときから、当時の数々の出来事を耳にしており、幼い心に受けた精神的なショックも大きく、「暴力」というものに対し、強い反感を持つようになりましたが、同時に、厳しい状況を乗り越えるのに必要なチャレンジ精神を身につけることが出来ました。

その後、内モンゴル自治区の首府フフホト市にある内モンゴル師範大学附属中学校で学び、1988年9月に、北京にある中央民族大学に進学し、モンゴル言語文学を専攻しました。また、専攻の関係で、文学創作にも興味を持つようになり、勉強の傍らエッセー、詩などの創作を試み、たびたび雑誌にも掲載していました。

大学卒業後、一時国家機関に勤めたことがありますが、仕事の関係で、内モンゴル青年旅行社の業務に携わっていました。そのため、多くの外国の友人と交流ができた、国際交流に関心をもつようになりました。他方、自分の知識の乏しさを痛感し、できれば一回海外に行って、自分を磨きたいと思うようになりました。

当時、内モンゴルを訪れていた外国人客のほとんどが日本人だったので、日本でモンゴル研究が盛んに行われていることを知り、日本を留学先として強く意識しはじめました。そのうえ、日本は、内モンゴル人にとっては、留学先として一番近い国で、また、経済と科学研究の大国でもありましたので、最終的に、日本留学を決心しました。

1997年4月に、私は私費留学生として日本に来ました。その後、東京外国語大学大学院に進学し、最初は言語文化を専攻しました。ところが、しばらく経ってから、

日本では、モンゴル近代史の研究が非常に盛んに行われていることを知り、研究方向をかえ、内モンゴル近代史を研究することになりました。

これから、今までどおりに研究に専念し、博士号を目指す一方、さまざまな社会問題や国際交流にも関心を持ちつづけ、積極的に参加していきたいと思っています。

海の夢

キム ミンスク
金 玫淑

出身国：韓国

在籍大学：早稲田大学理工学術院総合研究所理工学研究所・客員研究員

博士論文テーマ：植民地朝鮮における歴史的建造物の保存と修理工事に関する研究



私の生まれ故郷は、「東洋のナポリ」と言われるぐらい1年中暖かく、海が綺麗な韓国の統営というところである。荒れて白波で覆われた海の怖さを知っているせいか、海辺育ちであるにも係わらず、私は全く泳げない。しかし、海を眺めるのは大好きで、海を見ていると落ち着くので、考え事がある時は自然と海の方に足が向かってしまう。

大学の受験を控えていたある日、私は母親から「将来、あなたはあの海を渡って海外に行くかもしれないですよ。」と言われた。私が大学に受かるかどうか心配になった母が占い師を訪ねたら、海外に縁があると言われたそうである。その時は面白半分で「その縁って何？留学？それとも国際結婚？しかし、あの海を渡るってどこに行くって？日本？それともアメリカ？」と母親に問い直したが、それから6年後、私は海外留学を夢見るようになった。

日本という国を選んだのは関野貞の『韓国建築調査報告』を読んで、衝撃を受けたからである。韓国建築史の黎明期を開いた著書であるにもかかわらず、韓国では植民地時代に日本人によって行われた研究という理由で授業中にはほとんど言及されることがなかった。当時、個人的な感想としては、関野の研究は日本での研究の蓄積なしには考えられず、私は日本の建築史研究の歴史に興味を惹かれ、日本留学を決心した。

留学の許可が降りた時、親はキムチなしの生活、床暖房のない畳部屋での生活に私が耐えきれず、すぐ帰国するだろうと思ったらしい。ところが、親の予想とは裏腹に日本語学校でひらがなから勉強した私は、韓国でお世話になった大学院の先生の紹介で2002年に早稲田大学大学院に研究生として入学し、翌年に博士課程に進学した。

私の憧れだった早稲田大学での最初の1年間は週に二

日しか家に帰れない状況に遭遇した。泊まり込みでない勉強についていけなかったのである。2年目、3年目になるにつれ、研究室泊まりの日数は減ったが、夜中に行われる議論が熱く、楽しく、今や研究室の近くに住まいを移してしまった。何時に終わってもいつでも帰れるように。

熱い議論の中には、もちろん日韓問題も含まれていたが、文化の伝播や人の移動、技術の問題などが多かった。古代には日本が大陸から文化を吸収したが、近代になると日本から韓国へと人や技術が動く。これに着目したのが、近代という時代の中で近世以前の建物の修理にもたらされた異国人の考え方や技術を研究する現在の自分の研究テーマである。

博士号取得後は、文化財の保存修復現場や大学・研究機関などで研究を続けながら、国境を越えての文化遺産の保存・活用のためのネットワーク構築のために努力していきたいと思う。

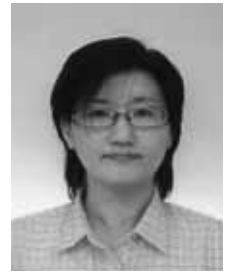
日本への道、日本からの道

イ リン
李 垠庚

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科地域文化専攻

博士論文テーマ：羽仁もと子研究：近代日本における女性キリスト者の思想と「生活」



私は、韓国南部の静かな中小都市に生まれ、両親ともジャーナリスト兼教育者であったクリスチャン・ホームに育ちました。地方の新聞社編集長を経て、日本で博士学位を取得した後、韓国の大学で日本語・日本文化を教えていた父親の影響で、幼い頃から、歴史への関心と日本社会・日本人への好感を持っていました。また、多様なスタイルの文章を書くことが好きで、一般の人が優しく読むことができ、更に感動を与えられる文章を書くことを、ライフワークにしたいという希望も持つようになりました。

大学に進学し、学部課程(東洋史学科)で歴史を専攻しましたが、過去の資料に埋没するより「現在」の問題と直接結び付く研究への思いが強くなり、修士課程進学と共に、韓国の過去と緊密に関わっているだけでなく韓国の将来をも示唆する日本を、研究の対象地域と決めました。修士論文の「キリシタン大名大友宗麟」の研究は、韓国人にとっては16世紀日本との初の出会いであり、宗教人として持つべき望ましい政治家としての姿と行動に対する考察の成果物となりました。日本留学は、日本研究をする韓国人研究者にとって必要不可欠な道ですが、日本での留学生活は、それ以上に、大きな意味があるものとなりました。

それは、来日して、日本人の日常生活や宗教活動などを見つめる内に、現代日本人の日常生活を形成し支配する原理についての疑問が深まる中で、研究テーマの「羽仁もと子」(1873～1957)という人物に出会えたことです。彼女は、鋭い視点で近代日本社会の問題点を見極め、みづからキリスト教思想に基づく教育と家庭の改革を行い、「合理的な日常生活」や「社会としての学校」を実現していくなど、独特な思想を持って活動した女性で、彼女の問題意識は、現代社会に対しても多くのことを示唆していると思われました。

このような日本女性を取り上げることは、韓国での従来の日韓関係や日本社会の研究方法とは異なる、女性の

視線や日常生活に基づいて日本と日本人を見る新たな試みであり、その実像の理解のために有意義な研究になると思います。それに加えて、羽仁もと子がキリスト教という宗教を、どんなかたちで近代日本の政治・日常生活・教育に適用させようとしたかを考察することによって、社会における宗教人の働きかけ方や役割など、その生き方についても認識の視野を広げてくれると考えられます。

そして、日本留学で忘れられないもう一つの大事な経験といえることは、日本で出会った先生方の学生への接し方、講義での人格的な品性に大きな刺激を受け、多くを教えられたことでした。私も、単なる知識と情報の収集や伝達ではなく「人格的」な知識の創造と伝達者、そして奉仕者になりたいと思い、素晴らしい先生方に巡り会えたことは、日本留学により得られた貴重な財産となりました。

博士学位取得後は、まず母校で非常勤として教鞭を執るかたわら、学界や学術誌を通じて日本での研究の成果を報告することを予定しています。更に、学問的研究を蓄積した後の目標として、日本で韓国語を教えながら、外国人に自国のことを伝える楽しみや教え甲斐を感じつつ、もっと文化や歴史を含めて東アジア三国を比較しながら幅広く取り上げる必要をも強く感じていることから、日本や中国での教育に携わり、日韓中に関わる研究と生活を経験した韓国人としての責任を果たしたいと思っています。

また、人文学的教育を受け、教会共同体や中国生活などを経験し、時事や文化への関心が高いこと、更に、日本留学の経験、そして日本のキリスト教と女性、ジャーナリズムと教育など、従来注目されなかった分野の研究機会を得たことから、学問だけではなく、スポーツや生活・文化など多様な素材を読み易い文章で韓国に紹介する執筆活動にも挑戦したいと思っています。

私の履歴書



パク ソヒョン
朴 昭炫

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院人文社会系文化資源学研究専攻

博士論文テーマ：国立近代美術館設立の歴史—国家による芸術支援を考える—

私にとって日本留学は、研究における問題関心を練り上げていく中で導き出された選択だったと思われます。研究者の道を希望するようになったのは、大学に進学する時からです。大学時代は、現代の大衆メディアを代表する多様な視覚メディアに関心を持ちました。美術史を勉強するようになったのも、そうした関心からでした。美術史には大衆メディアをなす視覚言語の構成原理やその生産をめぐる社会構造などの歴史が刻み込まれていると思うようになり、大学院に進学してからは主に20世紀の美術史や美術理論を勉強しました。

そしてアメリカの美術館・美術史・美術評論などの美術制度がヨーロッパの美術運動をどのように歴史化したか、という問題について修士論文を書きました。これを期に、美術史そのものが国際情勢に連動して絶え間なく書き直されてきたこと、そのアメリカ発信の20世紀美術史が疑いようのない定説として国際的に流通され、大きな影響力を行使することに、改めて気づくようになりました。それは、自分が韓国で学んだ西洋美術史とそれをモデルとして20世紀に作られた韓国美術史という枠組みそのものへの自覚を強め、国際的な力学という視点から美術史学をはじめ様々な美術制度を考え直すきっかけとなりました。

ちょうどその頃、日本においては、「日本美術史」という学問体系や言説が近代化以降の歴史的産物であるという研究成果が活発に出され、韓国にも紹介されました。日本における近代的美術制度全般、特に近代化と共に西洋からもたらされた美術制度への問い直しは、日本だけでなく、西洋文化全体、ひいては日本を窓口として近代化を進めざるを得なかった韓国までを包括して、その国際的ダイナミズムを考察できる可能性を孕んでいるように思われました。これが日本留学を決めた思考上の動機だったといえます。

それに、日本の充実した奨学制度や積極的な留学生誘致政策、現在在籍している東京大学文化資源学研究室という環境は、安定的な研究を支えてくれた上に、自分の問題関心を日本の文化政策や多方面の文化現象との関係から捉えられる機会を与えてくれました。現在書いている博士論文にたどり着くことができたのも、そのような環境にめぐりあえたおかげだと思います。これから博士号を取得してからの進路を考える上でも、そうした自分の留学経験と研究成果を生かし、一国の歴史や文化という閉ざされた領域に留まらず、幅広いコミュニケーションや議論の地平を開いていくのに貢献できればと望んでいます。そのために、今のところ、大学や研究機関に勤めたいという希望を抱いていますが、博士論文を書きながらその希望についても具体的に模索していきたいと思っています。

中米で起こっている海難事故の特徴と改善方法

ポラス ロハス オスカル
Porras Rojas Oscar

出身国：コスタリカ

在学大学：東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科応用環境システム学

博士論文テーマ：中米海域の海難事故研究



私は中米コスタリカから参りましたポラス ロハス オスカルです。東京海洋大学大学院海洋科学研究科の学生です。中米で発生している海難事故の研究をしています。

コスタリカは太平洋とカリブ海の二つの海を持っています。国の経済は農業と牧畜業が中心で漁業はあまり関心を持たれていません。このことは全中米諸国も同じです。一般的には漁業は危険だと考えられています。漁師達の一番の心配事は、漁に出たら無事に家に帰って来られるかどうかということです。私自身 1985 年エルサルバドル海域で調査中に船のエンジンが 2 回も止まって漂流した経験を持っています。最初は海の仕事は危険だという認識くらいでしたが調査していくうちに、中米の死亡率が極端に多いことに驚きました。

そこで、このテーマについて研究したく大学院を探しました。コスタリカ国内やラテンアメリカにはありません。私の知っている限りでは、世界中では日本とスペインだけでした。

日本は海難事故研究では世界中で一番進んでいます。そして、日本人が一番大切にしているものは命です。かつて日本も多くの労働者が海で命を失いました。そのたびに日本人は原因を追究し、安全対策を研究した結果、死者数は減少しました。中米では反対に死者数は増加しています。日本には 1948 年から海難事故の統計、データベースがあり、昔から起こった事故の調査と裁判をしています。そして、それを直す努力をしていますし、記録をしています。私は中米の死者数をどうしても減らしたく、この問題を解決するために、日本が一番よいお手本になると考え、日本を選び、勉強に来ました。

日本の大学は資格をとるにはとても大変です。最低でも論文発表は国内学会 2 回、国際学会 1 回、その他学会

出席の時間数が決められています。そして卒業論文です。研究ははじめに努力が必要で時間が掛かりますが、大変興味深く勉強に集中しています。

私は 22 年前にも日本に留学をして、同じ大学院の同じ先生方に教わりました。今はその先生方から豊富な経験と知識の全てを頂いております。来日前はコスタリカ大学で航海学と水産学を教えておりましたので、卒業後は再び自国の同じ大学に戻ります。勉強したことを国に持ち帰り、私を待っている人々のために使いたいと思っています。まずは中米諸国、近い将来は全ラテンアメリカ諸国に私の持っているもの全てを役に立てたいと切に希望しております。

両国の交流の架け橋になる留学生の使命感を持って

チェン ミンアイ
権 明愛

出身国：中国

在籍大学：日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科

博士論文テーマ：自閉症児における対人関係の変化に及ぼす「手がかり効果」に関する研究



日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程2年生の権明愛（チェン ミンアイ）と申します。留学して今年でちょうど5年になります。日本語学校半年、埼玉大学の教育学研究科で研究生1年間と修士課程2年間を経て、現在に至ります。

研究は、中国大連にある遼寧師範大学での卒業論文から現在まで自閉症を対象にしてきております。私の留学生活と研究生活は、すべて自閉症児との出会いから始まったのです。

最初、私が自閉症という名前を知ったのは、大学三年生の時、通っていた遼寧師範大学で通園施設が設立され、そこで指導を受けている自閉症児とかかわり始めたのがきっかけでした。当時、施設といっても大学の実験クラスのような存在で、臨床経験を持つ先生がまったくおらず、大学の付属幼稚園の先生一人と保育士一人、そして自閉症児の親が一人、計3人で自閉症児4人とダウン症児2人の指導をしていました。今振り返って考えてみると、そのときは指導といっても、専門知識や臨床経験がなかったため、毎日いろいろな問題を抱えながら、アメリカの行動療法をそのままねじつつ指導を行っていました。私自身も、その時ボランティアとして週3回施設で子どもとかかわりましたが、何もできず、ただ戸惑うばかりでした。

ちょうど、子どもとかかわっている人たちが無力感で迷っている時期に、埼玉大学の西村章次教授（修士課程の指導教官）が中国を訪れ、施設の子どもの診断し、講演をなさるようになり、そこで、初めて、臨床ということの意味が分かるようになりました。四年生になった次年度、西村章次教授が再び遼寧師範大学にいらっしゃいました。その時は迷わず、西村章次教授に「ぜひ先生のもとで、診断方法と臨床を学んで中国に持ち帰りたい」

とお願い、留学を決めたのです。

来日後、初心を忘れずに、西村章次教授のもとで、子どもの発達診断をしたり、不登校になっている自閉症児の指導プログラムを立てて指導しながら、臨床を学びました。今、博士論文の作成のための研究に最大の努力を払いつつ、ボランティアとして知的障害児通園施設に入り、自閉症児の指導方法を学び続けております。現在は、一人で医科大や幼稚園で発達診断もできるようになりました。研究も順調に進んでおり、去年からは、中日交流を計るような活動も始めております。去年は、日本自閉症協会の会長や大学教授そして施設の方々を北京に案内し、北京大学で講演を企画したりしながら、北京自閉症協会との提携の企画を行いました。今年も、北京自閉症協会の方々を日本を訪問し、進んでいる日本の自閉症の治療教育を学んだり、中日自閉症協会の提携を具体化していくよう企画を進行させております。

博士課程を終えた後は、できれば日本の大学で学生を教えながら臨床を学び続けたいと思っております。そして、始まったばかりの中日交流のため活動を続け、中国の自閉症支援の向上に力をつくしていきたいと思っております。

日露関係史の研究に当たって

シュラトフ ヤロスラフ
Shulatov Yaroslav

出身国：ロシア

在籍大学：慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻

博士論文テーマ：日露戦争から第一次大戦にかけての日露関係（1905 - 1914）



私は、1980年にハバロフスク州コムソモルスク・ナ・アムール市に生まれたシュラトフ・ヤロスラフと申します。少年時代から日本に興味を持った私は1996年にハバロフスク国立教育大学東洋学部日本語に入学し、日本語だけではなく日本文化や歴史を勉強し始めた。大学3年生の時、学生学術会議に日露関係について発表することになり、報告を準備している間に日露関係史を調べたところ、日露戦争後の両国関係に関しては書籍がほとんどないに等しいことに気づいた。1916年の日露同盟について既に聞いたことがあった私は、日露関係の一番友好的時期はあまり知られていないことが残念に思い、卒業後この時期を研究することを決心した。そして、2002年大学院後期博士課程に入学し、日露戦争後の日露関係の研究に取り組んできた。

二国関係を客観的に追究するには、一つの国の見解や資料に基づくものではなく、相手の国または周辺の国々の立場を考慮に入れ、多面的に資料を確保することが欠かせないと考えている。このように、日露関係の研究にはロシア側と日本側の史料は不可欠なものであり、場合によってはアメリカ・イギリスなどの史料も利用しなければならないこともある。以上のような理由で、私はモスクワやサンクト・ペテルブルグ、ハバロフスク、ウラジオストックなどの史料館にて当該時期の日露関係に関連するロシア側の資料を収集しながら、日本留学を決めたわけである。そして、日本文部科学省の奨学金に応募して、慶應義塾大学大学院にて研究を続けることになった。

現在、私は後期博士課程3年生であり、来学年中に博士論文を提出したいと思っている。博士号を取得した後に研究をやめるつもりはなく、続けて学問の道を歩みたいと考えている。冷戦などのせいで、つい最近までロシアと日本の研究者は相手国の史料を自由に利用すること

はできない状態であった。このように、日本の史料館所蔵の資料をロシアに紹介し、未公開であったロシア史料を日本側に伝えるのは極めて重要な課題である。以上のようなわけで、私はロシアの史料館にて発掘した史料を日本側の史料と比較分析をしながら、欧米の史料も取り入れ、20世紀前半期の日露関係を更に究明していきたいと思っている。

日中両国の絆—環境に優しい土木

おう けんこう
王 剣宏

出身国：中国

在籍大学：早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻

博士論文テーマ：大深度地下水道管の外水圧による座屈挙動および設計に関する研究



私は1998年に武漢大学を卒業してから中国の石油会社の建設会社に就職しました。良い上司に恵まれ、2000年までの短い1年半でしたが、この間に建物の設計の仕事や管路、社宅などの施工現場の仕事をすることができました。今考えるとそれは私の土木屋の道への起点となったものと思います。当時勤めていた中国石油会社の中に日中合弁会社がありまして、毎年数人を日本へ派遣していました。2000年、私は幸いに国の派遣技術者に選ばれました。日中友好交流の使者として、世界の中でも先進的な日本で、土木の仕事ができることになりました。日本に来たとき最初に一番感動したのは、日本の交通システムの便利さと青い空、それに新鮮な空気でした。それから、3年間に橋梁設計などのいろいろな仕事に携わり、日本のインフラの建設技術を知りました。そして、日本の便利な生活と良好な環境は、環境にやさしい土木技術により支えられていることがわかりました。この技術を勉強したい気持ちがどんどん強くなったところに、鹿島建設の研究所で仕事するチャンスがきました。ここで環境にやさしい土木技術の真髄に触れ、そのためには高度な専門知識が必要であることを知りました。それを得るために私は日本での仕事が終る直前に、環境にやさしい土木技術を提唱している早稲田大学の大学院、建設工学専攻を受験しました。運良くこれに合格し、都市トンネルの構築工法として日本で盛んに使われているシールド工法を勉強することになりました。

シールド技術を使って地下空間を有効に利用することによって、上下水道、電気や通信のケーブルを入れる共同溝、ガス管路や道路、地下鉄道などのインフラ施設を整備すれば、安全の確保や便利さだけでなく、地上の緑を増やし、都市の景観を向上させることができます。また、道路の地下化によって、排気ガスも処理しやすく、大気汚染を減らすことができます。さらに、大深度の

地下を利用することによって、地上の環境を改善でき、人々の生活をもっと便利で快適なものにすることができます。このシールド技術や地下空間の利用技術は日本が世界の最先端に位置しています。これを使って生活に便利な、そして環境に配慮した日本の都市が造られています。

現在の中国は経済の発展につれて、水道、電気、交通などのインフラの建設が急速に進められています。しかし、経験の不足や高度の技術を持つ人材が足りないなどの理由から、それらの建設中にさまざまな問題が出てきています。とくに、環境への配慮は不十分で、近い将来に大きな問題を残すことになりかねないと思います。日本の技術と経験を中国の建設に活かすことができれば、中国にも環境にやさしいインフラ施設を作ることができ、人々に便利な生活を提供するだけでなく、中国の都市部の環境の改善に大きな力となると思っています。

私は日中両国の架け橋として、日本の土木技術を中国に導入することにより、日中両国の将来の土木技術の発展や日中両国の友好的な交流に力を尽くしたいと思います。今指導していただいている小泉先生は数年前から「日中シールドトンネル技術交流会」を立ち上げ、2国間の技術交流を推進しています。私は最初からこれを手伝っていますが、卒業後も引き続き協力し、さらに発展させられるように、そして、日中両国の交流をますます推進させられるように、努力したいと思います。

日本で学びたい理由と博士号取得後の進路希望

任 カイネン
顔 海念

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院医学系研究科・国際保健学専攻

博士論文テーマ：先天性サイトメガロウイルス感染症のリスク因子としての
ウイルス遺伝子型の解析



私は中国の医科大学医学部において基礎課程と臨床課程を修了した後、大学病院で小児科医として勤務しておりました。臨床医として、小児患者の診察・治療に携わる中で、小児の病気は発達過程での栄養状態および発育環境、また、胎内環境すなわち母親の健康状態が大きく関与していることを強く認識致しました。しかし、中国の医療レベルは近年著しく向上はしているものの、まだ先進国には及ばず、基礎医学レベルの進歩が必要とされています。私は医学雑誌、新聞や友人を通じて日本の基礎医学・医療技術がすばらしく進歩していることを知り、医学技術を習得し、母国の小児保健医学の発展に役立てることを目的に日本への留学を決意致しました。日本と中国の文化は類似したものがあり、学術的・技術的な交流も深いので、技術が習得しやすいのではないかなと思ったのも日本留学を決めた理由のひとつです。

来日後は、上智大学大学院で研究生とし生命科学を専攻し基礎医学を学びました。2002年4月より東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻研究生に就学してから、該当教室のテーマであるアジア母子感染症のウイルスの迅速診断法・予防と治療に関する研究に熱心に取り込んでおりました。2005年4月より同大学院同教室の牛島廣治教授の指導の下で、サイトメガロウイルス(CMV)を中心に博士課程の研究テーマを進めております。現在は、国立感染症研究所(感染研)ウイルス1部井上室長の共同研究に基づき、東大と感染研の両施設において日々実験研究を行っています。

博士号取得後は、現在の博士課程の研究成果を十分に活用させ、予防・診断・治療に結びつく努力をしていきます。1) 母国に戻り医科大学の研究所で日本で学んだ専門知識と先進技術を中国小児保健学分野に活かし、他

分野の研究者・臨床医と連携し、ワーク・チームを作り、母子感染に重要なウイルス(CMVのほか、肝炎ウイルス・HIV・風疹ウイルス等)の研究を精力的に行ない、母子感染から子どもの健康を守ると考えています。2) 国際学術交流に通じて、多くの国の研究者とも連携し、近い将来先天性CMV感染の予防・治療など感染症対策のための基盤を構築していくことに貢献したい。3) 若い研究者を育てることに力尽くしたい。

私は日本留学・研究生活は私にとって非常に楽しく充実していると実感しております。中国と日本の医療の掛け橋となれる様、今後も日本との交流を深め、相互の小児保健医療の向上を目指していきたいです。

2006年度

海外学会派遣プログラム参加報告

イコ プラムディオノ 「i-Society 国際学会の参加報告」 ----- 42

アディオレ エマニエル 「久しぶりの日本」 ----- 43

i-Society 国際学会の参加報告

イコ プラムディオノ

博士（工学）東京大学

NTT 情報流通プラットフォーム研究所 研究員

2002年度奨学生

2006年8月7日から10日にかけて、米国フロリダ州のマイアミに開催された i-Society 2006 という国際会議に参加しました。i-Society とはデジタル社会における知識進化を社会学と情報学の両面でアプローチする学際的な国際学会という趣旨で、IEEE や ACM といった情報学分野の著名組織だけではなく、E-Center for Infonomics といった社会学の組織も共催する異色な学会です。要するに情報技術と実社会へのインパクトに関する学会ですが、情報技術が普及して実社会に様々な影響を及ぼすようになったため、このような学際的な学会への注目が高まっています。研究分野も e コマース、プライバシー、e ラーニング、電子政府、電子芸術等といった多岐にわたるものです。多様な研究者が集まることで、枠にとらわれない議論が可能になり、貴重な意見を聞ける場となりました。

もう一つの特徴は多数の国から論文が投稿されたことです。38カ国からの研究者が180の論文を投稿し、発表されました。最終的に39の論文が採択されましたが、17カ国の研究者が集まる学会となりました。

社会学と情報学を融合した学会だけに、基調講演も実社会との関連がユニークなものが設けられました。最も印象深かったのがイギリスの Reading 大学の Kevin Warwick 先生の基調講演でした。Warwick 先生がサイボーグ男又は50万ドル男とも呼ばれている人物らしいです。なぜならば電子センサーを自分の腕に3ヶ月も埋め込んだ実験を行ったからです。講演では、左腕に人体改造手術を施し、シリコンチップを埋め込み、センサーを神経につないで機械と人間との様々なインタラクション（相互作用）について語ったり、近未来の社会像を垣間見ることができるような気がしました。手が不自由

な方の治療に役立つだけではなく、米国にいながら、大西洋をまたいで英国にある義手を遠隔操作したり、手を動かすことで妻のネックレスを光らせたりした様々なユニークな実験も見せてくれました。Warwick 先生の夢は脳を直接つなぎ、通信したいそうですが、そこまでなくても、人間と機械のインタラクションがこれから多様化していくでしょう。個人的に、この分野では、日本の微細加工技術やロボット技術がこれから大いに貢献できると期待しています。

発表された論文の中で、日本からの論文で面白かったものを紹介します。影戸誠先生（日本福祉大学）が1999年から毎年実施した英語によるアジア各国の学生の共同研究に関する研究を発表しました。母語ではない英語を用いた交流の様々な問題点が分析され、インターネットをはじめとした情報技術を用いてそれらの問題の解決策を検討している内容です。

今回の学会は私の初めての参加です。私の発表は一連の電子メール会話より重要な話題を抽出して、次世代 Web と言われるセマンティック Web の技術で様々なデータと統合することで、ユーザのニーズに合う横断検索を可能にした研究についてです。電子メールがもはや主流のコミュニケーション手段となった現代社会において、コミュニケーションツール以上の使い方を模索している研究です。メール解析に関する研究はプライバシー問題に配慮しなければなりません。私の研究はメール中身のプライバシーを保護しながら、メールを共有して他のデータとの統合や他のユーザとの新たなインタラクションというメリットもユーザに提供できるようにするものです。

発表の後の学会レセプションで、うれしいサプライズがありました。何と私の論文がベストペーパー（最優秀論文賞）として選ばれました。研究の問題提起の新しい視点に加えて実際にプロトタイプとして実装したところが評価されたようです。こんな国際学会に自分の研究成果が高く評価されて光栄に思っております。

日本に戻る前日に、ちょうどイギリスで飛行機テロ事件が事前に防止されて、飛行機のセキュリティーチェックが非常に厳しくなり、ひやひやしましたが、この学会に参加できて、貴重な経験となりました。

久しぶりの日本

エマニュエル・アディオレ

博士（工学）東京大学

ナイジェリア・エネルギー環境研究所研究員

1998年度奨学生

日本を離れて何年かたっていたので、昨年2006年8月に東京を訪れたときは驚くばかりだった。8月という暑くて湿気の多い夏には慣れていたものの、私が住んでいたところに比べていくつかの変化に気づかずにはいれなかった。新しい地下鉄線、六本木の高層ビル、新しくなったと思われるビジネスマンの服装規定、すべてが目新しく融合されて見えた。中でも目を見張る光景は、東京の街のほとんどすみずみを飾る緑だったといえるだろう。暑い夏の最中でありながら、どこもととても涼しそうに見えた。

東京大学は私が最初に訪問した所であり、また今回の旅行の大半を過ごした場所だ。実際、この大学も、東京におけるいろんな変化と同じように変わったといえる。構内に建てられた多くの新しい建物に加え、大規模な改築がいたるところで見られた。新しい改修は、構内の比較的古い建物が地震のような非常事態に耐えられるようにするためだと聞いた。この新しく改修された建物に加え、東大の隅々が大学の光景を飾る新しい建物とうまく融和された緑に包まれていた。さらに目に付いたのは、ほとんどすべての学部に、いくつかはその近辺に、カフェまたはレストランがあり、学食に変わる場所を提供していた。しかし、私が東京大学にいたころ学食でとても有名だった味噌汁とご飯のセットが無かったので、私の友人と会うときはほとんどいつも学食を選んだことを納得していただけなのでしょう。

今回の東京への旅行で、多くの旧友と会って旧交を温める機会をもてたし、研究交流を再構築できた。国連大学でのアフリカ開発会議に加え、田中明彦教授や教授の新しい研究チームのメンバーと会うことができた。琉球大学の林泉忠氏（2000ラクーン）と会いたかったが、彼は東アジアに研究旅行に出かけていたため、叶わなかった。また、古い魚市場の近くの新しく広い建物の中のエネルギー経済研究所を訪問する機会もあった。何人かの研究者は夏休み休暇中だったが、そこにいた研究スタッフと大変興味深いディスカッションをすることができた。その時に話題に上った事柄から、数名の研究者は、ナイジェリアの石油やガス生産施設の問題についてナイジェリアから直接の情報をほしがっている印象を受けた。

今回のハイライトは、今西常務理事とマックス・マキト氏（1995ラクーン）との出会いであり、豪華な食事でもてなしていただいたばかりでなく、渥美財団の大きな封筒をいただいた。私は自国に今戻ってきているので、次回にまた訪れる機会を楽しみにしている。願わくは、今回の旅行と同じく実りあるものになるように。

AISF ネットワーク

- ラクーン会 45

- 第6回日韓アジア未来フォーラム in 葉山
「親日・反日・克日」 58

- 第1回SGRAフォーラム in 北京
パネルディスカッション「若者の未来と日本語」 60

- 関口グローバル研究会（SGRA） 62



ラクーン会レポート

常務理事 今西淳子



■ 第5回韓国ラクーン会 (KSR) in ソウル

4月1日、ソウルで第5回韓国ラクーン会 (KSR) が開かれました。15人という大人数が集まったので、大変にぎやかな会となりました。ソウル在住のメンバーは、金雄熙 (06狸)、南基正 (06狸)、李来賛 (KSR 会長、06狸)、李香哲 (07狸)、羅仁淑 (08狸、東京から)、高熙卓 (00狸)、蔡相憲 (03狸)、金賢旭 (KRS 幹事、03狸)、韓京子 (05狸)、金香海 (01狸、延辺大学より長期訪問中) と、日本から理事長と今西さんを含めご家族5人が参加して下さいました。皆さんの近況報告があつてから、自由に会話を楽しんでいるうちに、いつものように、あっという間に3時間がすぎてしまいました。理事長からは珍しい旅行談が、今年一年間ソウルに滞在している金香海さんからは、中国での韓流の動向などが聞けました。みなさんそれぞれ面白い話題を出してくださり、とても楽しい会となりました。(文責：金賢旭 2003 ラクーン)



■ ラクーン会 in 東京

2006年8月25日、調査研究のために5年ぶりに日本を訪れたエマニュエル・アディオレさん (1998狸) と、マキトさん (1995狸) と今西が集まり、椿山荘の和食レストランでミニラクーン会を開催し、相変わらず大変そうなナイジェリアの情勢をたくさん教えていただきました。日本語が全く衰えていないのは、時々、ナイジェリアの日本大使館に行って、国内情勢を館員に説明しているからでしょう。アフリカは遠いですが、今後も日本への橋渡し役を是非努めていただきたいと思います。(文責：今西淳子)

ゴールデンウィークの中国旅行記
～香港、広州、西安、ウルムチ～

渥美財団常務理事 今西淳子

もう既に1ヶ月が過ぎてしまいましたが、5月の連休に香港、広州、西安、ウルムチで、ラクーンの皆さんに大変お世話になりましたので、ご報告します。

C I S Vという私の所属するボランティア組織が、今年の7月に子供の国際キャンプを開催するために、アジア太平洋地域コーディネーターの私は、しばしば広州へ行くのですが、今回は昨年9月から香港中文大学医学部に勤務されている叶盛さん(04狸)を訪ねて香港からはいりました。香港空港は毎年のように通りますが、市内に宿泊したのは久しぶり。空港には、叶さんが、将来の奥さんと一緒に迎えに来てくださいました。市内の瀟洒なホテルに荷物を置いてから、さっそく地下鉄で叶さんの研究室のある Prince of Wales 病院へ行きました。そこで、日本留学を希望している南アフリカから帰ってきた日本語がぺらぺらの香港人の同僚と合流し、市内のレストランへ。日本語と広東語と標準中国語と英語がごちゃまぜの夕食会になりました。香港や広州では、広東語が話せないと、今でもかなり不便なことが多いようです。久しぶりの香港は、とても便利で、活気があって、しかも何でもできそうで、住みやすそうに見えました。



広州では、C I S Vの打ち合わせや、家族の集まりがあって時間が限られていたのですが、キャンプサイトの学校と、広州中医薬大学の奇錦峰さん(01狸)

の「会社」が近いので、近くの公園へ連れて行っていただき、木陰で烏龍茶を飲みながらおしゃべりしました。まわりでは、おじいちゃんやおばあちゃん、子供たちも一緒に家族連れが食事をしていたり、トランプに興じている男性グループがいたり、大勢の人々が休日の午後をゆったりと過ごしていました。5月というのに、蟬が公園中で鳴いていました。

C I S Vで一緒のポルトガル人が、「中国へ行くなら兵馬俑を見たい」というので、おつきあいして西安に行きました。高偉俊さん(95狸)からご紹介いただいた、西安交通大学の周典先生と、わざわざ山東省から12時間ドライブしてきてくださった、貿易会社の中国側社長さんもしているバイオリン演奏家の王旦さん(99狸)が、弟さんやお友達と一緒に賑やかに案内してくださいました。王さんは、9月から西安音楽大学でバイオリンを教えることになったそうです。旅行ブームの中国でもゴールデンウィークですから、古都西安は観光客が溢れていて、兵馬俑や大雁塔は人、人、人、人・・・この大人数をさばいてしまうのが、さすが中国。兵馬俑は3回めでしたが、博物館自体はそんなに変わらないけど、西安から高速道路が続き、昔は一面の綿花畑だったところは、今はすっかり町になっていました。

西安で今流行している「農民レストラン」に行きました。郊外にあって、農民が自分の家でレストランをしており、民宿もあるとか。野菜の家庭料理が多くて安くて美味しい。大学と研究所の多い学術都市である西安の人々が、郊外の農村で週末を過ごすのを愉むというのは、さすが文士の国だと思いました。何でも、政府は農地を森林にする開発(?)計画を進めており、畑がなくなった農民たちが、このエコツーリズムの担い手になっているのだそうです。西安のど真ん中には、唐時代の町を再現したテーマパークができたり、郊外に巨大な温室の中のレストランがあったり、都市の中産階級と中国全土から集まる観光客を対象にした新しい娯楽施設がどんどん建設されているという印象を受けました。

華やかで人の溢れる西安から、アブリズさん(02狸)を訪ねてウルムチへ飛びました。西安まで行くのだから、もう一足延ばして新疆までと思ったのですが、

実は西安→ウルムチの方が西安→香港よりも遠い。ウルムチの空港には、アブリズさんが奥様と一緒に迎えてくださり、市内のホテルまで送っていただきました。中国の他の都市で漢字とアルファベットだった道路標識は、ここでは漢字とアラビア文字のウイグル語。ウイグル時間は北京時間より2時間遅らせませんが、私の宿泊した漢民族の経営するホテルでは標準語と北京時間が使われています。そして、一番大変だったのは、英語が殆ど通じないこと。結果として、アブリズさんにほぼ100%通訳をお願いすることになってしまいました。

2日めは、トゥールファンへ沙漠をドライブしました。香港から西安まで真夏の暑さだったのに、ウルムチへ着いた時は上着が必要なくらい、そして、この朝、風車の林(?)で写真撮影のために降りた時は、コートが必要なほどでした。そこから2時間あまり下ったトゥールファンは再び真夏。孫悟空が通った火焰山のある沙漠の中のオアシスです。2千年以上前から天山山脈の雪解け水を地下で流す灌漑(カレズ)設備があり、町中が葡萄畑でした。葡萄の収穫期は7月~11月ということで、今回は一粒も食べられませんでした。とても甘くて世界的に有名だそうです。干しぶどうや葡萄酒にして出荷されていますが、フレッシュな新疆のぶどうを是非食べてみたいです!



いくつかの遺跡をまわった後、イスラエルの死海の次に標高が低い(海拔マイナス154m)塩水湖があるというので、是非そこへ行って見てみたいと思いました。観光地だと思って気楽にお願いしたのですが、それが冒険の始まりでした。何でも、いつもの道が雨で流されてしまったので、別の道で行くのだそうです。

何人もの人に道を聞き、途中で村人を乗せて案内してもらったりもし、やっと湖の入り口のようなところにたどり着きました。といっても、まわりは一面の沙漠。そして車の轍が作ったがたがた道を、新疆大学のフォルクスワーゲンで走るのですが、運転手さんの運転の上手さには本当に感動しました。しかしながら、土の道は永遠に続き、水は全く見えてこない。日没も近くなり不安に思っていたら、突然電気のついた家が見えてきた。男の人がふたり立っていたので、運転手さんが道を聞きに行くと、標準中国語で教えてくれました。この家は、湖の地下にある水を使って農地を開発するための研究施設とのことでした。教えてもらったとおり、はるか遠くにある丘まで走って登りきったのですが・・・やはり見えるのは砂漠ばかり。夕日は地平線に沈もうとしているので、私の不安を察してくれて、湖探索は終わりました。がたがた道を引き返して舗装道路にたどり着いた時には、あたりはもう真っ暗でした。日本語のガイドブック「地球の歩き方」にちゃんと載っている、世界で2番目に低い湖を探したのに見つからなかったなんて信じられます?湖が見つからないんですよ。160kmの湖探しのドライブのあと、トゥールファンの町の広場で食べた羊の串焼きとビールの美味しかったこと!



ウルムチに戻って、市内のウイグル人居住地区の中のウイグル文化の展示館に行きました。ウイグル人の住むウルムチに、近年、漢民族が多く移住していると私は考えていたのですが、どうやら漢民族あるいは混住地の中にウイグル人居住区があり、ウイグル文化を意識して残さなければならない状況になっているようです。学校教育が漢語になってしまい、ウイグル語がなくなってしまうのではないかと、一番身近

な、しかも重大な懸案でした。ウイグル文化の展示館は、もう少し展示を工夫したほうがいいんじゃないかなあと思うようなところでしたが、いくつかの立体地図によって新疆の地理を学ぶことができました。それでびっくりしたのは、漢民族による開発と国境警備です。沙漠には石油採掘機が並び、いくつもの兵団や工場を中心とした町が沙漠の中に点在しています。兵団とは、普段は農業をしているが、緊急時には軍隊となる、国家から給料をもらっている人たちだそうです。また、中国では、天然資源は国家のもので、地元には地方税もはらないそうです。このような地図を、ウイグル文化の展示館で展示する意図は何なのでしょう。別の部屋では、中国茶を飲みながらウイグル族の踊りを見せてくれました。2曲目が始まったら、アブリズさんが全く踊りを見ない、しばらく我慢していたみたいだけど「さあ行きましょう」と席を立ってしまった。「これはウイグルの踊りではない。インドの踊りです。」そもそも、ウイグル文化の展示館で私についてくれた英語のできる案内人は、漢民族の女性でした。こういう仕事こそ、漢民族に比べて圧倒的に就職率が低いウイグル族のためにあるのだと思うのですが。

4日めには、ウルムチの近郊にある森と湖の美しい景色で有名な観光地である「天池」に行きました。水の確保が一番の問題である乾燥地域の新疆に旅行して雨に会うのは「大当たり！」だとは思いますが、ウルムチでは傘が必要な大雨。それが山へ登るにつれて、だんだん雪になり、雪景色の湖を鑑賞することになりました。あまりの寒さに、人民解放軍から下ろされたコートを借りました。こんな天気でもたくさんの観光客がやってきて、南中国からきた人たちは雪合戦をしたりして大はしゃぎしていました。



3日間で一体何キロ、ドライブしたんでしょう。季節も真夏から真冬までありました。それでも、新疆の北のウルムチのまわりの小さな地域しか見ていない、もう一度来て、カシュガルや南の方へ行きなさいと、アブリズさんのご家族やお友達に言われました。新疆は広い！

帰国してから「ウイグルに行ってきたよ」と言うと、「え、何故教えてくれなかったの。私も行きたかったのに」という答えばかり。そのうち「SGRA フォーラム in 新疆大学」を企画しますから、そうしたら是非来てくださいよ！



■ ミニラクーン会 in キエフ

スウェーデンの会議の後、オリガさん（2004狸）を訪ねてウクライナのキエフに行きました。2006年8月11日（金）キエフの空港に着くとオリガさんが迎えに来てくれていました。市内のホテルにチェックイン後、さっそく市内見物。キエフはヨーロッパの都市同様、石畳の古い街並みで、主だったところには徒歩でいけるくらいのこじんまりした美しい町でした。ホテルも外観は古い建物ですが、中は改装されたばかりで、きわめて快適！

まずは、オリガさんが教えている壁が真っ赤なキエフ大学へ。その間にも、黄金の門という遺跡があったり、キエフ・パレーのある国立オペラ劇場があったり（残念ながら夏は講演がありませんが）、噴水のある緑の公園があって、お年寄りがくつろいでいたり、本当に落ち着いたきれいな街です。キエフ大学の前の公園の中にあるレストランでランチ。街の中心の公園の中なのですが、レストランの雰囲気は田舎風。ウクライナの人々がどんなに田舎風を大切にしているかわかります。ボルシチ、ロールキャベツ、クレープとはちみつなど、日本でもお馴染みのものばかり。しかも素材は極めてフレッシュ。ウクライナ風のギョーザも美味！

その後2日間、オリガさんがキエフ市内や郊外の名所を全部案内してくれました。オレンジ革命が記憶に新しい独立広場（まだテントで抗議活動をしている人たちも居ました）、歩行者天国のフレッシュチャーティック通り、骨董美術のお店が並ぶ街（有名な作家の記念館の喫茶店でいただいたハーブティーと手作りジャム）、ドニエプル川のクルーズ、などなど。中でも一番印象的なのは、キエフ洞窟修道院、聖ヴラジーミル教会、聖ミハエル修道院などの、キリスト教（ロシア聖教）の教会です。どの教会でも人々が熱心に祈っており、オリガさんのお話を聞いても、人々の生活が信仰に根ざしているのがよくわかりました。スターリンの時代に、多くの教会が破壊されたそうですが、今ではすっかり復旧していました。

日曜日には、日本人のお友達の車で郊外の公園へ連れていってくれました。といっても田舎を再現したようなところで、麦畑があったり、いろいろな地方の民家があったり、風車があったり。そして、コスモスやひまわりや

ダリアや、ありとあらゆる夏の花々が咲きほこってしていました。キエフの人々は、夏の日曜日にはこのようなところでかけ、田舎の雰囲気を楽しむのだそうです。ナチスの侵攻、ソ連の侵攻、独立革命、オレンジ革命など、ウクライナの歴史は複雑です。オリガさんが和訳して出版したウクライナ短編集の作品にも暗いストーリーの方が多く、ソ連時代のひどい大飢饉の話もありました。快晴の8月の日曜日、ウクライナの人々は、そのような長い暗い冬を忘れ、短い夏の陽射しを満喫していました。

オリガさん、何から何までお世話になりました。ありがとうございました！

（文責：今西淳子）



バシコルトスタン共和国訪問記

今西淳子

ウクライナの首都キエフにオリガさんを訪ねたあと、リシャットさん（2004狸）を訪ねてバシコルトスタン共和国の首都ウファに行きました。リシャットさんの故郷とお仕事をご紹介します。

バシコルトスタンは、ロシアの中のヨーロッパとアジアの境、ウラル山脈南部とその周辺の平地（面積143,600平方キロメートル）にある人口410万人のロシア連邦に属する大統領制の共和国です。7月の平均気温が18度、1月の平均気温がマイナス16度、年平均気温が平野で2.8度。領土の3分の1以上が森林に覆われ、600以上の河川と800以上の湖があります。河川はロシアヨーロッパ部の交通システムの構成要素で、バルト海と黒海・アゾフ海沿岸の諸港へのアクセスを可能にしています。

バシコルトスタン共和国は、石油資源が豊富で、ロシア連邦の主要な採油地の1つです。その他に、天然ガス、石炭、鉄鉱石、金などを産出し、鉱物資源の産地の総数は3千を超えています。共和国の地下には燃料・エネルギー業、石油化学工業、化学工業、農工業、鉄鋼業および非鉄冶金、ガラスとセラミック生産の需要を満たす鉱物原料の十分な埋蔵量があります。

バシコルトスタン共和国では、住民の半分強が都市に住んでいます。主要な民族は、ロシア人（39%）、タタール人（28%）、バシキール人（22%）、チュヴァシ人、マリ人、ウクライナ人、ドイツ人など。ほぼすべての住民がロシア語を話すほか、約30%がタタール語を、約20%がバシキール語を話します。

少しは、イメージが湧きましたか？

リシャットさんは建築家です。慶応大学の大学院に留学してシベリア鉄道沿線の都市開発と建築の歴史を研究中、ウファの再開発計画のコンペに優勝し、突然、大プロジェクトを請け負う建築事務所の社長になりました。だから、私は、是非、リシャットさんのプロジェクトの建設工事現場を訪ねたかったのです。

しかしながら、ウファは遠かった。モスクワ市の北にあるシェレメティエヴォ空港から、モスクワ市の南にあるドモドヴォ空港へ移動。モスクワ市内の交通渋滞は予測不可能だから時間はたっぷりとして。22:30に出発予定の便でしたが、空港に着いて掲示板を見ると「Next information 23:00」。その他には何の掲示もなし。非常に小さな航空会社だったので、小さなカウンターには人が居ません。仕方がないから、インターネットカフェで時間をつぶして（でも日本語が読めました）、ゆっくりロシア料理の食事をして、23:00に掲示板のところへ行くと「Next information 0:30」。仕方がないから、空港案内所で聞くと、モルドバから来る便が遅れていて、到着は午前1時ころ、出発は午前3時ころになるとのこと。さすがにこの頃になると、ごったがえしていた空港も人が少なくなってきましたが、とにかく誰も文句を言わず、誰も怒りません。レストランやお店は（驚いたことに）そんな夜遅くでもやっていますが、広いロビーにソファがあってゆっくり休めるわけではありません。窓際のプラスチックのベンチに座って、多くの人が眠っています。ロシアの人々は本当に我慢強い！！日本に帰ってこの話をすると、ロシアに行ったことのある人は、ほとんど全員が同様の経験を持っていました。となるとロシア人は我慢強いのか諦めの境地なのか・・・飛行時間は3時間でしたが、モスクワと2時間時差のあるウファに着いたのは、朝8時でした。凄く小さな空港で、しかもターミナルが工事中で、金網のゲートから出ると、朝日の中、リシャットさんが迎えに来てくれていて、ほっと一息。本当にくたくたでした



ウファに来たら大自然を見なければいけないから、夕食はバシコルトスタンの建設建築交通大臣のハミットさんが田舎に連れていってくださるとのこと。「寒く

なるからジャケットを忘れないように」。午後4時半に、ウファ郊外で待ち合わせ。大臣の車を待っている間、森を歩きましょうと誘われ、道端からどんどんは歩いていくと（毒蛇などはいないらしい）、ベリーやきのこを見つけました。大きな白樺の幹に抱きつく心をとめることができるとのこと。バシキール式リラクゼーション。大臣の車が着いて、そこからさらにすごいスピードで約100キロ。畑をぬけ、村をぬけ、農場をぬけ、森をぬけ、最後に着いたのは、ひっそりとした池のほとり。そのあたりの地区長の別荘と、狩猟小屋と、サウナがありました。まずは夕食。新鮮な土地の食材をいかしたロシアの田舎料理は口に合います。メインはその池で釣った鱒の燻製。サイドはジャガイモやトマト。自家製の蜂蜜とサワークリームをクレープに包んで。勿論、寒いところの人々は強い白い地酒をどんどん飲みます。スピーチをして、杯を合わせて、乾杯（文字通り）するのはどこでも同じ。リシャットさんが、大臣に「私が日本に留学したからこそ、たくさんの日本人がバシコルトスタン共和国のことを知ったし、今西さんのようにそれまではロシアに興味がなかった人も、こうしてウファまで来てくれるようになりました」と留学の効果を力説しました。

夕食後は、動物保護区に野生動物を見に行こうということになりました。午後9時を過ぎていましたが、まだまだ明るい。鹿や野豚（猪？）など、数種の動物を2歳まで保護しているそうです。野豚は餌付けしていましたが、その他の動物は残念ながら見られませんでした。それから、ぶっといタイヤがついた3輪バイク（？）に交代で乗って、夕日のまぶしい黄金色の麦畑の中を疾走しました。これがバシキール式ストレス解消法かな。保護区を一周して小屋に帰ってくると、あたりは真っ暗。サウナの時間です。石炭をサウナの中で焚く方式は、最近ではロシアでも少なくなってしまうそうです。サウナの中の柵には刈りたての草がたくさん敷いてあり、緑の匂いが充満していました。草の上に寝そべって、木の枝に水をつけて体中をたたいてもらうのが、バシキール式マッサージ。そして、体の芯まで温まったら、池に飛び込む！満天の星空の元、至福の一時でした。

「民族友好パレス」の建設現場を見学しました。リシャットさんは、この地域のランドスケープ・デザイ

ンのコンペで優勝し、その中に含まれている民族友好パレスの施工がさっそく始まっているわけです。工事が急ピッチで進んでいるのは、2007年の秋、ロシア中の共和国の首脳が集まる大会議がここで行われる予定だからです。プーチン大統領も来るのだそうです。



現場について最初にびっくりしたのは、セキュィティの甘さでした。日本の建設現場は、まわりが塙で囲まれ、入り口には数人の警備の人が立っていて、人や車の出入りを管理しています。勿論、リシャットさんと一緒だったので、誰にもとがめられることなくどんどん現場にはいれましたが、もしかしたら誰でも入れてしまうかも・・・既に巨大な建物のコンクリートの床と壁はできていました。友好パレスのエントランスからショッピング街になる部分の屋根の上に行きましたが、とにかく広い。高台の建設現場から川岸までの広大な斜面にあった広葉樹は全て伐採され、一部は針葉樹を、一部は芝生を植えていました。おそらく、ランドスケープの工事は、短い夏の間全部しなければならないでしょう。現場のすぐ横に、労働者用の簡易宿舎がありました。リシャットさんが、「この人たちは、北朝鮮から来ているんですよ」と説明してくれました。

その後、リシャットさんが設計した競馬場の工事現場を見に行きました。こちらはもうほぼ出来上がっていました。リシャットさんの設計事務所では、空港のターミナルも設計中だそうです。これだけのプロジェクトをしているのですから、リシャットさんは、今や「時の人」で、雑誌（？）に特集されていたりしていました。

奥様のさえこさんと生後7ヶ月のけんちゃんと一緒にランチをしました。奥様は東京で編集のお仕事をしていますが、現在産休中なので当地に来ています。なにしろコンペに当たってから全てが想定外になってお

り、今後のことは未定のようでした。ウファに来て、リシャットさんは忙しすぎるから、義理のご両親と一緒にサナトリウム（保養地）に行ってきたそうです。山やステップ地方の澄んだ空気と、多様な効能成分と特質を有する鉱泉や治療用泥土はバシコルトスタンをロシアでも指折りの保養地に行っているそうです。「けんちゃんは、何語で育てるんですか」と聞くと、お二人とも迷わず、お母さんは「日本語」、お父さんは「バシキール語」。その時になって、はじめて、バシコルトスタン共和国では、標識などはロシア語とバシキール語のふたつの言語で併記されていることを知りました。どちらも英語のアルファベットではないので、私には区別さえつかないわけです。けんちゃんは、日本語とバシキール語とロシア語と多分英語の最低4ヶ国語はマスターしなければならないということでしょう。リシャットさんの中に、不思議にもバランスよく共存している、バシキール人とロシア人のアイデンティティーは、けんちゃんにはどう伝わっていくのでしょうか。



午後7時を過ぎてからウファの町を観光しました。とても高い塔のあるモスクに行きました。バシコルトスタンは、イスラーム教の国で、モスクがいくつかありますが、毎日のお祈りに集まるという習慣があるのはごく一部の（お年よりの？）人たちだけのようです。昨夜、一緒に田舎に行った旅行会社社長のグリニサさんが、乾杯しながら「私たちはモスリムですけど、何でも食べるし、お酒も飲むの」と、ちょっと恥ずかしそうに教えてくれました。スカーフをかぶっている女性も殆ど見かけません。宗教の戒律が非常にゆるやかに守られているわけです。最後に、川をわたって、反対側からウファの町を眺めました。ウファは3方を川に囲まれた高台の上にある町で、その北側の3分の1くらいは、巨大な石油関係の工場関連施設であることが

一望できました。ウィキペディア（インターネット上の百科事典）によると、バシコルトスタン共和国の経済はもっぱら石油工業に依存しており、産業の大部分は私有化され、大統領の親族に支配されているということです。今後、ウクライナをはじめ旧ソ連から分かれたいくつかの国々が経験した民主革命のようなことが起こりうるのでしょうか。

バシキール語で「ありがとう」は「ラフマツト」と言うと聞いた時、思わず「ウィグルと同じじゃない」と叫んでしまいました。今年の5月に、中国新疆ウィグル自治区のウルムチに、S G R A会員のアブリズさんを訪ねて行った時、恥ずかしながら唯一覚えたウィグル語だったのです。両者ともトルコからの影響を受けているわけですが、私から見ると、リシャットさんとアブリズさんは対照的です。今まで、むしろ大国の中で主流の民族と文化に抵抗している少数民族の方々に接することの方が多かったので、リシャットさんの中にバシキール人としての誇りと、ロシア人としての誇りが同時に存在していることや、バシコルトスタン共和国がロシア連邦と上手く関係を保っていることの方が、むしろ変わっているののように感じられます。同じロシアでも、チェチェン共和国のように、ロシア連邦からの独立派が弾圧され、さらにテロリストが入り込んで、めちゃくちゃになってしまっているところもあるのです。中央アジアの政治的、宗教的、民族的な複雑さを垣間見た気がしました。



もし可能であれば、リシャットさんの「民族友好パレス」が完成したら、またウファに行ってみたく思います。でも、今度はモスクワ経由ではなく、ウズベキスタンのタシケント経由で行こうかと思っています。勿論そうしたところで、空港で8時間つぶさなくてもいいという保証はありませんが。

■ 第6回韓国ラクーン会 (K S R) in ソウル

2006年10月14日夕方7時、ソウルの繁華街ミョンドン(明洞)にある韓国風のしゃぶしゃぶのお店シンジョン(新亭)で第6回韓国ラクーン会(K S R)が開かれました。日々新しいお店がオープンする街で、珍しく40年の歴史をもつ古いお店(改装されていますが)でした。

長くは9連休にもなったチュソツ(秋夕;旧暦のお盆のようなもの)の連休明けで、また、北朝鮮の核実験で大騒ぎ(韓国ではそれほどではなかったのですが)の中でのラクーン会となりました。渥美財団常任理事の今西淳子さん、金雄熙さん(96狸)李来賛さん(K S R会長、96狸)と奥様とお嬢様、洪京珍さん(99狸)高熙卓さん(00狸)鄭在皓さん(00狸)蔡相憲さん(03狸)金賢旭さん(K R S幹事、03狸)韓京子(05狸)の11名が集まりました。



会では、K S Rへの参加率を高めるため、「会費の負担を少なくする」「一泊ぐらいでソウル近郊に旅行しメンバーの結束力を高める」などの意見が出ました。一泊旅行の案については、1、2回のお食事会ではお互い何を研究し、今どうしているかなどなかなか覚えられないし、家族ぐるみの交流にしよう、参加者のみなさんも肯定的でした。人見知りをする後輩にとっては、大先輩方とお話できるいい機会になると思います。また、忘れられていた(?)既存のインターネット上のコミュニティ(cafe)を活性化させようという話もありました。

余談ですが、あひる料理(北京ダックもどき)つながりで、マンセタン(万歳湯)という蛙料理の話ができました。蛙スープのことで、蛙が熱湯の中で万歳しながら息を引

き取る姿が料理名の由来だそうです。蛙さんが往生したとはとても思えないのですが、死に際に万歳を叫べるって、ちょっとかっこよく思えたりもしました。

思い残すことなく人生エンジョイしようと思った韓国ラクーン会でした。

(文責:韓京子 2005 ラクーン)



■ ラクーン会 at SGRA フォーラム in 北京

2006年10月21日、北京大学日本語文学科設立60周年記念「2006北京大学日本学国際シンポジウム」特別企画として、パネルディスカッション「若者の未来と日本語」が開催され、李鋼哲(99狸)、徐向東(00狸)、胡潔(98狸)、陸躍鋒(03狸)、孫建軍(02狸)、朴貞姫(03狸)、嶋津忠廣、今西淳子が参加しました。懇親会には金熙卓さん(95狸)の奥様とお嬢さんも参加してくださいました。



■ 彩の森の植樹祭に参加

栃木県で出会った自然と MORIMORI ネットワーク

3人のラクーンは、渥美財団の今西淳子代表とともに10月28日に栃木県で開催されたMORIMORIネットワークの山縣睦子氏企画「彩の森の植樹祭」に参加し、自然との触れ合いの機会を得た。矢坂ICから車で30分の場所に位置する、この企画が実施された山縣氏の農場は、入り口正面に2階建ての洋館（山縣有朋記念館）があり、すばらしい眺めを楽しむことができる。また、その洋館では山縣有朋の遺品、像、貴重なセラミックのコレクションが展示されている。しかし、山縣農場の素晴らしいところは農場の散策にある。

私たちは、10時半に行われる植樹のイベントの時間を逃してしまった。今西さん、于曉飛さん(2002年ラクーン)、ブレンダ・テネグラ(2005年ラクーン)は午前8時に東京の飯田橋駅を出発したが、道中で1時間ほど交通渋滞に遭遇し、偶然にも李済宇さん(2004年ラクーン)一家も同じ状況にあった。しかし、悪いことばかりではなく、この日は素晴らしい天気にも恵まれた。農場に到着後、私たちはラカ(今西さんの犬)とともに松並木の散策を楽しみ、新鮮な空気を体に吸い込んだ。ラカは、グレートデーンの大きな体、愛らしい表情でいつものようにイベント参加者の注目を集めた。ラカはすぐに全員の「愛犬」となった。



イベントのハイライトの1つは、日本における優れたチェーンソー芸術家のひとりである城所啓二(きどころ・氏)によるチェーンソー芸術の実演であった。城所氏は、その高い技能と素早い動きを見せ、見物者を驚かせた。彼は、その日のうちに200ポンドぐらいの重さのある杉

の丸太から三点の彫刻を作り上げた！

昼食は、MORIMORI Network メンバーにご準備いただき、地元で栽培された野菜や果物を味わった。ここではローストビーフを含めさまざまな料理と飲み物が出され、豪華な食事を楽しんだ。食事をしながら交流会が始まり、参加者一人ひとりが自己紹介をし、昼食はにぎやかで素晴らしい時間となった。

東京への帰路は、交通渋滞に巻き込まれることもなくスムーズだった！途中で今西さんに代わって于曉飛さんが運転し、私たちは道中を楽しみながら東京にたどり着くことができた。なんと心安らく日！

(文責：ブレンダ・テネグラ 2005年ラクーン)



■ ミニラクーン会 in 那覇

2006年の奨学生胡秀英さんは沖縄県立看護大学で開催される日本民族衛生学会に出席し報告のため、先日沖縄を訪れました。2回目の沖縄の訪問でした。11月10日に学会会場周辺のレストランで昼食会を行いました。互いに初めてお会いするのですが、古い友人のようによくお話ししました。日本での留学生活や日中関係悪化による影響、百年前の中国人留学生の日本観と今日のそれとの違いなどについて率直に語り合いました。二人だけではもったいないほど興味深い内容で、もっと多くの人と共有できたらと感じました。また、3時間の交流でしたがあっという間に過ぎ、有意義な時間を過ごすことが出来ました。

(文責：林泉忠@沖縄 2000年ラクーン)



■ ミニ・ラクーン会 in 東京

12月3日夜、国際交流基金の研修で来日中のシルバーナ・デマイオさん(1997狸)とマリア・エレナ・ティシさん(2003狸)のイタリア人たちと今西常務理事が、理事長の家に招かれ、ミニラクーン会を開催されました。シルバーナさんは、現在、ナポリ東洋大学で日本語を教えており、マリア・エレナさんは、白百合女子大学宮澤賢治についての博士論文を終えるところです。話題は、イタリアの学生たちにどう日本語を教えるか、日本語を学んだイタリア人の学生たちがどうすれば仕事が見つけられるか、東京にイタリア文化会館の赤い色は本当に問題か、などでした。(文責：今西)

■ ミニラクーン会 in 北京

去る12月10日、第5回中国社会言語学会に出席していた包聯群さん(2005年度ラクーン)を歓迎するため、真冬の北京でミニラクーン会を開催しました。ホストは北京在住の朴貞姫さん(2003年度ラクーン)と私でした。この学会は、13カ国からの総勢200名以上の参加者のうち、日本からたった一名の代表として、包さんは今大会の国際色を豊かにするのに大きく貢献したようです。同大会に私も参加しましたが、二人は初対面ながら、シンポをよそに、おしゃべりに花を咲かせました。大会参加者リストに「朴貞姫」という名前があったため、海外の学会にラクーンが3名も参加するのは珍しいと喜んでいたところ、同姓同名の別人でした。包さんの宿泊先は開催校の北京大学ではなく、他の参加者と一緒にバスで移動しなければならなかったため、ミニラクーン会は大会の打ち上げパーティに便乗しました。

(文責：孫建軍 2002年ラクーン)



ありがとうございました！

孫さん、朴さんとお会いできて、とても嬉しかったです。二人ともわざわざお時間を作ってください、どうも有難うございました。いろいろ面白いお話を聞かせていただきました。間まもなく卒業する私にとって、中国の大学の情報を多く教えてください、とてもありがたく思っています。初日の開幕式の休憩中に、孫さんとお互いに探しあいました。孫さんはマイクでアナウンスして私を探したそうですが、私は名札で孫さんを探していました。はじめて会ったのに、まったくそのように感じられず、「渥美奨学生」という目に見えない糸が私たちを強く繋げていると感じました。

今回の『中国社会言語学学会 / 国際会議、および全国社会言語学学会』は、発表者だけでも 225 名におよび、中国全土から参加者が集まった大規模な会議でした。多くの国際学会で発表してきた私ですが、今回は、中国に行く前に大変緊張しました。というのも、日本からの参加者は、私が一人だけだったのです。日本を代表する責任を感じて、パワーポイントの発表ですが、レジュメも周到に用意しました。しかし、私が所属した少数民族言語と文化のグループでは、台湾からの参加者の一人がレジュメを用意した以外、配布資料はありませんでした。別のグループにも参加してみましたが同様でした。日本で行なわれる中国語学会、および社会言語学学会では、論文集を事前に用意している場合を除き、レジュメを配るのがあたりまえになっています。中国の学会では少し違うようです。

ちょうど同じ時に、北京大学でモンゴル国の詩人ナズクドルジを記念する国際会議も開催していましたが、10日の午前中だけ顔をだして、午後は、本会議に戻ってきました。さまざまな会議が同時にたくさん開催されるのが北京大学の特徴とも言えるでしょう。

出版するが、論文を投稿しないか」と誘われ、とてもよい機会だと思いました。

(文責：包 聯群 2005 年ラクーン)

■ ミニラクーン会 in 北京

1月6日(土)北京滞在中のマキト(1995狸)は、今西代表の強い推奨で、北京の大学で教えているSGRA会員の孫建軍さん(2002狸)と朴貞姫さん(2003狸)と会うことになった。東京の渥美財団新年会とほぼ同時進行で、ラクーン会新年会を北京で行った。孫さんがわざわざEADNセミナーの会場まできてくださり、翌日、朴さんと3人で一緒に時間を過ごした。二人とも、日本語に対する高需要に圧倒されて忙しいけれども、よく日本のことを考えている。朴さんはとても日本を懐かしがっているし、孫さんは北京大学で修士か博士のレベルで勉強したい日本人を探している。最後に、孫さんの話題のご自宅も訪問でき、記念写真を撮ってもらった。北京観光の準備をする余裕がなかった僕は、案内していただけることになって助かった気がした。二人とも突然の訪問の僕を暖かく向かえてくれた。冬なのになぜか北京のSUMMER PALACEを訪問した。中国なのになぜかSTARBUCKSで休憩した。北京なのになぜか北

京ダックの入っていない中華料理の夕食を食べた。振り返ってみれば、不思議なコースを僕が選んでしまったと後悔している。(文責：F. マキト 1995ラクーン)



■ ラクーン会 in 富山

2007年2月11日(日)午後6時より、富山市にある「玉味」という小さな割烹料理店で、北陸地方で初めてのラクーン会が開催されました。出席者は、奇しくも同期、1999年ラクーンの周海燕さんと李鋼哲さんご夫妻、今西常務理事と富山大学(旧高岡短期大学)で漆工芸を専攻する今西明日香の5名でした。明日香の卒業



制作展を見るために富山に来たので、蟹と日本酒でラクーン会を開きましょうということになり、富山の病院でインターンをしていた周さんが、ご主人の懇意のお店をアレンジしてくださいました。(ありがとう！)

周さんは、中国の伝統医学（漢方）を西洋医学の現場で応用したいという強い意志を着々と実現しています。医科歯科大学で博士号を取得後、東海大学医学部へ学士入学して卒業し、日本国の医師免許国家試験をパスして富山で研修をしているところで、4月からはいよいよ金沢大学付属病院で内科医として勤務が始まります。

李鋼哲さんは、昨年10月から金沢にある北陸大学の法文学部に教授として赴任しました。ここは、中国の大学とツイニングプログラムを始めた先駆的な学部で、800人の学生のうち600人が中国人留学生ということです。中国人留学生は、2年間母校で日本語を勉強した後、2年間北陸大学で法律を勉強し、4年で両方の大学の学位をとることができます。大学の生き残りをかけて学生数の確保をしている私立大学が、優秀な留学生を呼ぶために有効な方法として、アジアやオセアニアの大学で採用されている方法です。李さんのお話によると、確かに中国のかなり優秀な大学から生徒が来ているようで、日本語のレベルは問題にならないようです。問題は、授業の中身のようで、日本人学生は中国の法律、社会について何も知らない。中国人留学生には、三権分立のようなごく基本のところから教えなければいけない。かといって、中国人と日本人の学生を別々に教育したら、彼らが留学している意味、日本が留学生を受け入れている意味がなくなってしまう。どのような授業をすれば、日本人学生も中国人留学生も満足できるのかが課題である、ということでした。たとえ学生数の確保に成功しても、グローバルな大競争の中の大学改革はまだまだ続くようです。

(文責：今西淳子)

第6回日韓アジア未来フォーラム in 葉山

「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」

ここ数年広がりを見せている東アジアにおける「韓流」はこれまでの東アジア国際関係に見られない画期的なできごとである。また、この地域において日本の大衆文化が若者の高い関心を集めたのは決して最近のことではない。このような韓流・日流を媒介とした密度の高い人的・文化的な交流の進展はもはや東アジア地域に共通する現象ともいえよう。今回のフォーラムでは政治的あるいは軍事的な「ハードパワー」においては様々な問題をかかえる東アジア地域にとって、急成長する「ソフトパワー」はどのような意味と意義があるのか考えてみたい。具体的に東アジアの視座からソフトパワーとしての韓流・日流の展開にともなう様々な現象、それがもたらす政治的、経済的、社会的インパクトなどについて考えてみるフォーラムであった。

プログラム

総合司会：金 雄熙（仁荷大学副教授、S G R A 研究員）

【開会の辞】今西淳子（S G R A 代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

【挨拶】李 鎮奎（未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授）

【発表1】金 範洙 キン・ボンズ（東京学芸大学講師、S G R A 研究員）

「近代における韓国人の日本留学と人的ネットワークの形成」

【発表2】趙 寛子 チョウ・クァンジャ（中部大学人文学部助教授）

「北朝鮮の戦時体制と韓国の歴史認識 / 論争」

【発表3】玄 大松 ヒョン・デソン（東京大学東洋文化研究所助教授）

「独島 / 竹島と反日」

【発表4】小針 進 こはり・すすむ（静岡県立大学国際関係学部助教授）

「韓流と日韓関係」

【フリーディスカッション】

進行：南 基正（国民大学助教授、S G R A 研究員）

○フォーラム参加者

全員（未来財団日本研究チーム、S G R A 研究員、ゲスト等）約25名

■ 概要報告

秋の3連休、その最終日の11月5日、海のきれいな葉山で「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」をテーマに、第6回日韓アジア未来フォーラムが開催された。

日韓をひんぱんに往来しながら活躍する若手の研究者に、近代における韓国人の日本留学と人的ネットワークの形成、韓国における歴史認識 / 論争、「独島 / 竹島」と反日、韓流と日韓関係についての最近の研究成果を発表してもらい、その後、自由に意見交換を行うフォーラムであった。複雑な日韓関係における敏感なテーマだけに、今回のフォーラムは非公開で行われた。

韓国未来人力研究院の李鎮奎（イ・ジンギョ）院長と今西淳子 S G R A 代表による開会の挨拶に続き、4人の研究者による研究報告が行われた。まず S G R A 研究員の金範洙（キン・ボンズ）氏の研究発表は、朝鮮留学生運動の再評価の必要性や、これまで研究課題として残されていた朝鮮留学生の実体を解明し、また日本留学を媒介とする人的

ネットワークの形成と朝鮮民族運動への関わりをより具体的に明らかにするものであった。中部大学の趙寛子（チョウ・クァンジャ）氏は、最近の韓国における歴史認識をめぐる党派的「思想戦」の淵源を体系的かつ歴史的に説明した。東京大学の玄大松（ヒョン・デソン）氏は、日韓両国において独島／竹島がいかに語られるのかについてつぶさに考察し、日韓の市民社会とマス・メディアが構築した「公共圏」、「言説空間」にみられる偏りを調整する必要性を力説した。最後の発表者として静岡県立大学の小針進氏は、韓流を日韓関係の文脈から捉え、韓流の経済効果ばかり強調したり国威発揚として強調したりすべきではないと指摘した。

2時間に及ぶ発表（お勉強の時間）が終わり、休憩を挟んで、韓国国民大学の南基正（ナム・キジョン）氏の進行でフリーディスカッションが行われた。熱のこもった討論ではあったが、案外研究報告や発言などをめぐる「攻撃的な」（aggressive）コメントや感想は寄せられなかった。日韓においては、対立や葛藤が浮沈するなかでも、草の根のレベルでの価値や認識の共有が着実に深まってきていることが確認できたフォーラムでもあった。

今回のフォーラムのタイトルに「親日・反日」の文字を入れたのは、日本と関わる多くの中国人、韓国人のためにも、この「図式」に正面から取り組むことこそ大事なことだという主催者側の意図があったからである。勿論、向かうべき方向性は「多様化」であると思われるが、日韓関係の専門家ではない大多数の人々にとって、「多様化」だけをだしてもインパクトが足りないように思ったからである。「同時に、この『図式』を一般の日本人も理解すべきです。日米関係では『親日』という言葉が文字通りに使われており、私も留学交流の仕事をする前には、日中・日韓関係におけるこの言葉の意味を知らませんでした」と今西氏。

フォーラム終了後の懇親会では、すばらしい葉山の海産物やおいしいお酒を思う存分楽しむことができた。案の定、優雅な懇親会はまもなく「狂乱」の飲み会に変わってしまった。消費したアルコールの量に驚いたが、消費量を見込んで十分に用意した主催側の「配慮」には感動を覚えた。その晩の一气飲み、ラブ・シャット、次の日の二日酔いは当分の間忘れられないであろう。



酔いつぶれる前にどこかで次のような提案と合意がなされたような気がする。「次回の日韓アジア未来フォーラムは延期でしませんか」「いいですよ」

文責：金雄熙（仁荷大学副教授、S G R A 研究員）



SGRAフォーラム in 北京

パネルディスカッション「若者の未来と日本語」

北京大学日本語文学科設立 60 周年記念
「2006 北京大学日本学研究国際シンポジウム」特別企画

日 時：2006 年 10 月 21 日（土）午後 2 時～5 時 30 分

会 場：北京大学生命科学学院報告庁

プログラム

総合司会：孫建軍（北京大学日本語文化学部助教授、SGRA 研究員）

【パネルディスカッション】

進行：朴貞姫（北京語言大学 助教授、SGRA 研究員）

■ 池崎美代子（JRP 専務理事、SGRA 会員）

「ビジネス日本語とは」

■ 武田春仁（富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理）

「グローバル企業が求める人材」

■ 張潤北（三井化学北京事務所所長代理）

「日本文化と通訳の仕事」

■ 徐向東（キャストコンサルティング代表取締役、SGRA 研究チーフ）

「『日本語』の壁を超える」

■ 概要報告

去る 2006 年 10 月 21 日（土）、北京大学生命科学学院報告庁にて、SGRA 主催の「北京大学日本語文学科設立 60 周年記念シンポジウム特別企画—SGRA in 北京フォーラム『若者の未来と日本語』」が盛大な雰囲気の中で開催されました。

初めての北京フォーラムでしたが、参加者は予想外に 100 名を越え、会場を熱気で包んでくれました。テーマが『若者の未来と日本語』だけあって、参加者のほとんどは、北京大学、北京語言大学、北京外国語大学など、北京市内の大学から来た学生でしたが、中でも北京語言大学の学部生がもっとも多かったのです。これは、たぶん本フォーラムが実用日本語を中心に翻訳通訳者の養成に力を入れている北京語言大学の学生のニーズに合ったからではないかと思われます。

フォーラムは、企画どおりだと、午後 2 時から 5 時まででしたが、4 人のパネリストの熱気に溢れる講演に、フロアの参加者からの質疑応答などの真摯なディスカッションが絶え間なく続き、時の経つのも忘れてしまい、5 時 50 分になってやっと惜しい気持ちで閉会を告げました。

総合司会の孫建軍先生（北京大学日本語文化学部助教授、SGRA 研究員）の開会のお言葉がよいスタートとなり、引き続き、開会の挨拶として、今西淳子代表（SGRA 代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）から、いつもとは違う素晴らしいデザインのパワーポイントで SGRA を紹介して、参加者の人気を集めました。その好調子に乗って、パネリストが登壇し、自己紹介に兼ねて、パネルディスカッションのための主題講演が行われました。講演は、

池崎美代子先生（JRP専務理事、SGRA会員）の「ビジネス日本語とは」から始まり、続いて武田仁先生（(中国)富士通有限公司副董事長（兼）総経理）の「グローバル企業が求める人材」、張潤北先生（三井化学北京事務所所長代理）の「日本文化と通訳の仕事」、徐向東先生（キャストコンサルティング代表取締役、SGRA研究チーフ）の「『日本語』の壁を超える」といった順で行われました。最後にSGRA運営委員長の嶋津忠廣氏がフォーラムをまとめ、閉会の辞を述べました。

パネリストの主題講演には、それぞれ特徴があって、主題講演もそれに対するコメントも大会に異彩を放ってくれました。というのも、フォーラムのテーマ自体が「若者の未来」と「日本語」という二つの意味を含んでおり、パネリストの主張も主に「ビジネスマナー」として「美しい日本語」と「ビジネスセンス」として『日本語』の壁を越えた「中身のある言葉」の二つが議論のテーマになっていました。池崎先生と張先生の講演では、「美しい日本語」、「文化としての日本語」とつながるものが多く視われ、武田先生と徐先生の講演では、「若者の未来」を提示した「企業が求める人材」についての内容が多く視われたのです。

池崎先生は「ビジネス日本語」の定義として「美しい日本語」を主張し、「ビジネスセンス」と「日本語能力」を外国人高度専門人材像の備えるべき基本条件としてあげました。一方、武田先生は「企業の求める人材」像について「人格（職員の魂）、センス（マナー）、能力（目標評価）、個性（自分だけのもの）」といった総合的立場から概括し、それに続いて徐先生が「ビジネスキャリア、知識（母語のレベルも含めて）、クリエイティブ（チャレンジ精神）」を「企業の求める人材」像の条件として付け加えました。張先生は、文化的要素の重要性について生き生きとした翻訳の例を挙げて興味深く説明し、また、コミュニケーションにおける「文化」的要素を「企業の求める人材」の条件の一つとして強調しました。

閉会后、参加者に「どうでしたか」と聞いたら、「とても勉強になりました」「励まされました」「日本語の勉強の目標を見つけました」「日系企業や日本社会の求める人材像が分かりました」などなど、評判の声が多かったです。残念なのは、参加者の中に北京大と北京語言大以外の学生が極少なかったことです。もっと多くの大学に声かけて、日本語を無難に駆使できる大学高年生や大学院生に来てもらえたらもっとよかったのに……。

本フォーラムは、急増している中国での日本語学習者のニーズに合わせて、日本語学習者を対象に、日本語教育の現状や日系企業を含む社会のニーズや先輩の経験談を紹介し、日本語を学ぶことによって広がる未来へのビジョンを提供することで、若者の期待に応えるためにはどのような教育が必要とされているか提案することを目標として開催しましたが、予想通りの成果を上げたことと思われます。なお、今回のようなSGRAフォーラムを世界中に広げていくことは、われわれのこれからの仕事ではないかとも思います。

文責：朴貞姫（北京語言大学助教授、SGRA研究員）





活動報告（2006年6月～2007年5月）

☆新企画：メルマガ【SGRAかわらばん】の電子メール送信開始～SGRA ホームページより無料購読自動登録受付中～

☆年4回のSGRAフォーラムを開催

■ 2006年7月22日 第24回SGRAフォーラム in 軽井沢「ごみ処理と国境を越える資源循環—私が分別したゴミはどこへ行くの?—」

(於：鹿島建設軽井沢研修センター)

総合司会：全 振煥（鹿島建設(株)技術研究所主任研究員、SGRA 研究員）

【講演1】「廃棄資源の国際間移動の現状と課題：アジアを中心として」

鈴木進一（(株)エックス都市研究所取締役）

【講演2】「EUの再生資源とリサイクル：ドイツを中心として」

間宮 尚（鹿島建設(株)技術研究所上席研究員）

【講演3】「アジアにおける家電リサイクル活動に関する調査報告」

李 海峰（北九州市立大学、SGRA 研究員）

【講演4】「廃棄物問題と都市の貧困：マニラ貧困層のコミュニティ資源の活用」

中西 徹（東京大学総合文化研究科教授）

【パネルディスカッション】

進行：高 偉俊（北九州市立大学助教授、SGRA 研究チーム）

パネラー：上記講演者4名のほか、外岡 豊（埼玉大学経済学部社会環境設計学科教授）

→ SGRA レポート No.35

■ 2006年9月23日 第25回SGRAフォーラム「ITは教育を強化できるのか」

(於：東京国際フォーラム)

総合司会：ナポレオン（(株)ヤマタケ研究所研究員、SGRA 研究員）

【基調講演】「途上国へのE-learning 技術支援とオープンソースソフトウェア教育強化～南太平洋大学における

JICAプロジェクト活動を中心に～」

高橋 富士信（横浜国立大学工学部教授）

【研究発表1】「伝え合うことで学ぶ「交流学习」と支援のあり方」

藤谷 哲（目白大学経営学部経営学科専任講師）

【研究発表2】「Mobile-Learning が教育を変える?!」

楊 接期（台湾国立中央大学情報工学部助教授）

【パネルディスカッション】

進行：江蘇蘇（(株)東芝セミコンダクター社・SGRA 研究員）

パネラー：上記講演者3名

→ SGRA レポート No.36

■ 2007年2月17日 第26回SGRAフォーラム「東アジアにおける日本思想史～ 私たちの出会いと将来～」

(於：東京国際フォーラム)

総合司会：藍 弘岳（東京大学総合文化研究科博士課程、SGRA 研究員）

【基調講演】「日本思想史の「空白」を越えて」

黒住 真（東京大学大学院総合文化研究科教授）

【発表 1】「東アジアにおける絡み合う思想史とその発見」

韓 東育（東北師範大学歴史文化学院院長）

【発表 2】「ものごのあわれ」を通じてみた「朝鮮」

趙 寛子（中部大学人文学部助教授）

【発表 3】「越境の意味：私と日本思想史との出会いを手がかりに」

林 少陽（東京大学教養学部特任助教授）

【パネルディスカッション】

進行：孫 軍悦（東京大学大学院総合文化研究科博士課程、SGRA 研究員）

パネリスト：上記講演者 4 名

→ SGRA レポート No.39(予定)

■ 2007 年 5 月 27 日 第 27 回 SGRA フォーラム in 秋葉原「アジアの外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」

（於：秋葉原 U D X 南 6 階カンファレンス）

総合司会：全 振煥（鹿島建設技術研究所研究員、SGRA 運営委員）

開会挨拶：木村建一（国際人間環境研究所代表、SGRA 顧問）

【基調講演】「外来生物とどう付き合うか～ アジアの淡水魚を中心に～」

多紀 保彦（自然環境研究センター理事長、長尾自然環境財団理事長、東京水産大学名誉教授）

【発表 1】「外来生物問題への取り組み～いま日本の水辺で起きていること～」

加納 光樹（自然環境研究センター研究員）

【発表 2】「インドシナの外来種問題～魚類を中心として、フィールドからの報告～」

プラチヤー・ムシカシントン（カセサート大学水産学部講師、SGRA 研究員）

【パネルディスカッション】

進行：今西淳子（SGRA 代表）

パネリスト：上記講演者 3 名

→ SGRA レポート No.40（予定）

第 24 回



第 25 回



第 26 回



第 27 回



■ 渥美奨学生2006年度著作・発表論文・特許リスト

■ Abuduxukuer Mijiti アブドシュケル・メジテ（東京医科大学<外科学>：2007年度奨学生）

論文：

1. Abuduxukuer Mijiti, Naoto Matsuno, Tohiro Iwahori, Hironori Takeuchi, Takeshi Nagao, Kitaro Oka, Toshihiko Hirano "Increased Sensitivities of Peripheral Blood Mononuclear cells to Immunosuppressive Drugs in Cirrhosis Patients Awaiting Liver Transplantation" *Cell Transplantation*.2006;15(10):885-891 インパクト・ファクター 3.6
2. Naoto Matsuno, Isamu Konno, Abudushukur Mejit, Kouichiro Hama, Yoshimaro Johjima, Yuki Nakamura, Isao Akashi, Satoshi Iwamoto, Tohru Iwahori, Takeshi Nagao "Application of machine perfusion preservation as a viability test for marginal kidney graft" *Transplantation*. 2006;82:1425-1428 インパクト・ファクター 3.8
3. 阿不都許庫尔 米吉提、岩堀徹、松野直徒、長尾桓「バイオ人工肝臓への応用を目指した各種肝細胞株3次元培養による細胞生物学的検討」*東京医科大学雑誌* 64(6):565-572.2006
4. 阿不都許庫尔 米吉提、松野直徒、岩堀徹、平野俊彦、岡 希太郎、長尾桓「肝移植におけるリンパ球感受性に基づくテラレーメド医療への挑戦－Tacrolimus感受性と臨床成績－」*Organ Biology*.2006;13(3):364
5. Abuduxukuer Mijiti, Naoto Matsuno, Tohiro Iwahori, Hironori Takeuchi, Takeshi Nagao, Kitaro Oka, Toshihiko Hirano "Tacrolimus Sensitivity of PBMCs and its Influence on Clinical Outcome of Liver Transplantation" *HEPATOLOGY International*.2007;1(1):p-0835

■ Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル ニヤメチェ（東京医科大学・博士<薬理学>：国立精神・神経センター研究員：2004年度奨学生）

Publications：

1. Ampong, B., Imamura, M., Matsumiya, T., Yoshida, M., and Takeda, S. (2005) Intracellular localization of dysferlin and its association with the dihydropyridine receptor. *Acta Myologica* XXIV (2): 134-144.
2. Ampong, B., Honda, H., and Kogo, H. (2002) Effect of hypothyroidism on beta-adrenoceptor-mediated relaxation in the rat thoracic aortae: a time dependent study. *Vascular Pharmacology* 38 (3): 149-155.

Conferences：

3. Nishiyama, A., Ampong, B. N., Kinoshita, K., Nakai, H., and Takeda, S. (2006) Efficacy of adeno-associated virus serotype 8 in gene delivery into skeletal muscle of alpha sarcoglycan deficient mice. Poster: The 14th Annual Congress of the European Society of Gene Therapy, November 9-12, Athens, Greece.
4. Nishiyama, A., Ampong, B. N., Yuasa, K., Nakai, H., and Takeda, S. (2006) Efficacy of adeno-associated virus serotype 8 in gene therapy of alpha sarcoglycan deficient mouse skeletal muscle. Oral presentation: The 12th annual meeting of the Japan Society of Gene Therapy, August 24-26, Tokyo, Japan.
5. Ampong, B. N., Ikemoto, M., Fukada, S., Uezumi, A., Masuda, S., Miyoshi, H., Yamamoto, H., Suzuki, Y. M., and Takeda, S. (2006) Transplantation of SM/C-2.6+ satellite cells transduced with micro-dystrophin CS1 cDNA by lentiviral vector into mdx mice. Oral presentation: The 9th annual meeting of the American Society of Gene Therapy, May 31-June 2, Baltimore, USA.
6. Yoshida, M., Ampong, B. N., and Takeda, S. (2004) Dysferlin interacts with the dihydropyridine receptor. Poster: The 9th International Congress of the World Muscle Society, September 1-4, Goteborg, Sweden.
7. Ampong, B., Honda, H., and Kogo, H. (2001) Hypothyroidism increases isoprenaline-induced vascular relaxation. Poster: The 121th Annual Meeting of The Japanese Pharmaceutical Society, March 22-24, Sapporo, Japan.

■ De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ（東京工業大学・博士<日本研究>：ナポリ国立大学「オリエンターレ」専任講師（在ナポリ）

1. S.De Maio, C. Negri, J. Oue, (a cura di), *Corso di lingua giapponese*, Volume I, Hoepli, Milano, 2007

■ Gao Weijun 高 偉俊（早稲田大学・博士<建設工学>：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科教授／西安交通大学兼職教授／：1995年度奨学生）

1. An analysis of the DER adoption climate in Japan using optimization results for prototype buildings with U.S. comparisons, Nan Zhou, Chris Marnay, Ryan Firestone, Weijun Gao, Masaru Nishida, *Energy and Buildings* 38 (2006), May-06
2. 建設廃棄物の再資源化のプロセスとエネルギー消費量の算定に関する研究, 小川由美子, 高 偉 俊, 日本建築学会環境系論

文集,第604号,93-100,2006/06

3. The Effects of Fuel Price and System Efficiency on Cost and Energy Savings in a Distributed Energy System, Yongwen Yang, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Ji Xuan, Chris Marnay, Nan Zhou, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol.5No 2,,2006/11
4. Evaluation of Introduction of Combined Heat and Power System in Commercial Building of Shanghai, Ji Xuan, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Xindong Wei, Ryan Firestone, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol.5No2,,2006/11
5. Prediction of Residential Building Energy Consumption in Jilin Province, China, Xindong Wei, Ji Xuan, Jun Yin, Weijun Gao, Bill Batty, Journal of Asian Architecture and Building Engineering, Vol. 5No. 2,,2006/11
6. OPTIMAL COMBINATION OF DISTRIBUTED ENERGY SYSTEM IN AN ECO-CAMPUS OF JAPAN, THE SECOND INTERNATIONAL GREEN ENERGY CONFERENCE Oshawa, Ontario, Canada, June 25-29, 2006, 502-511, Yingjun Ruan, Weijun Gao, T. Watanabe, H. Takaguchi, 2006/6
7. Study on the Relation of Energy Use and Environmental Quality in Xi'an City, THE SECOND INTERNATIONAL GREEN ENERGY CONFERENCE Oshawa, Ontario, Canada, June 25-29, 2006, 1252-1264, Ji Xuan, Weijun Gao, 2006/6
8. A Proposal of Ecological Wooden Houses in Japan, THE SECOND INTERNATIONAL GREEN ENERGY CONFERENCE Oshawa, Ontario, Canada, June 25-29, 2006, 1265-1276, Yongwen Yang, Weijun Gao, Nan Zhou, Chris Marnay, 2006/6
9. An Experiment of Perfect Recycle House in Japan, ENERGEX 2006, The 11th International energy conference & exhibition, 12-15 June, Stavanger, Norway, Yongwen Yang, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Nan Zhou, Chris Marnay, 2006/6
10. An Optimization and Assessment on DG adoption in Japanese Prototype, ENERGEX 2006, The 11th International energy conference & exhibition, 12-15 June, Stavanger, Norway, Yingjun Ruan, Weijun Gao, T. Watanabe, H. Takaguchi, 2006/6
11. The Effects of Energy Price and the Equipment Efficiency on the Distributed Energy System in a Science Park of Japan, 2006 ACEEE Summer Study on Energy Efficiency in Buildings August 13-18, 2006 Asilomar Conference Center Pacific Grove, California, Yingjun Ruan, Weijun Gao, T. Watanabe, H. Takaguchi, 2006/8
12. ASSESSMENT OF COMBINED HEAT AND POWER SYSTEM FOR VARIOUS BUILDINGS IN JAPAN, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 1040-1043, Xialu Zhou, Kunio Yoshihara, Weijun Gao, Min Qu, 2006/10
13. Experimental and Theoretical Evaluation of the Performance of a New-style Solar Water Heater with Copper Coil Heat Exchanger, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 904-907, Peng Xu, Hiroki Tsutsumi, Weijun Gao, Ji Xuan, Yongwen Yang, Yingjun Ruan, 2006/10
14. A Basic Research on Heat Energy Resource stored in Urban Sewage, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 914-918, Xindong Wei, Toru MATSUMOTO, Jun Yin, Weijun Gao, Xiaoping Zhao, Ling Jing, Ji Xuan, Peng Xu, 2006/10
15. Research and Development of Solar Assisted Heat Pump System, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 1004-1008, Ximing ZHANG, Xindong Wei, Ji Xuan, Jun Yin, Weijun Gao, Peng Xu, 2006/10
16. Investigation of Energy Service Company Business in China, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 899-903, Ji Xuan, Weijun Gao, Haifeng Li, Yingjun Ruan, 2006/10
17. Economic Optimization and Sensitivity Analysis of Photovoltaic Adoption, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 879-882, Hongbo Ren, Weijun Gao, Yingjun Ruan, 2006/10
18. The Economic Influence of Carbon Tax on Distributed Energy System in Japan, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, October 25~28, 2006 Daegu, Korea, 651-654, Yongwen Yang, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Nan Zhou, Chris Marnay, 2006/10
19. A Questionnaire Survey Study on Energy Consumption of Residential Buildings in Northeast Region of China, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 458-461, YU Liang, Toshiyuki WATANABE, Hiroto TAKAGUCHI, GAO Weijun, RUAN Yingjun, 2007/1
20. Research for Energy Consumption of Residential Building in China: a Questionnaire Survey on Energy Consumption in Changsha and Luoyang, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 76-80, RUAN Yingjun, GAO Weijun, Toshiyuki WATANABE, Hiroto TAKAGUCHI, YU Liang, 2007/1
21. Optimization of PV System for Residential Application --Effect of Carbon Tax and Electricity Buy-back, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 140-144, Hongbo Re, GAO Weijun, RUAN Yingjun, 2007/1
22. Analysis of Hot Water Supply Performance by Using a Solar Water-heating System in Dwelling Houses of

- Kitakyushu, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 145-147, XU PENG, GAO Weijun, Xuan JI, 2007/1
- 2 3. Feasibility Study on Introducing Combined Heat and Power System in Shanghai Chongming Island, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 345-347, Xuan JI, GAO Weijun, 2007/1
- 2 4. Research for energy Consumption of Residential Building in China: A Questionnaire Survey in Northeast and Middle Region, Journal of Harbin Institute of the Technology ISSN1005-9113, 422-425, Xindong Wei, Toru MATSUMOTO, Jun Yin, GAO Weijun, Zhao Xiaoping, Jing Ling, Xuan JI, Xu Peng, 2007/1
- 2 5. Investigation on the Possibility and Potential of Clean Development Mechanism in China, The Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy 2007
- 2 6. January 23- 25, 2007, Shanghai China, 1-8, YU Liang, Toshiyuki WATANABE, Hiroto TAKAGUCHI, GAO Weijun, 2007/1
- 2 7. Optimal Sizing of Grid Connected Photovoltaic Systems for Residential Application, The Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy 2007
- 2 8. January 23- 25, 2007, Shanghai China, 36-41, Le ZHANG, GAO Weijun, Haifeng Li, RUAN Yingjun, Nan Zhou, 2007/1
- 2 9. Estimation of the Energy Saving and Pollution Reduction by Using Heat Energy Resource Stored in Urban Sewage, The Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy 2007 January 23- 25, 2007, Shanghai China, 176-183, Hongbo Ren, GAO Weijun, RUAN Yingjun, 2007/1
- 3 0. Introduction of Solution Tool on the Planning, Design and Maintenance of the Distributed Energy Resource, The Yellow Sea Rim International Exchange Meeting on Building Environment and Energy 2007 January 23- 25, 2007, Shanghai, 101-109, Xuan JI, GAO Weijun, Yongwen Yang, RUAN Yingjun, Nan Zhou, 2007/1
- 3 1. Evaluation of Existing District Heating and Cooling (DHC) System by Using Multi-Standards in Japan Xindong Wei, Toru Matsumoto, Ji Xuan, Ling Jing, Jun Yin, Weijun Gao, and Toshio Ojima (Japan), CAIRO TENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENERGY AND ENVIRONMENT, 2007/3
- 3 2. Optimization of Micro Combined Heat and Power System for Residential Application Hongbo Ren, Weijun Gao and Yingjun Ruan (Japan), CAIRO TENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENERGY AND ENVIRONMENT, 2007/3
- 3 3. Tool Development for the Planning, Design and Maintenance of the Distributed Energy Resource Weijun GAO, Nan Zhou, and Chris Marnay (Japan), CAIRO TENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENERGY AND ENVIRONMENT, 2007/3
- 3 4. Energy Conservation in Lifestyle of Home by Use of Solar Domestic Hot Water System Peng Xu, Weijun Gao, and Ji Xuan (Japan), CAIRO TENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENERGY AND ENVIRONMENT, 2007/3
- 3 5. Current Status of District Heating and Its Policy In China Ji Xuan, Weijun Gao, Haifeng Li, Xindong Wei, and Jun Yin (Japan), CAIRO TENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENERGY AND ENVIRONMENT, 2007/3
- 3 6. 中国における住宅のエネルギー消費に関するアンケート調査研究, 2007/01, 九州大学大学院人間環境学研究院紀要 第11号, 103-110, 于 , 渡辺俊行, 高口洋人, 高偉俊, 張晴原
- 3 7. Feasibility Study on Using Combined Heat and Power Energy Systems for Various Buildings in Japan, 2007/01, 九州大学大学院人間環境学研究院紀要 第11号, 119-126, 阮応君, 渡辺俊行, 高口洋人, 高偉俊
- 3 8. 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その7) 北九州学研都市におけるエネルギーシステムの年度別運転実態に関する調査研究, 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 A-1分冊, 721-722, 張榮, 小川由美子, 李海峰, 高偉俊, 2006/9
- 3 9. 北九州における建築廃棄物リサイクルのプロセス及びエネルギー消費に関する調査研究その1 解体工事に関するアンケート調査とエネルギー消費量の算定, 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 227-228, 于?, 渡辺俊行, 高口洋人, 高偉俊, 阮応君, 2006/9
- 4 0. 真空管式太陽熱温水器の集熱性及び保温性に関する実験 次世代普及型住宅用太陽熱高度利用装置の開発(その1), 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 667-668, 高偉俊, 許鵬, 堤洋樹, 阮応君, 楊湧文, 玄姫, 李海峰, 2006/9
- 4 1. 熱交換器をもつ真空管太陽熱温水器の特性 次世代普及型住宅用太陽熱高度利用装置の開発(その2), 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 669-670, 許鵬, 高偉俊, 堤洋樹, 阮応君, 楊湧文, 玄姫, 李海峰, 2006/9
- 4 2. 中国におけるESCO事業に関する調査研究(その1) 中国におけるESCOの歴史・現状及び問題点, 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 1321-1322, 李海峰, 阮応君, 堤洋樹, 高偉俊, 渡辺俊行, 吉田公夫, 2006/9
- 4 3. 中国におけるESCO事業に関する調査研究(その2) 上海市における建築省エネルギー技術の導入可能性に関する検討, 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 1323-1324, 阮応君, 李海峰, 高偉俊, 堤洋樹, 渡辺俊行, 吉田公夫, 2006/9
- 4 4. 中国におけるESCO事業に関する調査研究(その3) 上海某ホテルの冷暖房における省エネルギー対策効果に関するシ

- ミュレーション解析, 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 1325-1326, 任 洪波, 阮 応君, 李 海峰, 相楽典泰, 高 偉俊, 渡邊俊行, 2006/9
45. 郊外地域におけるコージェネレーションシステムの導入可能性及び評価 上海における地域エネルギーシステム導入に関する研究(その3), 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 1351-1352, 玄 姫, 阮 応君, 高 偉俊, 李 海峰, 2006/9
46. E-GAMSを用いた炭素税の変動に伴う地域エネルギーシステム導入の経済性に関する評価 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その14), 2006年度(関東)日本建築学会大会学術講演会 D-2分冊, 1379-1380, 楊 涌文, 阮 応君, 李 海峰, 高 偉俊, 2006/9
47. その1 北九州市における病院のエネルギー消費量に関する実態 調査病院におけるエネルギー消費に関する調査研究, 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 401-404, 玄 姫, 渡辺仁人, 高 偉俊, 2007/3
48. その2 北九州市の病院におけるエネルギー消費に関する実態調査 北九州市立医療センターにおけるエネルギーシステムの利用状況に関する調査研究, 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 405-408, 渡辺仁人, 玄 姫, 高 偉俊, 2007/3
49. 熱交換器を有する真空管型太陽熱温水器の性能と省エネルギー性に関する研究 実証実験による太陽熱高度利用装置の性能評価(その1), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 125-128, 許 鵬, 小山美紗, 高 偉俊, 堤 洋樹, 楊 涌文, 2007/3
50. 熱交換器を有する真空管型太陽熱温水器の性能と省エネルギー性に関する研究 シミュレーションによる省エネルギー性の評価(その2), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 129-132, 小山美紗, 許 鵬, 堤 洋樹, 高 偉俊, 楊 涌文, 2007/3
51. 住宅における太陽光発電システム導入の最適化モデルの構築及びケース設定 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その16), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 141-144, 任 洪波, 阮 応君, 高 偉俊, 2007/3
52. 戸建住宅の太陽光発電システムにおける経済性の影響要素に関する分析 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その17), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 145-148, 増田早恵, 任 洪波, 阮 応君, 高 偉俊, 2007/3
53. 戸建住宅の太陽光発電システムにおける炭素税・環境補助費の導入による影響解析 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その18), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 149-152, 阮 応君, 任 洪波, 高 偉俊, 渡邊俊行, 2007/3
54. 住宅団地における家庭用コージェネレーションシステムの導入効果に関する検討 地域分散型電源・熱源及び供給システムの統合化に関する研究(その15), 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 245-248, 楊 涌文, 阮 応君, 任 洪波, 高 偉俊, 2007/3
55. 中国における家畜養殖場のメタンガス回収発電システムの導入可能性に関する研究, 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 249-252, 張 榮, 阮 応君, 李 海峰, 任 洪波, 高 偉俊, 2007/3
56. 中国の長沙・洛陽市における住宅エネルギー消費に関する調査研究, 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 257-260, 劉 俊, 高 偉俊, 阮 応君, 渡邊俊行, 2007/3
57. 中国における住宅内のエネルギー消費に関する調査研究
58. その4 瀋陽市、大連市、洛陽市、長沙市の場合, 日本建築学会研究報告九州支部第46号・2環境系, 大分, 2007年3月, 261-264, 于, 渡邊俊行, 高口洋人, 高 偉俊, 2007/3

■ Han Kyoung Ja 韓 京子(東京大学・博士<日本文化研究>:徳成女子大学非常勤講師(在ソウル):2005年度奨学生)

1. ロバートキャンベル、鳥越文蔵、佐藤知乃、武井協三、韓 京子外、『江戸の声—黒木文庫で見る音楽と演劇の世界』、東京大学出版会、2006.6.1
2. 「近松の時代浄瑠璃における謎・難題の趣向」、『日本研究』28号、韓国外国語大学日本研究所、2006、6

■ He Zuyuan 何 祖源(東京大学・博士<先端学際工学/光電子工学>:東京大学大学院工学系研究科電子工学准教授:1998年度奨学生)

査読つき学会誌論文:

1. Z. He, T. Tomizawa, and K. Hotate, "High-speed high-reflectance-resolution reflectometry by synthesis of optical coherence function," IEICE Electronics Express, Vol. 3, No. 7, pp. 122-128, Apr. 2006.
2. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, "Optimization of Brillouin optical correlation domain analysis system using intensity

modulation scheme,” OSA Optics Express, Vol. 14, No. 10, pp. 4256-4263, May 2006.

3. K. Hotate and Z. He, “Synthesis of optical coherence function and its applications in distributed and multiplexed optical sensing,” IEEE/OSA J. of Lightwave Technol., Vol. 24, No. 7, pp. 2541-2557, July 2006 (Invited).

4. K. Hotate, K. Makino, Z. He, M. Ishikawa and Y. Yoshikuni, “High spatial resolution fiber optic distributed lateral stress sensing by stepwise frequency modulation of an super structure grating distributed Bragg reflector laser diode,” IEEE/OSA J. of Lightwave Technol., Vol. 24, No. 7, pp. 2733-2740, July 2006.

5. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, “Distributed strain measurement with millimeter-order spatial resolution based on Brillouin optical correlation domain analysis,” OSA Optics Letters, Vol. 31, No. 17, pp. 2526-2528, Sept. 2006.

6. W. Zou, Z. He and K. Hotate, “Two-dimensional finite element modal analysis of Brillouin gain spectra in optical fibers,” IEEE Photonics Technology Letters, Vol. 18, No. 22, pp. 2487-2489, Nov. 2006.

7. W. Zou, Z. He, M. Kishi and K. Hotate, “Stimulated Brillouin scattering and its dependences on strain and temperature in a high-delta optical fiber with F-doped depressed inner-cladding,” OSA Optics Letters, Vol. 32, No. 6, pp. 600-602, Mar. 2007.

8. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, “Effects of intensity modulation of light source on Brillouin optical correlation domain analysis,” IEEE/OSA J. of Lightwave Technology, in press.

9. W. Zou, Z. He, A. D. Yablon and K. Hotate, “Dependence of Brillouin frequency shift in optical fibers on draw-induced residual elastic and inelastic strains,” OSA Optics Express, in press.

国際会議：

1 0. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, “Brillouin Optical Correlation Domain Analysis System with Kilometer Measurement Range Based on Intensity Modulation Scheme,” CLEO/QELS 2006, Long Beach, CThL4, May 2006.

1 1. X. Fan, Z. He, and K. Hotate, “A novel distributed strain sensor based on dynamic grating in polarization-maintaining erbium-doped fiber,” CLEO/QELS 2006, Long Beach, CThL3, May 2006.

1 2. Z. He, X. Fan and K. Hotate, “High-speed High-accuracy Optical Reflectometry by Synthesis of Optical Coherence Function with Adaptive Carrier and Homodyne Detection,” ECOC 2006, Cannus, Th1.5.6, Sept. 2006.

1 3. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, “Optimization of Brillouin optical correlation domain analysis based on intensity modulation to enlarge the measurable strain limit,” Proc. SPIE Optics East 2006, Vol. 6371, paper 637103, Boston, Oct. 2006.

1 4. W. Zou, Z. He and K. Hotate, “Analysis on the influence of intrinsic thermal stress on Brillouin gain spectra in optical fibers,” Proc. SPIE Optics East 2006, Vol. 6371, paper 637104, Boston, Oct. 2006.

1 5. K.-Y. Song, Z. He and K. Hotate, “Distributed strain measurement with millimeter-order spatial resolution based on Brillouin optical correlation domain analysis and beat lock-in detection scheme,” 18th Intern. Conf. on Optical Fiber Sensors (OFS-18), Cancun, ThC2, Oct. 2006.

1 6. W. Zou, Z. He and K. Hotate, “Stimulated Brillouin scattering and its dependences on temperature and strain in a high-delta optical fiber with F-doped depressed-inner cladding,” 18th Intern. Conf. on Optical Fiber Sensors (OFS-18), Cancun, ThE38, Oct. 2006.

1 7. T. Hayashi, Z. He and K. Hotate, “Multiplexed FBG sensor system by synthesis of optical coherence function with active beat compensation” 18th Intern. Conf. on Optical Fiber Sensors (OFS-18), Cancun, FA2, Oct. 2006.

1 8. W. Zou, Z. He, A. D. Yablon, and K. Hotate, “Effect of draw-induced residual elastic and inelastic strains on Brillouin frequency shift in optical fibers,” OFC 2007, Anaheim, OTuC3, March 2007.

学会の研究会・シンポジウム：

1 9. 何 祖源, 樊 昕昱, 保立和夫, “ホモダイン検波とアダプティブキャリアを導入した光波コヒーレンス関数の合成法による高精度光リフレクトメトリ,” 応用物理学会第 37 回光波センシング技術研究会, LST-37-7, pp. 47-52, 2006 年 6 月 13 日.

2 0. 林 哲也, 何 祖源, 保立和夫, “光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型 FBG センサシステムの能動的ビート周波数補償による高性能化,” 応用物理学会第 37 回光波センシング技術研究会, LST-37-8, pp. 53-58, 2006 年 6 月 13 日.

2 1. 鄒 衛文, 何 祖源, 保立和夫, “光ファイバ中の残留応力のブリルアン利得スペクトルへの影響,” 応用物理学会第 37 回光波センシング技術研究会, LST-37-10, pp. 67-72, 2006 年 6 月 13 日.

2 2. 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “Distributed strain measurement with millimeter-order spatial resolution based on Brillouin optical correlation domain analysis,” 応用物理学会第 37 回光波センシング技術研究会, LST-37-11, pp. 73-78, 2006 年 6 月 13 日.

2 3. 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “Effects of intensity modulation of light source on Brillouin optical correlation domain analysis,” 応用物理学会第 38 回光波センシング技術研究会, LST-38-8, pp. 57-64, 2006 年 12 月 12 日.

2 4. 鄒 衛文, 何 祖源, 岸 真人, 保立和夫, “フッ素添加高デルタ光ファイバ中の誘導ブリルアン散乱とその温度と歪みの分離

測定への応用,” 応用物理学会第 38 回光波センシング技術研究会, LST-38-9, pp. 65-70, 2006 年 12 月 12 日.

25. 何 祖源, “第 18 回光ファイバセンサ国際会議 (OFS-18) 報告,” 応用物理学会第 38 回光波センシング技術研究会, LST-38-25, 2006 年 12 月 12 日 (招待講演).

26. 松尾清隆, 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “時分割位相シフト変調方式による光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型歪センシング,” OPE2006-166, pp. 17-22, 2007 年 2 月 16 日.

27. 欧陽慧, 何 祖源, 宋 光容, 岸 真人, 保立和夫, “連続周波数変調による光コヒーレンス関数合成法を用いた多層表面形状測定法,” 電子情報通信学会光エレクトロニクス研究会, OPE2006-167, pp. 23-28, 2007 年 2 月 16 日.

学会年次大会:

28. 鄒 衛文, 何 祖源, 岸 真人, 保立和夫, “Discriminative Measurement of Temperature and Strain by Using a High-Delta Optical Fiber with F-Doped Depressed Inner-Cladding,” 2006 年度電子情報通信学会ソサイエティ大会, C-3-59, p. 181, 金沢, Sept. 2006.

29. 欧陽慧, 何 祖源, 宋 光容, 岸 真人, 保立和夫, “Multilayered Surface Shape Measurement by Synthesis of Optical Coherence Function with Continuous Frequency Modulation,” 2006 年度電子情報通信学会ソサイエティ大会, C-3-61, p. 183, 金沢, Sept. 2006.

30. 鄒 衛文, 何 祖源, 保立和夫, “Brillouin Frequency Shift in Optical Fibers Influenced by Draw-Induced Residual Elastic and Inelastic Strains,” 2007 年度電子情報通信学会総合大会, C-3-54, p. 210, 名古屋, Mar. 2007.

31. 鄒 衛文, 何 祖源, 保立和夫, “Optical Fiber Design for Brillouin-Based Discriminative Sensing of Strain and Temperature,” 2007 年度電子情報通信学会総合大会, C-3-55, p. 211, 名古屋, Mar. 2007.

32. 松尾清隆, 宋 光容, 何 祖源, 保立和夫, “時分割位相シフト変調方式による光波コヒーレンス関数の合成法を用いた多点型歪センシング,” 2007 年度電子情報通信学会総合大会, C-3-64, p. 220, 名古屋, Mar. 2007.

その他:

33. K. Hotate and Z. He, “Fiber optic nerve systems for smart materials and smart structures - Recent advances in Brillouin optical correlation domain analysis system -,” 東京大学 21 世紀 COE 「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」最終シンポジウム予稿集, pp. 423-435, 東京, Jan. 2007.

34. Z. He and K. Hotate, “Advances in distributed and multiplexed optical fiber sensors for reliability and security applications,” 東京大学 21 世紀 COE 「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」最終シンポジウム予稿集, pp. 437-445, 東京, Jan. 2007.

■ Hu Jie 胡 潔 (お茶の水女子大学・博士<文学>: 名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授: 1998 年度奨学生)

論文 (単著):

1. 「長恨歌・李夫人と桐壺巻再読—「情」へのまなざし—」(『源氏物語の始発—桐壺巻論集』日向一雅・仁平道明編 竹林舎 2006.11)

2. 「養老令における親族呼称について—五等親条と服紀条を中心に—」(『言語文化論集』(名古屋大学) 2007.3)

発表:

3. 「記紀における親族名称について」第十回日本文学年会 2006.8.14 於中国四川大学「律令における親族名称について」(2006 北京大学日本学国際シンポジウム) 2006.10.22 於北京大学

■ Hu Xiuying 胡 秀英 (千葉大学・博士<看護教育学>: 華西病院看護部 (四川省): 2006 年度奨学生)

1. 論文: 胡 秀英, 石垣和子, 山本則子: 帰国十年以上の中国帰国者 1 世及びその中国人配偶者の精神的健康とその関連要因、日本公衆衛生雑誌 (2006 年 4 月投稿、査読中)

2. 論文: Xiuying Hu: THE EFFECTS OF TAI CHI EXERCISE ON HEALTH PROMOTION FOR THE AGED OF JAPANESE RETURNEES FROM CHINA: A RANDOMIZED CONTROLLED TRIAL. The Japanese Society of Physical Fitness and Sports Medicine. (2006 年 9 月投稿、査読中)

3. 発表: Xiuying Hu, Kazuko Ishigaki, Noriko Yamamoto-Mitani: The effects of a cultural health promotion program for Japanese returnees from China: A randomized controlled trial. The 9th East Asia Forum On Nursing Scholars (Bangkok, Thailand), Vol. 9:101, 2006.

4. 発表: 胡 秀英, 盐泽法子, 石垣和子等: 中国 (残留孤儿) 帰国者第 1 代的健康増進多元文化护理干預项目的效果、第 71 届日本民族卫生学会 (日本・沖縄)、论文集 (摘要): 288, 2006.

■ Husel フスレ (東京外国語大学・博士<地域文化>: 昭和女子大学非常勤講師: 2003 年度奨学生)

雑誌論文：

1. 「中国共産党勢力の内モンゴルへの浸透 — “四三会議” にいたるまでのプロセスについての再検討 —」『学苑』第 787 号, 2006 年 5 月, 昭和女子大学近代文化研究所, pp.107-120.
2. 「内モンゴルにおける土地政策の変遷について (1946 ~ 49 年) — 『土地改革』の展開を中心に —」『学苑』第 791 号, 2006 年 9 月, 昭和女子大学近代文化研究所, pp.24-43.
3. 「中国共産党の内モンゴルに対する宗教政策(1946 ~ 48 年)」『学苑』第 793 号, 2006 年 11 月, 昭和女子大学近代文化研究所, pp.56-66.
4. 「中国共産党の対内モンゴル政策 (1925 ~ 36 年) の一考察」『学苑』第 797 号, 2007 年 3 月, 昭和女子大学近代文化研究所, pp.20-31.

学会発表：

1. The Role of the Inner Mongolian People' s Revolutionary Party in Inner Mongolian Autonomous Movements (1945-46), Ninth International Congress of Mongolists Devoted to the 800th Anniversary of the Yeke Mongol Ulus -The Mongolian Statehood: Past and Present, 8-12, August, 2006, Ulaanbaatar.
2. A Re-examination of the Inner Mongolian People' s Revolutionary Party (1925-30), Devoted to the 800th Anniversary of the Yeke Mongol Ulus — International Conference of Munkhtenger Studies, 13-18, August, 2006, Ulaanbaatar.

翻訳：

1. チョイラルジャブ著, フスレ他訳「わたしの経験した 1945 年 — 少年時代の回想 —」『日本とモンゴル』第 40 巻第 2 号, 日本モンゴル協会, 2006 年, pp.128-35.

■ Iko Pramudiono イコ プラムディオノ (東京大学・博士<電子情報工学>：N T T 情報流通プラットフォーム研究所：2002 年度奨学生)

1. Iko Pramudiono, Kyoji Iiduka, Hiroyuki Sato, Takahiko Murayama Context extraction from emails for semantic integration of enterprise data Proc. of International Conference on Information Society (i-Society 2006), Miami, 2006.

■ Jeon Jin Hwan 全 振煥 (東京工業大学・博士<工学>：鹿島建設 (株) 技術研究所主任研究員：2001 年度奨学生)

発表論文：

1. 全 振煥、笠井 浩：副産物を有効利用した速硬性補修モルタルの開発、鹿島技研年報、No.54、2006 年 9 月、pp.167-172.
2. 佐藤敏亮、山本拓治、笠井 浩、全 振煥、丸山 諭、古川政弘：軽量薄肉パネルを用いたトンネル補強技術に関する基礎的研究、日本土木学会第 61 回年次学術講演集 (関東)、第 III 部門、2006 年 9 月、pp.143-144
3. 全 振煥、笠井 浩、矢崎英章、趙 貞基：フライアッシュを有効利用した速硬性補修モルタルの開発に関する研究 (その 1、基礎物性の検討結果)、日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)、2006 年 9 月、pp. 541-542
4. 笠井 浩、全 振煥：石炭灰人工軽量骨材の含水率の違いが高強度軽量コンクリートの収縮性状に及ぼす影響、日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)、2006 年 9 月、pp.101-102
5. 全 振煥、栗原靖夫、天野 彰、松井 勇：無機抗菌剤を混入したモルタルの抗菌性能に関する研究、第 8 回日本・韓国建築材料ジョイントシンポジウム論文集、東京、2006 年 9 月、pp.185-190.

■ Jie Chi Yang 楊 接期 (東京工業大学・博士<教育工学>：国立中央大学資訊工程系助教授：1999 年度奨学生)

Journal Papers：

1. Wu, Y. C., Lee, Y. S., Yang, J. C., & Yen, S. J. (2006). A New Passage Ranking Algorithm for Video Question Answering, Lecture Notes in Computer Science (LNCS): Advances in Image and Video Technology, 4319, 563-572. [SCI, EI]
2. Wu, Y. C., Yang, J. C., Lee, Y. S., & Yen, S. J. (2006). Efficient and Robust Phrase Chunking Using Support Vector Machines, Lecture Notes in Computer Science (LNCS): Information Retrieval Technology, 4182, 350-361. [SCI, EI]

Conference Papers：

1. Yang, J. C., Chen, Y. H., & Chen, C. H. (2007, March). PILE: Physical Interactive Learning Environment. In Proceedings of the First IEEE International Workshop on Digital Game and Intelligent Toy Enhanced Learning (DIGITEL 2007). Jhongli, Taiwan. 218-220.
2. Lai, C. H., Yang, J. C., & Liang, J. S. (2006, December). Situated Learning in Class Using Pocket PCs via a Mobile Learning System. In Proceedings of 2006 International Workshop on International Workshop on Human-Computer Interaction and Learning Technologies (In conjunction with International Computer Symposium--ICS 2006). Taipei, Taiwan.
3. Chen, F. C., Jiang, H. M., Yang, J. C., & Lee, Y. W. (2006, November). Probing Technology as Affordances for Negotiating

Meaning in the Elementary Science Classroom: A Participation Perspective. In Proceedings of the International Conference on Computers in Education (ICCE 2006). Beijing, China.

4. Wu, Y. C., Yang, J. C., & Lin, Q. X. (2006, July). Description of the NCU Chinese Word Segmentation and Named Entity Recognition System for SIGHAN Bakeoff 2006. In Proceedings of the Fifth SIGHAN Workshop on Chinese Language Processing. Sydney, Australia. 209-212.
5. Yang, J. C., & Chen, C. H. (2006, July). Design of Inquiry Learning Activity Using Wireless and Mobile Technologies. In Proceedings of the 6th IEEE International Conference on Advanced Learning Technologies (ICALT 2006). Kerkrade, The Netherlands. 398-402.
6. Wu, Y. C., Lee, Y. S., & Yang, J. C. (2006, June). The Exploration of Deterministic and Efficient Dependency Parsing. In Proceedings of the 10th Conference on Computational Natural Language Learning (CoNLL'2006). New York, USA. 241-245.
7. Wu, Y. C., Tsai, K. C., Lee, Y. S., & Yang, J. C. (2006, June). Light-Weight Multi-Document Summarization Based on Two-Pass Re-ranking. In Proceedings of the 6th Document Understanding Conference (DUC'2006). New York, USA. 78-84.
8. Yang, J. C., & Hsu, Y. C. (2006, June). A Film-based Concordancer for Enhancing Colloquial Comprehension. In Proceedings of the 10th Annual Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2006). Beijing, China. In Chinese.
9. Lin, T. Y., Yang, J. C., & Chen, C. H. (2006, June). Shared Display Groupware Supported Mobile Learning. In Proceedings of the 10th Annual Global Chinese Conference on Computers in Education (GCCCE 2006). Beijing, China. In Chinese.

Research Reports :

1. Yang, J. C. (2006, August). Curriculum and learning activity design of science experiment based on experience learning theory: A case study on Newton's second law of motion. In Chinese. [NSC 94-2520-S-008-009]
2. Chan, T. W., Ko, H. W., Chen, F. C., Ho, C. W., Yang, J. C., Hwang, W. Y., Liu, C. C., Chou, C. Y., Chang, L. J., Lin, C. B. (2006, July) Building Learning Companion in Learning Context Supported by Wireless, Mobile, and Digital Tangible Technologies - contributing to G1:1 - a global network of collaborating researchers and test-beds. In Chinese. [NSC 94-2524-S-008-003]

■ Kim Minsuk 金 玟淑 (早稲田大学<建築学> : 2007 年度奨学生)

発表論文 :

1. 米澤貴紀・中川 武・坂本忠規・金 玟淑「海神を祀る神社の祭神の性格と立地条件の関係—壹岐の式内社について—」『2006 年度日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、日本建築学会、2006.9、pp.61 ~ 62
2. 金 玟淑・中川 武・坂本忠規・米澤貴紀「文献から見る新羅の海神祭及び祭場の立地条件について」『2006 年度日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2、日本建築学会、2006.9、pp.297 ~ 298
3. Takeshi Nakagawa, Minsuk Kim, Takanori Yonezawa and Nozomi Tamura, " A Network of Politics, Culture and Worship on Genkainada (玄界灘)(1)", A+T : Neo-Value in Asian Architecture, Vol.1, The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Organized by ASC/AIJ/AIK, 2006. 10, pp.368 ~ 371
4. Minsuk Kim, Takeshi Nakagawa, Takanori Yonezawa and Nozomi Tamura, " A Network of Politics, Culture and Worship on Genkainada (玄界灘)(2)", A+T : Neo-Value in Asian Architecture, Vol.1, The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Organized by ASC/AIJ/AIK, 2006. 10, pp.372 ~ 377
5. Takanori Yonezawa, Takeshi Nakagawa, Minsuk Kim and Nozomi Tamura, " A Network of Politics, Culture and Worship on Genkainada (玄界灘)(3)", A+T : Neo-Value in Asian Architecture, Vol.1, The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Organized by ASC/AIJ/AIK, 2006. 10, pp.378 ~ 383
6. Nozomi Tamura, Takeshi Nakagawa, Minsuk Kim and Takanori Yonezawa, " A Network of Politics, Culture and Worship on Genkainada (玄界灘)(4)", A+T : Neo-Value in Asian Architecture, Vol.1, The 6th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Organized by ASC/AIJ/AIK, 2006. 10, pp.384 ~ 389
7. Minsuk Kim, " A Study on the Conservation and Repair Work of the Main Hall of the Korean Buddhist Temple Sudeoksa (修徳寺) in the Japanese Colonial Period", Reassessing East Asia in the Light of Urban and Architectural History, Vol. II , Executive Committee of the International Conference on East Asian Architectural Culture Kyoto 2006, 2006.12, pp.101 ~ 106
8. 米澤貴紀、中川 武、金 玟淑「宗像大社の三宮構成の性格について」、『2006 年度(第 77 回)日本建築学会関東支部研究報告集』II、日本建築学会関東支部、2007.3、pp.261 ~ 264
9. 金 玟淑「朝鮮総督府技手小川敬吉の朝鮮古蹟保存事業における役割について」、『2006 年度(第 77 回)日本建築学会関東支部研究報告集』II、日本建築学会関東支部、2007.3、pp.361 ~ 364

雑誌投稿 :

1. 金 玟淑「レポート：日韓における文化財建造物保存の興隆と展開」、『月刊建築文化』304、韓国：月刊建築文化社、

2006.9、pp.158～161

報告書：

1. 『日韓交流史から捉えた玄界灘における政治・文化・礼拝ネットワーク—韓半島と壱岐・対馬・沖ノ島・宗像大社の関係性—』、早稲田大学建築史研究室、2006.10
2. 『平成 18 年度東京都墨田区照田家住宅実測調査報告書』、墨田区教育委員会、2006 年 11 月／以上 2 件とも調査機関は早稲田大学建築史研究室（主査：中川 武）

■ Kim Woesook 金 外淑（早稲田大学・博士<健康科学>：兵庫県立大学看護学部心理学系准教授（在神戸）：1997 年度奨学生）
著書：

1. 金 外淑 2006 認知行動療法を導入した糖尿病患者への心理的援助 久保（編著）糖尿病患者への心理的援助，医歯薬出版，38-47.

学術論文：

2. 気分変動を伴う強迫性障害患者への認知行動的介入 2006 心身医学，46（3）223-231.
3. 全般性不安障害患者への認知行動的介入の一例 2006 行動療法研究，32（1）66-67.
4. 全般性不安障害患者への認知行動的介入 2006 行動療法研究，32（2）143-156.

報告書：

5. 兵庫県阪神南県民局県民生活部阪神南 100 万人健康づくり実践プログラム「子どもからはじめる健康づくり実践プログラム」報告書 2006.
6. 働ヘルス・サイエンス・センター：糖尿病患者の生活習慣病改善への認知行動介入プログラムの臨床的有効性の検討 報告書 2006.
7. 高齢者にとって望ましい口腔保健行動の検討とガイドラインの作成共同研究 報告書 2006.

国内学会：

8. 多木淳子・金 外淑 2006 糖尿病セルフケアに対する認知が乏しい患者の認知・行動変化への援助—認知行動的教育プログラムを用いて，第 14 回関西行動医学会.

国際学会：

9. W.S. Kim and J. Taki (2006) Cognitive Behavioral Health Education For Diabetes Patients. Cape Town, South Africa.
10. S.Kawamata, C.Kawakami, W.S. Kim (2006) Effects E-Mail-based intervention for NIDDM patients toward changes in their lifestyle. Cape Town, South Africa.

■ Kim Yeonkyeong 金 娟鏡（東京学芸大学<心理学>：近畿大学九州短期大学非常勤講師：2005 年度奨学生）

著書：

1. 金 娟鏡 [中高年期の心理] 中年期の「自分」探し 応用心理学事典（日本応用心理学会編）丸善，Pp.108 - 109 2007 年 1 月

論文：

2. 金 娟鏡 母親役割行動と母親役割満足感—幼児をもつ母親を対象にした日韓比較— 学校教育学研究論集 第 15 号 Pp.1 - 14 2007 年 3 月

学会発表：

3. 金 娟鏡 育児ネットワークの「支援機能」が母親役割に及ぼす影響Ⅰ—ネットワーク構成員と支援タイプの日韓比較— 日本応用心理学会 第 73 回大会発表論文集，p.89 2006 年 9 月
4. 金 娟鏡 育児ネットワークの「支援機能」が母親役割に及ぼす影響Ⅱ—母親役割満足感と関連した日韓比較— 日本発達心理学会 第 18 回大会発表論文集，p.763 2007 年 3 月

■ Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ（東京都立科学技術大学・博士<工学システム>：松下電器産業株式会社本社 R&D 部門（在英レディング）：2001 年度奨学生）

1. V. Kostov, M. Yoshioka, J. Ozawa, "Arrival Place Presumption Based on Destination Entropy from Driving Route History", IEEE IV 2006, IEEE Intelligent Vehicle Symposium, pp. 583-588, June 2006, Tokyo, Japan.
2. V. Kostov, E. Naito, T. Tajima, J. Ozawa, "Evaluation of Appropriate Body Placement and Notification Modality of a Wearable Clip-on Notifier Using an Experimental Platform", Journal of Advanced Computational Intelligence and Intelligent Informatics, pp. 111-117, Vol.11 No.1, 2007.
3. J.Ozawa, E. Naito, V. Kostov, "Collaborative Filtering based on Date of Item Selection and its Evaluation by Ringing Tone

Download History", Journal of Japan Society for Fuzzy Theory and Intelligent Informatics, pp.799-808, Vol. 18, No. 5, 2006.

■ Lee Jea Woo 李 濟宇 (早稲田大学・博士<建設工学>：鹿島建設(株)技術研究所主任研究員：2004年度奨学生)
論文：

1. LEE, Jeawoo and Hamada, M., Experimental Approach for Behavior of Buried Pipe Subject to Thrust Fault Movement, Proceedings of 8th U.S. National Conference on Earthquake Engineering, Paper No. 1044, CD-ROM version, April, 2006
2. Song, B., Yasuhara, K., Sakamoto, W., LEE, Jeawoo, Stiffness Comparison of Non-plastic Silt due to Bender Element and Direct Simple Shear Test, Journal of Korean Geoenvironmental Engineering Society, Vol.8, No.1, pp. 41~47, Feb. 2007.

講演：

3. LEE, Jeawoo, Yoshizako, K., Sakanoue, T., Ohbo, N., Numerical Estimation for Sliding of Gentle Slope on Saturated Fine Sand Subject to Sinusoidal ground motion, 第 61 回年次学術講演会講演概要集, 土木学会, pp.591~592, 2006 年 9 月

記事：

4. LEE, Jeawoo and Kitamoto, Y., Introduction of Kajima Technical Research Institute with focus on Geotechnical Engineering, Geoenvironmental Engineering, Vol.7, No.3 pp.54~56, Sep. 2006

■ Lee JooHo 李 周浩 (東京大学・博士<電子工学>：立命館大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授 (在滋賀)：1998年度奨学生)

1. 田岡康裕、納谷 太、野間春生、小暮 潔、李 周浩「小型 Bluetooth デバイスを用いた移動体の近接距離推定法」第 7 回計測自動制御学会 (S I C E) システムインテグレーション部門講演会 Pp768-769
2. 原田哲也、伴 重尚、李 周浩「映像投影装置を持つ移動ロボットによる避難誘導システム」第 7 回計測自動制御学会 (S I C E) システムインテグレーション部門講演会 Pp760-761

■ Li Chengri 李 成日 (慶應義塾大学<政治学>：2006年度奨学生)

1. 李 成日「中国の『独立自主外交』と新しい朝鮮半島政策」、慶應義塾大学大学院法学研究科編、『法学政治学論究』、第 71 号、2006 年冬季号 (12 月)
2. 李 成日「中国の朝鮮半島政策に関する研究—中韓外交正常化過程を中心に」、日本政治社会学会第 4 回大会、2006 年 11 月 24 日発表 (慶應義塾大学三田キャンパス)
3. 李 成日「北朝鮮の核実験と中国の対応」、韓国延世大学校 BK21・慶應義塾大学 21COE - CCC 共催シンポジウム、2006 年 12 月 22 日発表 (韓国、ソウル、延世大学)

■ Li Enmin 李 恩民 (一橋大学・博士<社会学>：桜美林大学リベラルアーツ学群准教授：1997年度奨学生)

編著・訳書：

1. 佐藤東洋士・李 恩民編『東アジア共同体の可能性——日中関係の再検討——』、2006 年 7 月、御茶の水書房・東京、全 560 頁
2. 山崎朋子著 李 恩民監訳『朝陽門外の彩虹』 監訳・共訳 2007 年 3 月 上海人民出版社・上海 全 284 頁

論文：

3. 李 恩民「輿論走向与日本の対華外交行為分析」、馮崇義・江沛・鄧麗蘭編『二十世紀的中国』、2006 年 7 月、中国社会科学出版社・北京、全 498 頁、pp.396 ~ 405
4. 李 恩民「花岡和解研究序説」、関口グローバル研究会編『戦後和解プロセスの研究』、2006 年 7 月、S G R A 刊、pp.13 ~ 27
5. Li Enmin, "Social Identity and Informal Diplomacy: the Issue of Taiwan", International Symposium "Japanese Foreign Policy---Perspectives from Chinese Scholars", co-sponsored by the Center for Asian Studies, American University and the Reischauer Center (SAIS) of Johns Hopkins University, December 5-6, 2006, Washington, DC, USA

社会活動：

6. 李 恩民「外国出身専任教員の役割明確に 相互理解促進の国際貢献と考えよ」、国際留学生協会『向学新聞』第 180 号、2006 年 10 月 1 日掲載

■ Li Gangzhe 李 鋼哲 (立教大学<経済学>：北陸大学未来創造学部教授：1999年度奨学生)

著書：

1. 『東アジア共同体を設計する』(共著) 2006.6 日本経済評論社, pp.116-24.

- 『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』（主編）2006.7 アジア経済文化研究所、pp.3-19.
- 『北東アジア・グラウンドデザイン 2005』（共著）2006.7 総合研究開発機構、pp.271-84.

学術論文：

- 「東北アジア統合論のアプローチと東洋の理想」2006.4.1 外国為替貿易研究会『国際金融』Vol.1163、pp.26-33.
- 「共同体推進戦略で3国鼎立新時代の構築を」2006.5.9-16 時事通信『世界週報』、pp.40-43.
- 「中国経済を見る視点」（2006 夏）明治大学軍縮平和研究所『軍縮・地球市民』No.5、pp.84-91.

評論・コラム・レポート、新聞記事：

- 「日本語熱 海外普及に戦略的対応を」2006.9.16『朝日新聞』コラム

講演・報告：

- 「環日本海交流圏の多文化理解のため」2006.6 龍谷大学
- 「中国東北部延辺朝鮮族自治州の経済社会について」2006.6 日韓マーケティングフォーラム
- 「グローバル化時代の中国朝鮮族の経済社会」2006.7 北東アジア共同体構想研究会
- 「移行経済における初期条件の比較と北朝鮮の政治状況」「日中韓学術セミナー：北朝鮮の改革可能性」（韓国ソウル極東問題研究所）2006.7
- 「放任主義経済が改革・開放経済か—北朝鮮は中国の改革・開放の経験から何を学べるのか—」、「日中韓学術セミナー「北朝鮮の改革可能性」聖学院大学、2006.11

■ Liang Xingguo 梁 興国（東京大学・博士<化学生命工学>：名古屋大学物質制御工学専任講師：2001 年度奨学生）

論文：

- Asanuma, H.; Liang, X.G.; Nishioka, H.; Matsunaga, D.; Liu, M.Z.; and Komiyama, M. Synthesis of Azobenzene-Tethered DNA for Reversible Photo-Regulation of DNA. *Nature Protocol* 2007, 2, 203-212.
- Nishioka, H.; Kashida, H.; Komiyama, M.; Liang, X.G.; and Asanuma, H. Incorporation of Methyl Group on Azobenzene for the Effective Photo-Regulation of Hybridization and Suppression of Thermal Isomerization. *Nucleic Acids Research Supplement* No.50, 2006, 85-86.
- Liang, X.G.; Li, B.C.Y.; Jensen, K.; and Frank-Kamenetskii, M.D. Ab initio DNA Synthesis Accelerated by Endonuclease. *Nucleic Acids Research Supplement* No.50, 2006, 95-96.
- Hayashi, H.; Liang, X.G.; Zhao, J.; Komiyama, M.; and Asanuma, H. Activation of DNA Enzyme 10-23 by Tethering an Intercalator to Its Backbone. *Nucleic Acids Research Supplement* No.50, 2006, 167-168.
- Asanuma, H.; Hayashi, H.; Zhao, J.; Liang, X.G.; Yamazawa, A.; Kuramochi, T.; Matsunaga, D.; Aiba, Y.; Kashida, H.; and Komiyama, M. Enhancement of RNA Cleavage Activity of 10-23 DNAzyme by Covalently Introduced Intercalator. *Chem. Commun.* 2006, 5062-5064.

学会発表：

- 林 寛之、趙 静、梁 興国、小宮山 真、浅沼浩之「インターカレーター導入による高活性 DNA エンザイムの開発」、第 55 回高分子学会年次大会、2006 年 5 月 24 ~ 26 日、名古屋国際会議場、名古屋
- 梁 興国、劉 明哲、小宮山 真、浅沼浩之「プロモーターの人工デバイス化による転写反応の光スイッチング」、第 16 回バイオ・高分子シンポジウム、2006 年 8 月 1 ~ 2 日、上智大学、東京
- 梁 興国、林 寛之、趙 静、浅沼浩之、小宮山 真「インターカレーターの主鎖への導入による 10-23 型 DNA エンザイムの高活性化」、バイオ関連化学合同シンポジウム、2006 年 9 月 28 ~ 30 日、京都大学、京都
- 浅沼浩之、西岡英則、榎田 啓、小宮山 真、梁 興国「DNA 二重鎖形成の効率的な光制御を目指したアゾベンゼン誘導体の設計」、バイオ関連化学合同シンポジウム、2006 年 9 月 28 ~ 30 日、京都大学、京都
- 西岡英則、榎田 啓、梁 興国、浅沼浩之「アゾベンゼン導入 DNA によるハイブリダイゼーションの光制御 - オルト位へのメチル基導入による高効率光制御機構の解明 -」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪
- 梁 興国、伊藤 浩、西岡英則、浅沼浩之「アゾベンゼン導入 RNA を用いた RNA 二重鎖の形成と解離の光制御」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪
- 林 寛之、梁 興国、趙 静、小宮山 真、浅沼浩之「化学修飾による 10-23 DNA エンザイムの高機能化」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪
- 和久田竜史、梁 興国、西岡英則、浅沼浩之「修飾アゾベンゼンを導入した光応答性プロモーターによる転写反応の高効率光制御」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪
- 竹中信貴、梁 興国、西岡英則、浅沼浩之「アゾベンゼンを導入した DNA によるハイブリダイゼーションの光制御 - アゾベンゼンのパラ位修飾によるハイブリダイゼーションの逆スイッチング -」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~

28日、関西大学、大阪

10. 梁 興国、岩田佳久、Maxim, Frank-Kamenetskii、浅沼浩之「制限酵素とDNAポリメラーゼの併用による de Novo DNA 合成」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪

11. 網 健裕、櫻田 啓、梁 興国、藤本健造、浅沼浩之「マイナーグループでのアゾベンゼン同士のスタッキングを利用した DNA 二重鎖形成の光制御」、日本化学会第 87 春季年会、2007 年 3 月 25 ~ 28 日、関西大学、大阪

■ Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻（東京大学＜比較文化＞：2006 年度奨学生）

1. 『『三国志画伝』における『通俗三国志』の理解—挿絵を手掛かりとして—』（『表象と表現』第 30 回国際日本文学研究会集會會議録、2007 年 3 月）

■ Lim Chuan-Tiong 林 泉忠（東京大学博士＜国際政治学＞：琉球大学法文学部助教授（在那覇）：2000 年度奨学生）

1. 『新世紀移民的變遷』（共著、夏誠華編、玄奘大學海外華人研究中心、2006 年 4 月）担当部分：『香港共同體』創建的明與暗：從「多元移民文化」的摸索到「新港粵文化霸權」的建立」（401-430 頁）。

2. 『『祖國』的弔詭——『現代衝擊』下沖繩身 份的『脱中入日』現象』（『中國大陸研究』第 50 卷第 1 期、2007 年 3 月、47-67 頁）。

■ Lin Shaoyang 林 少陽（東京大学＜総合文化—言語情報科学＞：東京大学大学院総合文化研究科教養学部特任助教授：2003 年度奨学生）

著書：

1. 『阿羊詩選』（詩文集）福州：海風出版社、2006 年 12 月、全 157 頁。

論文：

2. 「『レトリック』＝『修辞』なのか——漢字圏批評史における「文」と「修辞」の関係』（『言語・情報・テキスト』13 卷（2006 年 5 月）、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻紀要、2006 年 5 月、81 - 126 頁）。

3. 「未完の『白話文』——『音』を巡る中国近代詩の反省史、』（『九葉読詩会』第 2 号、駒沢大学・九葉読詩会、2006 年 5 月、68 - 101 頁）。

4. 「『文学』という概念——『文』『史』の学としての夏目漱石の『文学論』、』（『日本思想史研究』第 6 号（東京大学日本思想史・思想史論研究会、2006 年 5 月）、76 - 108 頁）。

5. 「新詩史的叙述」（『読書』2006 年 5 月号、北京：三聯書店、23 - 32 頁）。

6. 「『人民』から『国民』へ——中国の民族主義を考える」（『世界』総 759 号、岩波書店、2006 年 12 月、294 - 304 頁）。

エッセイ：

7. 「八十年代和一些時間的碎屑」（『読書』2007 年 2 月号、北京：三聯書店、137 - 140 頁）。

■ Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ（東京医科歯科大学・博士＜公衆衛生学＞：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員：2001 年度奨学生）

1. Ebana Y, Ozaki K, Inoue K, Sato H, Iida A, Lwin H, Saito S, Mizuno H, Takahashi A, Nakamura T, Miyamoto Y, Ikegawa S, Odashiro K, Nobuyoshi M, Kamatani N, Hori M, Isobe M, Nakamura Y, Tanaka T. A functional SNP in ITIH3 is associated with susceptibility to myocardial infarction. *Journal of Human Genetics*. 2007;52(3):220-9. Epub 2007 Jan 9.

■ Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャンナ（東京大学・博士＜宗教学宗教史＞：名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授：2002 年度奨学生）

1. （共著）“Universalizing Salvation: Modernization, Globalization and Transformations in Buddhist Social Welfare in Japan” in Ruben Habito and Keishin Inaba (ed.) *The Practice of Altruism: Caring and Religion in a Global Perspective*. Cambridge Scholars Press Ltd., London, U.K., 2006.

2. （共著）「日本仏教と社会福祉——近代化とグローバル化における展開——」（『宗教と福祉』皇學館大学出版部、2006 年 8 月）

3. （単著）「感化事業、社会福祉、海外支援活動——仏教感化救済会系教団にみられる近代仏教福祉の発展過程——」（『日本仏教社会福祉学会年報』第 37 号、2006 年 9 月、日本仏教社会福祉学会）

■ Park Sohyun 朴 昭炫（東京大学＜文化資源学＞：2007 年度奨学生）

1. 「金（キム）基（キ）昶（チャン）（1914 - 2000）の＜古翫＞（1939）にみる『理想の観覧者像』」（『文化資源学』4 号（2006 年））

2. 「もう一つの冷戦：占領期（1945 - 1951）日本における『民主主義的』フランス美術の軌跡」（『現代美術史研究』（2006

年、ハンゲル)

3. 「特集：美術館という政治 ニューヨーク近代美術館の『文化的冷戦』—『MoMA をモデルにする』—ということの「政治」を考えるために」、『イメージ&ジェンダー』7号 (2007年)

■ Porras Rojas Oscar ポラス・ロハス・オスカル (東京海洋大学<応用環境システム学> : 2007年度奨学生)

1. Porras, Imazu and Fujisaka. "Investigation and Analysis of the Maritime Casualties occurred in the Pacific side of the Central American Region between 1980 and 2004" . The Journal of Japan Institute of Navigation. Vol.114, pp, 235-241. 2006.3
2. Porras, Imazu and Fujisaka. "Comparative Analysis of the Marine Components Applied in the Prevention of the Central American Region Casualties" . The Journal of Japan Institute of Navigation. Vol.115, pp, 25-30. 2006.9
3. Porras, Imazu and Fujisaka. "Social, Technology, Scientific and Educational Factors Associated to the Central American Region Maritime Problematic" . First Science and Technology. Society & Innovation CTS+I Iberoamerican Congress. Mexico DF, Mexico. 2006.6.22
4. Porras, Imazu and Fujisaka. "Maritime Casualties Occurred Onboard Ships Registered under the Central American Region Flag States" . XII th International Associations of Institute of Navigation World Congress. Jeju, Korea. Vol.1, pp, 59-64. 2006.10.18
5. Porras, Imazu and Fujisaka. "Central American Region Maritime Organization and their Role in the Occurrence of Maritime Casualties" . Asia Institute of Navigation Conference 2006. Jeju, Korea. pp 166-175. 2006.10.21
6. Porras, Imazu and Fujisaka. "Measures to Reduce the Occurrence of Maritime Casualties on the Central American Region" . The Journal of Japan Institute of Navigation. Vol.116, pp, 39-44. 2007.3

■ Shi Jianming 施 建明 (筑波大学・博士<数理工学・社会工学> : 室蘭工業大学情報工学科准教授 (在室蘭) : 1995年度奨学生)

1. Fengmei Yang, Guowei Hua, Hiroshi Inoue and Jianming Shi, "Two bi-objective optimization models for competitive location problems", International Journal of Information Technology & Decision Making, 5 (2006) 531-544.

■ Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトコ (千葉大学・博士<人工システム科学> : 千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授 : 2001年度奨学生)

原著論文 :

1. J.T. Sri Sumantyo, "Coastal Infrastructural Status - Post Pangandaran Tsunami," Asian Journal of Geomatics (Thailand : AARS)
2. J.T. Sri Sumantyo, F. Nishio, H. Sutanta, K. Wikantika, P.D. Kunte, I. Indreswari, "Inventory of damaged infrastructures in Yogyakarta earthquake area," Asian Journal of Geomatics, Vol. 6, No. 3, pp. 9 - 15, July 2006 (Thailand : AARS)
3. Yashon Ouma and J.T. Sri Sumantyo, Multiscale remote sensing data segmentation and post-segmentation change detection based on logical modeling: theoretical exposition and experimental results for forestland cover change analysis, Computers & Geosciences (Elsevier) (accepted : 27 February 2007)
4. J.T. Sri Sumantyo and K. Ito, "Simple satellite-tracking dual-band triangular-patch array antenna for ETS-VIII applications," Radiomatics - Journal on Communications Engineering, 2004 (Bandung: Radiomatics)(submitted: 13 August 2004, accepted: 16 December 2004)
5. J.T. Sri Sumantyo and K. Ito, "Circularly polarised equilateral triangular patch array antenna for mobile satellite communications," IEE Proc. IET Microwaves, Antennas & Propagation, Vol. 153, Issue 6, pp. 544-550, December 2006 (London: IEE)
6. I.W.Sandi Adnyana, F. Nishio, J.T.Sri Sumantyo and G. Hendrawan, "Monitoring of land use changes using aerial photograph and IKONOS image in Bedugul, Bali," International Journal of Remote Sensing and Earth Sciences, Vol. 3, pp.51-58 (Bali : IReSES)
7. J.T. Sri Sumantyo and K. Ito, "Circularly polarised equilateral triangular patch antenna for mobile satellite communications," IEE Proc. Microwaves, Antennas & Propagation, Vol. 153, Issue 3, pp. 282-286, June 2006 (London: IEE)
8. D. Delaune, J.T. Sri Sumantyo, K. Ito, and M. Takahashi, "Circularly polarized rounded-off triangular microstrip line array antenna," Journal of The Communication Society - The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers (IEICE), Vol. E89-B, No. 4, 1372, April 2006 (Tokyo: IEICE)

特許 :

1. 通信用アンテナ (円偏アンテナ)、国内特許、出願番号：2006-023701、2006年1月31日
2. Antennas for Communications (Circularly polarized antennas), International patent No. PCT/JP2007/51351, 29 January 2007

■ Sun Junyue 孫 軍悦 (東京大学<言語情報科学>：2006年度奨学生)

1. 共著『東アジア共生モデルの構築と異文化研究—文化交流とナショナリズムの交錯—』(法政大学国際日本学研究所編、2006.5)
2. 論文「翻訳の歴史と〈歴史〉の翻訳—井上靖『天平の螢』の中国語訳について—」(『日本近代文学』第74集、2006.5)
3. 「「反日愛国教育」実態を示さぬ性急な解釈 不安・不快をおそれず交流を」(『朝日新聞』夕刊、連続インタビュー「歴史認識」中国編②、2006.4.11)
4. 「日本と中国の狭間から～中国人留学生座談会～」(『軍縮地球市民』第5号、明治大学軍縮平和研究所、2006.7)
5. 書評「日本文明化的設計—評『福沢諭吉「文明論之概略」精読—」(『中国図書評論』2006年第8期、2006.8)
6. 翻訳「心脳営繕術の時代」(『読書』2007年第3期、三聯書店、2007.3)
7. 共訳『法と暴力の記憶—東アジアの歴史経験—』(東京大学出版会、2007.3)

■ Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア (ハイデルベルク大学[学習院大学]・博士<美術史>：ハイデルベルグ大学東アジア研究センター教授(在ハイデルベルグ)：1996年度奨学生)

1. Review article: JOSEF KREINER (ed.): Japanese Collections in European Museums. Reports from the Toyota-Foundation-Symposium Königswinter 2003, 2 vols., Bonn: Bier'sche Verlagsanstalt; vol. I (256 p.), vol. II (774 p.), maps, tables, a bibliography, and several indices, Japonica Humboldtiana 10 (2006), 141-153.
2. 近代国家の象徴としての古代女神——紙幣における「神功皇后」の表象——(Kindai kokka no shōchō toshite no kodai megami: Shihei ni okeru 'Jingū kōgō no hyōshō: Ancient Goddesses as Symbols of the Modern Nation State: The Representation of 'Empress Jingū' on Bank Notes), in Kajima bijutsu kenkyū 2006, 327-338.
3. Arts of Japan: The John C. Weber Collection; Kunst aus Japan: Die John C. Weber Sammlung, New York, editor of two separate exhibition catalogues in German and English, Berlin: Museum für Ostasiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin, 2006.
4. "Lives of the Japanese Picture," in: Trede, Melanie, ed.: Arts of Japan: The John C. Weber Collection; and "Das wandelbare japanischen Bild", in: Trede, Melanie, ed.: Kunst aus Japan: Die John C. Weber Sammlung, New York, both: Berlin: Museum für Ostasiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin, 2006, 20-27.

■ Wang Jianhong 王 劍宏 (早稲田大学<建設工学>：2007年度奨学生)

- 1) 王 劍宏, 劉 新栄 :ABOUT THE DEVELOPMENT AND USE OF UNDERGROUND SPACE IN JAPAN」, Journal of Underground Space and Engineering ,CS RME. , Vol.2 , No.3, pp.349-353,2006.
- 2)Wang, J.H., Koizumi, A., Watanabe, A.: On Buckling of Inner Steel Pipe under External Pressure for Water Supply Lines Constructed in Shield-driven Tunnel, Proc. of the tenth East Asia-Pacific Conference on Structural Engineering & Construction (EASEC-10), Bangkok, Thailand, Vol.4, pp. 341-356, August 3-5, 2006..
- 3) 王 劍宏, 渡辺 淳, 小泉 淳：大深度地下補剛リブがある水道管の外圧による座屈挙動とその座屈設計法に関する一考察, トンネル工学論文集, pp. 133-143, 2006.

■ Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ ナリン (電気通信大学・博士<電子工学>：シュルンベルジェ(株)電子エンジニア：2006年度奨学生)

投稿論文：

1. N. S. Weerasinghe, C. Han, and T. Hasimoto, "CS-CDMA/CP with ZCZ Codes from an M-Sequence and its Performance for Downlink Transmission over a Multipath Channel," accepted for publication in IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences. (採録決定)

国際学会発表論文：

1. D. Chen, Nalin S. Weerasinghe, and T. Hashimoto, "Space-time convolutional spreading CDMA over MISO multipath Rayleigh fading channels," IEEE International Conference on Communications (ICC), June 11-15, 2006, Istanbul, Turkey. (発表者)

国内学会・シンポジウム発表論文：

2. Nalin S. Weerasinghe and T. Hashimoto, "User efficient CS-CDMA/CP scheme with m-ZCZ codes over a multipath fading channel with excess spreads," in Proc. The 29th Symposium on Information Theory and Its Applications (SITA), Hakodate, Japan, Nov. 28 - Dec. 01, 2006, vol. II, pp.601-604.

■ Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン (ハーバード大学 [上智大学]・博士<宗教学>：カルフォルニア大学バークレー校日本研究センター教授 (在米バークレー)：1997 年度奨学生)

1. "Religion in Early Modern Japan." In Nanzan Guide to Japanese Religions. Paul Swanson and Clark Chilson, eds. Honolulu: University of Hawaii Press, 2006: 184-201.

■ Wong Kin Foon Kevin 王 健歡 (総合研究大学院大学・博士<統計科学>：統計数理研究所外来研究員：2005 年度奨学生)

1. Wong KFK, Ozaki T, Galka A, Sadato N (2006) A new horizon of Akaike noise contribution ratio theory for instantaneous causality, 2006 年度統計関連学会連合大会

2. Wong KFK, Galka A, Yamashita O, Ozaki T (2006) Modelling non-stationary variance in EEG time series by state space GARCH model, Computers in Biology and Medicine, Volume 36, Pages 1327-1335

■ Woo Seonghoon 禹 成勳 (東京大学・博士<建築学>：学術振興会外国人特別研究員：2006 年度奨学生)

審査付論文：

1. A Study on the Restoration of the Layout of the Main Palace of Koryo Dynasty, journal of Architectural History, Vol.15 No.2, The Korean Association of Architectural History, pp.59-79, Aug.2006.

■ Yan Hainian 顔 海念 (東京大学<国際保健>：2007 年度奨学生)

1. 論文：Phan TG, Yan H, Khamrin P, Quang TD, Dey SK, Yagyu F, Okitsu S, Muller WE, Ushijima H. Novel intragenotype recombination in sapovirus. Clin Lab. 2006;52(7-8):363-6.

2. 論文：Phan TG, Yan H, Li Y, Okitsu S, Muller WE, Ushijima H. Novel recombinant norovirus in China. Emerg Infect Dis. 2006 May;12(5):857-8.

3. 論文：Yoshinaga M, Phan TG, Nguyen TA, Yan H, Yagyu F, Okitsu S, Muller WE, Ushijima H. Changing distribution of group A rotavirus G-types and genetic analysis of G9 circulating in Japan. Arch Virol. 2006 Jan;151(1):183-92. Epub 2005 Aug 8.

4. 発表：第 54 回日本ウイルス学会学術集会 2006(名古屋) 先天性及び後天性感染においてサイトメガロウイルス遺伝子型に差はあるか？ 顔海念、古谷野伸、錫谷達夫 ほか

5. 発表：31st International Herpesvirus Workshop, July 22-28, 2006 (Seattle, USA). Epidemiology of Congenital CMV Infection in Pediatric Patients with Severe Sensorineural Hearing Loss: Prevalence, Viral Loads, and Genotypes. Inoue N, Suzutani T, Ogawa H, Koyano S, Baba Y, Yan H et al.

■ Zhang Shao-Min 張 紹敏 (東京大学・博士<医学>：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助理教授 (在米ハーシー)：1997 年度奨学生)

1. Chen, L., Zhang, SS., Barnstable, CJ., and Tombran-Tink, J. PEDF induces apoptosis in human endothelial cells by activating p38 MAP kinase dependent cleavage of multiple caspases. Biochem Biophys Res Commun. 2006 348:1288-95,

2. Zhang, X., Shan, P., Jiang, G., Zhang, SS., Otterbein, LE., Fu, XY., and Lee PJ. Endothelial STAT3 is essential for the protective effects of HO-1 during lethal hyperoxic lung injury. FASEB J. 2006 12:2156-8.

3. Zhang, SS., Xu, X., Liu MG., Zhao, H., Soares, MB., Barnstable, CJ., and Fu, XY. A biphasic pattern of gene expression during mouse retina development. BMC Developmental Biology 2006 6(1):48.

4. Xu, X., Zhang, SS., Barnstable, CJ., and Tombran-Tink, J. Molecular phylogeny of the antiangiogenic and neurotrophic serpin, pigment epithelium derived factor in vertebrates. BMC Genomics 2006 7:248.

5. DeWan, A., Liu*, MG., Hartman*, S., Zhang* SS., Liu, D., Zhao, C., Tam, P., Chan, W., Lam, D., Snyder, M., Barnstable, CJ., Pang, C., and Hoh, J. HTRA1 promoter polymorphism in wet age-related macular degeneration. Science 2006 314(5801):989-92.

* Equal contribution

■ Zhu Tingyao 朱 庭耀 (東京大学・博士<船舶海洋工学>：(財) 日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客員教授：1996 年度奨学生)

1. Tingyao Zhu, Ryuji Miyake, Toshiyuki Shigemi & Atsushi Kumano: "Nonlinear Corrections on Extreme Wave-induced Ship

Motions and Loads of Merchant Ships” , Proceeding of the 7th International Conference on Hydrodynamics, HYDRODYNAMICS VII - Theory and Applications, Vol. 1, pp. 163-170, ICHD2006, 4-6 October 2006, the Island of Ischia, Italy.

2. Tingyao Zhu, Toshiyuki Shigemi, Ryuji Miyake, Atsushi Kumano and M. Abdul Rahim: “Comprehensive Studies on the Wave Load Analysis and Structural Strength Assessment of Container Ships” , the Proceeding of the International Conference on Design & Operation of Container Ships, pp. 75-94, the Royal Institution of Naval Architects, 22-23 November 2006, London, England.

3. Ryuji Miyake, Tingyao Zhu, Atsushi Kumano: “Study on Vertical Wave Bending Moment of a Large-Container Ship” , Proceeding of the 2nd Pan Asian Association of Maritime Engineering Societies (2nd PAAMES) and the Advanced Maritime Engineering Conference (AMEC 2006), 18-20 October 2006, Jeju Island, Korea.

4. 三宅竜二、朱庭耀、松本俊之、熊野厚：” コンテナ船のバウフレア形状が波浪縦曲げモーメントに及ぼす影響について”、日本船舶海洋工学会講演会論文集第3号、2006.

◇ 設立の趣旨について

近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができますようお手伝いさせていただきたいと思っております。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（IFAWPICA）会長、世界建設業連盟（CICA）会長、及び社団法人CISV日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。CISV（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思っております。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



◇ 2006年度業務日誌

- 4月 7日 4月例会：食事会（於：結庵）
- 5月 9日 5月例会：個人面談（15日まで）
- 14日 第23回S G R Aフォーラム「日本人と宗教：宗教って何なの？」
（於：東京国際フォーラム）S G R Aレポート# 34
- 18日 2005年度会計監査
- 6月 7日 2005年度年報発行
- 7日 第25回理事会・評議員会（2005年度事業報告と収支決算報告）・親睦会（6月例会）
- 7月 1日 募集要項配布開始（関東地方の大学に通知・ホームページに掲載）
- 6日 7月例会：鹿島建設技術研究所見学
- 21日 軽井沢リクリエーション旅行（23日まで）
- 22日 第24回S G R Aフォーラム in 軽井沢
「ごみ処理と国境を越える資源循環：私が分別したゴミはどこへ行くの？」
（於：鹿島建設軽井沢研修センター）S G R Aレポート# 35
- 9月 1日 9月例会：個人面談（8日まで）
- 23日 第25回S G R Aフォーラム「ITは教育を強化できるのか」
（於：東京国際フォーラム）S G R Aレポート# 36
- 30日 2007年度奨学生応募締め切り（応募者総数 142名）
- 10月 2日 渥美奨学生の集い 三井物産戦略研究所所長、寺島実郎先生講演「21世紀、日本の進路」
- 7日 2007年度奨学生書類審査
- 18日 2007年度奨学生候補者予備面接（11月1日まで）
- 21日 S G R Aフォーラム in 北京「若者の未来と日本語」～パネルディスカッション～
（北京大学日本語文学科設立60周年記念「2006北京大学日本学研究国際シンポジウム」特別企画）
（於：北京大学生命科学学院報告庁）S G R Aレポート# 37 予定
- 11月 5日 第6回日韓アジア未来フォーラム in 葉山「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
（於：鹿島建設葉山研修センター）S G R Aレポート# 38 予定
- 7日 11月例会：個人面談（14日まで）
- 26日 2007年度奨学生最終選考・面接
- 12月 4日 12月例会：食事会（於：ブルガリア料理「ソフィア」）
- 1月13日 新年会（1月例会）
- 2月 1日 2月例会：個人面談（7日まで）
- 17日 第26回S G R Aフォーラム「東アジアにおける日本思想史：私たちの出会いと将来」
（於：東京国際フォーラム）S G R Aレポート# 39 予定
- 3月 3日 2006年度奨学生研究報告会（3月例会）
- 9日 第26回理事会・評議員会（2007年度事業計画と収支予算案）
- 24日 2006年度奨学生最終食事会（於：シンガポール料理「新東記」）

◇ 2006 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入		事業費	36,200,000
基本財産配当金	24,000,000	管理費	11,708,486
基本財産債券利息	10,385,000	次期繰越収支差額	67,310,115
寄附金収入			
寄附金	16,250,000		
雑収入			
運用財産受取利息	23,630		
貸与奨学金返戻収入	1,243,700		
前期繰越収支差額	63,316,271		
収入合計	115,218,601	支出合計	115,218,601

◇ 貸借対照表 (2007 年 3 月 31 日現在)

(単位：円)

資産の部		正味財産の部	
I. 流動資産		I. 基本金	
1. 現金	106,128	1. 基本財産	2,908,000,000
2. 普通預金	27,203,987	II. 当期収支差額	67,310,115
流動資産計	27,310,115		
II. 固定資産			
基本財産			
1. 投資有価証券	2,907,825,863		
2. 普通預金	174,137		
基本財産計	2,908,000,000		
奨学資金積立基金			
定期預金	40,000,000		
固定資産計	2,948,000,000		
資産合計	2,975,310,115	正味財産合計	2,975,310,115

◇財団人名簿

(2007年6月現在)

★理事・監事

理事長	渥美 伊都子	C I S V日本協会会長・日本ユニセフ協会理事・アジア婦人友好会副会長
常務理事	今西 淳子	C I S Vピースファンド理事・関口グローバル研究会代表
理事	渥美 直紀	鹿島建設副社長
	井内 慶次郎	日本視聴覚教育協会会長
	片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
	加美山 節	国際基督教大学評議員
	加藤 秀樹	構想日本代表・慶應義塾大学教授（総合政策）
	佐藤 直子	ナオコ・カンパニー代表
	田村 次朗	慶應義塾大学教授（法学）
	遠山 友寛	T M I 総合法律事務所パートナー（弁護士）
	永山 治	中外製薬社長
	野辺地 篤郎	聖路加国際病院顧問
	宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー（弁護士）
監事	石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長
	松岡 誠司	元日本債券信用銀行会長

★評議員

青木 生子	日本女子大学名誉教授（国文学）
明石 康	日本紛争予防センター会長
秋山 光和	東京大学名誉教授（美術史）
渥美 雅也	東京水産振興会振興部長
蟻川 芳子	日本女子大学副学長（環境分析化学）
岩崎 統子	フォニックス英語研究会代表
植田 兼司	弁護士
長岡 實	東証正会員協会顧問・日本たばこ産業顧問・(財)資本市場研究会理事長
根津 公一	東武百貨店社長
堀田 健介	モルガン・スタンレー証券株式会社会長
水谷 弘	専修大学名誉教授（比較文化）
山縣 睦	山縣有朋記念館理事長・栃木産業社長
八城 政基	(株)新生銀行シニアアドバイザー

★選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学教授（産業機械工学）
	井上 博允	独立行政法人日本学術振興会監事（情報工学）
	片岡 達治	（理事）
	佐野 みどり	学習院大学教授（美術史学）
	田村 次朗	（理事）
	平川 均	名古屋大学教授（経済学）

★事務局

事務局長	嶋津 忠廣
事務局	谷原 正
	伊藤 扶佐江

◇奨学生名簿

1995年度奨学生

- Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学：（在ローマ）
- Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）一橋大学
- Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部環境空間デザイン学科教授／西安交通大学兼職教授（在北九州）
- Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：日本SGI(株)
- Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部講師
- Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授
- Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育義明大学校流通経営学科 専任講師（在ソウル）
- Park Jungran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科助教授 / 金海市総合社会福祉館館長（在釜山）
- Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科准教授（在室蘭）
- Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師
- Youn Seokhee 尹 錫姫：博士（商学）専修大学

阪神大震災被災特別奨学生

- Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）
- Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：中華民国台湾中央大学企業管理系副教授（在台北）
- Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：(株)東洋インキ製造

1996年度奨学生

- Chantachote, Viravat チャンタチョテ、ピラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部専任講師（在バンコク）
- Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：イスラム文化センター代表（在京都）
- Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co. Ltd 社長（在ヤンゴン）
- Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部助教授（在仁川）

Lee Nae-Chan 李 來賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学知識経済学科（在ソウル）
 Nam Kijeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：国民大学国際学部助教授（在ソウル）
 Park Keunhong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
 Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：Senior Application Engineer, ATMI MLS Surface Preparation Group（在米ペンシルベニア）
 Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学 [学習院大学]：ハイデルベルグ大学東アジア研究センター教授（在ハイデルベルグ）
 Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）
 Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客員教授

1997年度奨学生

De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（日本研究）東京工業大学：ナポリ国立大学「オリエンターレ」専任講師（在ナポリ）
 Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：（在ロンドン）
 Isananto, Winursito イサナント、ウィルヌシト：博士（応用科学）慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革関連産業開発研究センター研究員（在ジョクジャカルタ）
 Kim Woesook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系准教授（在神戸）
 Laohaburanakit, Kanokwan Katagiri Noi ラオハブラナキット、カノックワン・カタギリ、ノイ：博士（言語学）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語科助教授
 Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学校日本学科教授（在ソウル）
 Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学リベラルアーツ学群准教授
 Nizamidin Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）
 Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：マサチューセッツ総合病院心臓病科研究員（在ボストン）
 Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学 [上智大学]：カルフォルニア大学バークレー校日本研究センター教授（在米バークレー）
 Zhang Shao-Min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助理教授（在米ハーシー）

1998年度奨学生

Adiole Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所研究員（在ナイジェリア）
 Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：NTT データクリエイション(株)（在川崎市）
 He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻准教授
 Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授（在名古屋）
 Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：ピタカ研究所所長（在ソウル）
 La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国土舘大学政経学部非常勤講師
 Lee JooHo 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命舘大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授（在滋賀）
 Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：文部科学省大学共同利用機関総合地域環境学研究所外国人特別研究員
 Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグサム病院放射線科研究員（在ボストン）
 Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子(株)

Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ゲノムセンター（在ニューヨーク）

1999年度奨学生

Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学生物学部遺伝子研究室助教授（在ブラジル）

Hong Kyung-Jin 洪 京珍：博士（化学工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）

Hou Yankun 侯 延琨：博士（物理電子化学）東京工業大学：リーマンブラザーズ香港支店（在香港）

Ju Yan 具 延：博士（農学）筑波大学：クヴァナ・パルピング（株）

Li Gangzhe 李 鋼哲：立教大学（経済学）：北陸大学未来創造学部教授

Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントン・プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部講師（在バンコク）

Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（教育社会学）一橋大学：人間科学研究所研究員（在ハノイ）

Wang Dan 王 旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト／昭光物産(株)

Yang Jie Chi 楊 接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学資訊工程系助教授（在台湾桃園）

Yeh Wen-chang 葉 文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：台湾科技大学電子工程科助理教授（在台北）

Zhou Haiyan 周 海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：金沢大学付属病院第一内科（金沢）

2000年度奨学生

Jin Zhengwu 金 政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝(株)

Jung Jae Ho 鄭 在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子LCD総括LCD開発室開発3Team（在韓 CheonAnn）

Jung Sung Chun 鄭 成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（在ソウル）

Ko Hee Tak 高 熙卓：博士（総合文化）東京大学：世界文化総合研究所副所長（在ソウル）

Lim Chuan-Tiong 林 泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部助教授（在那覇）

Molnar, Margit モルナール・マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：OECD研究員（在パリ）

Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：日本大学特別研究員（日本学術振興会特別研究員）、東京大学客員研究員

Ren Yong 任 永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在米バッファロー）

Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：新日本監査法人・Ernst & Young ODA 部

Wu Yuping 武 玉萍：博士（医学）千葉大学：大阪大学神戸ポートアイランドB.T.センター（在神戸）

Xu Xiangdong 徐 向東：博士（社会学）立教大学：キャストコンサルティング代表取締役／専修大学講師

Zeng Zhinong 曾 支農：博士（アジア文化）東京大学：(株)アジア太平洋国際交流協会社長

2001年度奨学生

Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：滋賀県立大学人間文化学部准教授（在彦根市）

Fan Jianting 範 建亭：博士（経済学）一橋大学：上海財経大学国際工商管理大学院助教授（在上海）

Jeon Jin Hwan 全 振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設(株)技術研究所主任研究員

Jiang Huiling 蔣 恵玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：(株)NTTドコモ無線リンク開発部アンテナ伝搬技術研究員

Jin Xianghai 金 香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学政治学部副教授／同北東アジア国際政治研究所研究員（在延吉）

Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（工学システム）東京都立科学技術大学：松下電器産業株式会社R&D部門（在英レディング）

Lee Hyun-Young 李 炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）
 Lee Young-Suk 李 英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）
 Liang Xingguo 梁 興国：博士（化学生命工学）東京大学：名古屋大学物質制御工学専任講師（在名古屋）
 Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（公衆衛生学）東京医科歯科大学：理化学研究所遺伝子多型研究センター研究員
 Qi Jin Feng 奇 錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）
 Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ・スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授

2002年度奨学生

Abliz Yimit アブリズ イミテ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院教授（在ウルチム）
 Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：大韓民国産業資源部所属産業研究院副研究委員／高麗大学非常勤講師（在ソウル）
 Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：台湾大学非常勤講師（在台北）
 Hu Bingqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋）
 Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：N T T情報流通プラットフォーム研究所
 Jo Gyuhwan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：地球科学総合研究所地質部石油地質部門主任研究員／早稲田大学客員研究員
 Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：（在ウランバートル）
 Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャナ：博士（宗教学宗教史）東京大学：名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授（在名古屋）
 Park Young-June 朴 榮濬：博士（国際関係論）東京大学：国防大学校安全保障大学院助教授（在ソウル）
 Sun Jianju 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本語文化学部助教授（在北京）
 Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学：イリノイ大学コンピュータサイエンス学部ポスドク研究員（在シカゴ）
 Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部准教授

2003年度奨学生

Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韓国天安）
 Chang Kuei-e 張 桂娥：東京学芸大学（学校教育学—言語文化）：東呉大学非常勤講師（在台北）
 Husel フスレ：博士（地域文化）東京外国語大学：昭和女子大学非常勤講師
 Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：仁荷大学・国民大学非常勤講師（在ソウル）
 Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科専任講師（在福岡）
 Lin Shaoyang 林 少陽：博士（総合文化—言語情報科学）東京大学：東京大学総合文化研究科・教養学部特任助教授
 Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：（株）インフォデリバ上海事務所代表
 Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外語学院日語教研室主任（在北京）
 Tisi, Maria Elena ティシ、マリア エレナ：博士（児童文学）白百合女子大学：白百合大学児童文化研究センター研究員
 Yamaguchi Ana Elisa ヤマガチ、アナ エリーザ：一橋大学（社会学）：上智大学外国語学部嘱託講師
 Yun Hui-suk 尹 熙淑：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院（K I M M）材料技術研究所（在慶南道昌原）
 Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：東海大学短期大学部特任講師

付録

2004年度奨学生

- Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル ニヤメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：国立精神・神経センター研究員
Chin, Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ ヤンヤン：博士（ジェンダー研究）お茶の水女子大学：ポノマ大学ポスドク講師（在カリフォルニア）
Lee Jea Woo 李 済宇：博士（建設工学）早稲田大学：鹿島建設（株）技術研究所研究員
Lee Sung Young 李 承英：博士（応用言語学）筑波大学：慶北大学校日語日文学科非常勤講師（在大邱）
Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授（在松山）
Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長
Napoleon ナポレオン：博士（機械制御システム）東京工業大学：日産自動車（株）総合研究所
Khomeenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：早稲田大学研究員、学術振興会外国人研究員
Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：東京大学（宗教史学）：富坂キリスト教センター研究主事
Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：国立台湾大学法律学系助理教授（在台北）
Yang Myung Ok 梁 明玉：お茶の水女子大学（人間発達科学）
Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：香港城市大学生物化学係研究員（在香港）

2005年度奨学生

- Bao Lian Qun 包 聯群：東京大学（言語情報科学）：東北大学東北アジア研究センター客員研究員（在仙台）
Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・パークレー研究所訪問研究員（在カリフォルニア）
Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：徳成女子大学非常勤講師（在ソウル）
Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター社
Kim Bumsu 金 範洙：博士（学校教育学—社会系教育（歴史））東京学芸大学：東京学芸大学非常勤講師
Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）：近畿大学九州短期大学非常勤講師
Lan Hung Yueh 藍 弘岳：東京大学（地域文化研究）
Tenegra Brenda Resurecion Tiu テネグラ ブレンダ レスレシジョン ティウ：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：（在フィリピン）
Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理計算科学）：Freshwind Information Technology Corporation 取締役
Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：慶応大学グローバルセキュリティー研究所研究員
Wong Kin Foon 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院大学：統計数理研究所外来研究員
Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：野村総合研究所（在上海）

2006年度奨学生

- Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）：ベトナム社会科学院文化研究所（在ハノイ）
Hu Xiuying 胡 秀英：博士（看護教育学）千葉大学：華西病院看護部（在成都）
Hyun Seungsoo 玄 承洙：博士（地域文化）東京大学：韓国外国語大学ロシア研究所研究員（在ソウル）
Li Chengri 李 成日：慶応義塾大学（政治学）
Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：東京大学（比較文化）
Mohottala Shirmila モホッタラ・シャミラ：東京大学（情報理工学）
Pantcheva Elena Latchezarova パンチェワ・エレナ：博士（日本研究）千葉大学：ヒルトンホテル勤務
Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）
Sim Choon Kiat 沈 俊傑：東京大学（教育学）

Sun Junyue 孫 軍悦：東京大学（言語情報科学）

Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ・ナリン：博士（電子工学）電気通信大学：シュルンベルジェ（株）電子エンジニア

Woo Seonghoon 禹 成勲：博士（建築学）東京大学：学術振興会外国人特別研究員

2007年度奨学生

Abuduxuker Mijiti アブドシュクル・メジテ：東京医科大学（外科学）

Chan Chai-fong 詹 彩鳳：東京大学（地域文化研究）

Deng Fei 鄧 飛：東京大学（先端IT科学）

Gangbagana ガンバガナ：東京外国語大学（地域文化研究）

Kim Minsuk 金 玟淑：早稲田大学（建築学）

Lee Eungyong 李 垠庚：東京大学（地域文化研究）

Park Sohyun 朴 昭炫：東京大学（文化資源学）

Porrás Rojas Oscar ボラス・ロハス・オスカル：東京海洋大学（応用環境システム学）

Quan Mingai 権 明愛：日本社会事業大学（社会福祉学）

Shulatov Yaroslav シュラトフ・ヤロスラブ：慶応義塾大学（政治学・歴史学）

Wang Jian Hong 王 劍宏：早稲田大学（建設工学）

Yan Hainian 顔 海念：東京大学（国際保健学）

◇ 2008年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2007年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

(1) 応募資格（下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのあるもの。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍するものも含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にあるもの。
3. 国際理解と親善に関心を持ち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のあるもの。

(2) 交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年7月に2泊3日の軽井沢リクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得したのものには、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいるものは日本への旅費にあてることができません。

(3) 奨学金の詳細

1. 奨学金は月額20万円です。2008年度は12名採用します。
2. 奨学金の支給は1年間(2008年4月～2009年3月)です。継続は認められません。

(4) 募集方法

1. 奨学金希望者は、2007年7月1日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ(<http://www.aisf.or.jp>)からもダウンロードできます。
2. 2008年度申込は、2007年9月1日から9月30日まで、郵便にて受け付けます。

(5) 選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は12月上旬に通知します。

財団法人 渥美国際交流奨学財団 Atsumi International Scholarship Foundation

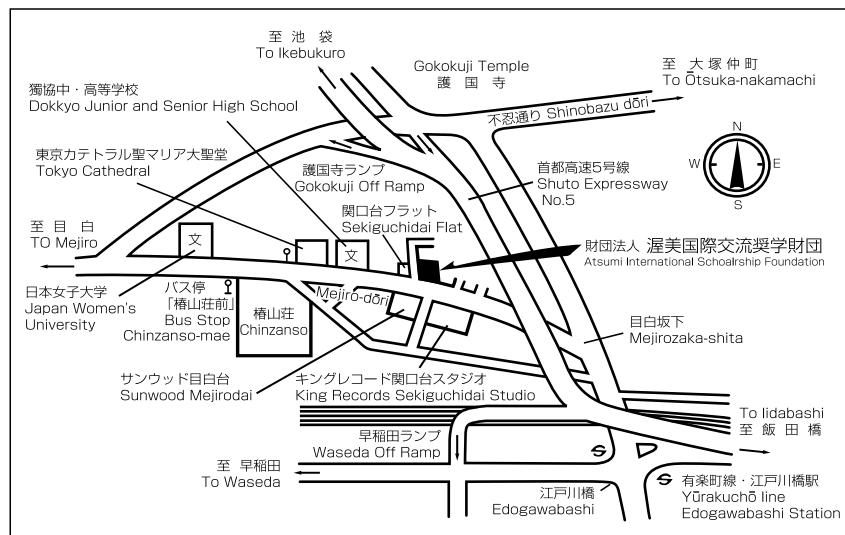
〒112-0014 東京都文京区関口3丁目5番8号

3-5-8 Sekiguchi Bunkyo-ku Tokyo 112-0014 Japan

Phone:03-3943-7612 Fax:03-3943-1512

<http://www.aisf.or.jp>

E-mail:office@aisf.or.jp



★ JR山の手線目白駅より、都バス 61 番 新宿駅西口行、「椿山荘前」下車・徒歩 3 分
Take The 61 bus from Mejiro Station (JR Yamanote line) and get off at the “Chinzansomae” stop. 3 min. walk.

★ 営団地下鉄有楽町線「江戸川橋」(出口 A 1) 下車・徒歩 10 分

Get off at Edogawabashi station from the Yurakucho subway line. (A1 exit 10 min.walk)